

スラヴ学論集

Slavia  
Iaponica

Studies in Slavic Languages and Literatures

第 25 号

日本スラヴ学研究会

2022



## 追悼 三谷恵子さん

——「まえがき」に代えて——

本年1月17日、日本スラヴ学研究会企画編集委員長の三谷恵子さんが、急逝なさいました。死の直前まで、ふだん通りに（と私たちには感じられましたが）委員長の職務を遂行しておられました。突然の悲報に接した事務局・企画編集委員一同は、言葉を失いました。

ご葬儀は1月25日に執り行われましたが、家族葬で、というご遺族の意向を尊重して、本研究会の名義で弔電と供花をお送りするに留めました。同日に東京大学スラヴ語スラヴ文学研究室の主催で行なわれた、ズームを通しての黙祷会に参加することで、追悼の気持ちを表明する機会がありました。

スラヴ言語学者としての、クロアチア研究者としての、文学翻訳家としての、友人と同僚としての、三谷恵子さんの足跡については、本号に収録された4編の追悼文をお読みください。この場では、日本スラヴ学研究会企画編集委員長としての、三谷さんのお姿を追想することにします。

三谷恵子さんは2019年6月に、本研究会の企画編集委員長に推挙されて以来、研究会の活動を中心となって統率してこられました。その時以来、研究会の活動に関連して私たちが受け取ったメールは、200通を越えます。

2020年秋に「日本学術会議会員任命問題」が起こったとき、研究会としてどのように対応すべきかについて、企画編集委員のあいだで真剣な議論が交わされたことがあります。三谷さんは、本研究会のような学術組織が、こうした「政治的行為」を行なうことの意味を熟考されて、「踏み絵化」や「付和雷同」を避けつつ、委員会内部でのコンセンサス形成を重んじて、議論をまとめられました。同年10月26日付けで、本研究会としての態度表明にいたったのは、三谷さんの統率力のたまものです。声明の文面を作成されたのも三谷さんでした。

2021年春にジェンダーバランスの問題について、研究会としての態度を議論する機会があったときも、三谷さんの対応は慎重でした。ご自身が「活躍する女性」のお手本のような立場にありながら、情緒論に流されることなく、事柄の本質を冷静に見つめられて、女性教員の負担増につながる傾向があることを、さりげなく指摘なさいました。

研究会のさまざまな企画についても、率先してイニシアティブを取られました。昨年11月28日に本研究会が主催したシンポジウム「スラヴ世界のSF」の折には、企画立案の段階から、講演者の人選、ポスターの手配などにいたるまで、実務を一手に

引き受けられました。シンポジウムの席では、楽しげに（と私たちには見えましたが）司会を務められ、この企画を成功に導かれました。私たちはいま、三谷さんのこうしたお仕事ぶりが、病を押して、であったことを知り、愕然としています。

最後にいただいた本年1月6日付けのメールの文面は、研究会の運営についての、短いけれど暖かい配慮がこもったものでした。三谷さんはこのメールをお書きになった直後に、病状が悪化して入院なさり、そのまま不帰の客になられました。私情はいつさいお洩らしにならず、最後まで委員長としての職務をまっとうなさいました。ほんとうに責任感の強い、心の優しい方でした。もう三谷さんの爽やかな笑顔に接することができないのかと思うと、寂しさがこみ上げてきます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

三谷さんの編集者としての、最後のお仕事のひとつとなった『スラヴ学論集』第25号を、謹んで御霊前に捧げたいと思います。

長與 進（日本スラヴ学研究会会長）

追悼文を書き終えた後の本年2月24日に、ロシア軍のウクライナ侵攻という異常事態が発生しました。ロシアとウクライナが戦火を交えるなど、スラヴ学研究者にとっては「悪夢」に等しい出来事です。この事態に対して本研究会は、2月28日付けで「抗議声明」を発表しましたが、声明文を作成する過程で私たちが意識したのは、三谷さんだったら、どのように対応されたらだろうか、ということでした。三谷さん、私たちの行動と声明文の内容は、適切なものだったでしょうか。

（2022年3月5日追記）

# 目 次

## スラヴ学論集 2022 年 (第 25 号)

### 【三谷恵子先生追悼文】

三谷恵子さん追悼	石川達夫..... 7
三谷恵子さんを悼んで	服部文昭..... 11
燃え尽きたスラヴ言語学の星、三谷恵子さんを悼む	沼野充義..... 13
三谷恵子先生を偲ぶ	阿部賢一..... 17
海外からの追悼メッセージ	Darko Žubrinić..... 21
『スラヴ学論集』(旧『西スラヴ学論集』)に掲載された三谷恵子先生の文章	貞包和寛..... 25

### 【シンポジウム】

The World of <i>Cosmos</i> : Science and Fiction in Bulgaria in the Second Half of the 20th Century	Milen Martchev..... 27
ピョートル・シュルキンの〈ディストピア四部作〉——外部への脱出を求めて	菅原 祥..... 49

### 【論文】

イディッシュ語で書かれたウクライナ文学 ——ドヴィド・ベルゲルソンとボグロム以後の経験	田中壮泰..... 63
The Grammaticalization of the Numeral <i>edin</i> in Bulgarian	Eleonora Yovkova-Shii..... 83
The Silesian Problem in Poland through the Prism of the Monitoring Cycles of the Framework Convention for the Protection of National Minorities: Comprehensive Analysis from the First Cycle to the Fourth	Kazuhiro Sadakane..... 103

【書評】

- 石川達夫『チェコ・ゴシックの輝き——ペストの闇から生まれた中世の光』  
—Lesk České Gotiky— (成文社、2021年、190頁) .....藤田教子..... 125

---

まえがき .....	長與 進 .....	3
執筆者一覧.....		131
活動記録.....		132
編集後記.....		135
日本スラヴ学研究会会則.....		136
『スラヴ学論集』投稿規定 .....		137
日本スラヴ学研究会奨励賞に関する内規.....		138

【三谷恵子先生追悼文】

## 三谷恵子さん追悼

石川達夫

誰からも優秀だと言われ、誰からも一目置かれ、誰からもその死を惜しまれる人というのは、そうそういるものではないだろう。三谷恵子さんは、そんな人だった。

三谷さんは、日本ロシア文学会が初めて導入した学会賞——学会報告優秀賞——の第1回の受賞者(1989年度)になった。既に広島大学に勤めていた私は、いわゆる「東欧革命」が起きて自由化したチェコスロヴァキアに久しぶりに行って、チェコ語の「夏の学校」に参加したのだが、そこで偶然、米国ブラウン大学のスラヴ言語学者フィードラー・上田雅子さん——ちなみに私の高校の後輩に当たる——と同じクラスになった。彼女と雑談をしていて三谷さんの話しになった時、上田さんは私が読んでいない三谷さんの受賞論文を既に読んでいて、素晴らしい論文だと賞賛していた。専門分野の違う私は、専門を同じくする同世代のいわばライバルからそんな風に賞賛される論文は、本当に素晴らしいものなのだろうと思ったものだ。

三谷さんは、東大のロシア語ロシア文学科(現在のスラヴ語スラヴ文学科)で課程博士を取得した最初期——二年目——の人にもなった。私の世代の頃までは、教員も学生も、院生が博士論文を書くなどということは念頭になかったが、文科省からの圧力もあったのだろう、急に川端香男里先生が、博士論文を書いて課程博士を取得することが望ましいという「難題」を出され始めたのである。三谷さんは、そのような先生たちからの「難題」に真面目に取り組み、それを見事に達成した最初期の人だったのだ。しかも、三谷さんは留学先のザグレブ大学でも既に博士号を取得していたので、外国の大学と東大露文科の両方で博士号を——しかも別のテーマで！——取得した最初の人になった。のんびりやっていて、博士論文を書くことなど思いも寄らなかった私などにとって、それは驚きと刺激であった。

若き日に外国と日本の大学で2つの博士号を取得したということにも示されているように、三谷さんは大変精力的な人であった。しかし、体の方は必ずしも丈夫ではなかったようだ。確か、駒場の(教養課程の)時だったか、病気で一年間休学したと聞いた。その後も、何度か手術をするという話を聞いた。三谷さんは、机に向かって仕事をし始めると「根っ子が生えたようになる」とご自分でおっしゃっていたが、机に向かうとそんなに根気が続かず、よく外に行って体を動かすアウトドア派の私は、

あまり丈夫そうではない人がそんな風に根を詰めて仕事をしていて大丈夫なのだろうかと思ったものだ。晩年は日本ロシア文学会の会長と日本スラヴ学研究会の企画編集委員長の仕事を精力的にこなされ、東大の総長補佐も務められたという——しかも闘病しながら——のだから、驚きである。

三谷さんは大変優秀な人だったが、隙がなくて近寄りがたい人ではなく、偉ぶらず、どこか飄々とした所さえあった。懇親会では意外にお酒を飲み、決して酔っ払うようなことはなかったが、寛いでざっくばらんな話しもされた。既に私が神戸大学、三谷さんが京都大学に勤めていた時のこと、研究会の後の懇親会で私たちと亀山郁夫さんの三人が同じテーブルを囲んで話しをしていた酒席でのことだったと思うが、三谷さんは全く意外なことに「方向音痴」で外国へ行くときよく道に迷うという話しをされた。それで私は、こんなに優秀な人にも弱点があるんですね、と感想を述べた覚えがある。三谷さんは物事を——恐らくはご自分のことも、ご自分の死病のことさえも——冷静で客観的に見る、非常に理知的な人だった。

最後の数ヶ月間、私は日本スラヴ学研究会の企画編集委員として一緒に仕事をしたり、三谷さんから次回の日本ロシア文学会大会の開催校を引き受けるように依頼されてそのための話し合いをしたり——コロナ禍のためもっぱらメールだったが——、割合頻繁に三谷さんとメールのやりとりをしていた。その過程でご病気のこと、病状が悪化していること、そしてついには「終活」を始めていることなどを知らされ、大変驚くと同時に、その精力的なお仕事ぶりから信じられない気がし、また無理をして仕事を続けているのではないかと心配もした。三谷さんからの最後のメールは2022年1月5日付けのもので、『週刊読書人』から私の『チェコ・ゴシックの輝き——ペストの闇から生まれた中世の光』の書評を依頼されて書き、1月14日号に掲載されることを知らせてくださったメールだった。その際、「字数が限られているため大したことは書けません。ご容赦ください」と気を遣ってくださったが、私への気遣いもさることながら、掲載された書評は、深刻な病状で書いたものとは信じられない、明晰で視野の広い、素晴らしい書評だった。だが、それからまもなく1月17日に逝去されたという訃報が届き、「急逝」されたという感じでショックを受け、同時に、三谷さんが最後の最後まで精力的に仕事を続けておられたことに改めて驚嘆した。この書評が、三谷さんの絶筆になったのかもしれない。ちなみに私の本は、ペストがパンデミックとなって膨大な犠牲者を出し、ヨーロッパの社会と文化に甚大な影響を与えた中世チェコにおける死と不幸に関係する諸作品を論じて、「死と不幸を免れない人間には光と慰めが必要だ」という想念を込めた本である。自らの死を意識されていた三谷さんは、どんなお気持ちでこの本を読まれただろうか……。

三谷さんの研究と人となりについては、スラヴ言語学という専門分野を同じくし、学生時代からの研究仲間にして後には職場の同僚となられ、恐らく三谷さんに一番近



い存在だった服部文昭さんが、既にロシア文学会のホームページに「三谷前会長の早過ぎるご逝去を悼んで」という素晴らしい追悼文を書かれているし、やはり専門を同じくする後進の野町素己さんもスラブ・ユーラシア研究センターのホームページに素晴らしい追悼文を書かれている。私にできるのは、折に触れて三谷さんからうかがった個人的なことなどを、とりとめなく書くことくらいである。三谷さんのお家は意外にもお寺だったこと、香山リカ氏と同じく名門の東京学芸大学附属高校の出身であったこと、東大の駒場ではドイツ語クラスだったことなど……。

最後に付言すると、東大露文科で三谷さんは、特にロシア語学と（当時の）ユーゴスラヴィアの言語文化を研究されていた栗原成郎先生に学ばれ、恐らくは先生の影響のもとにスラヴ言語学の研究者を志し、先生と同じくユーゴスラヴィアの言語文化を専門的に研究し、ユーゴスラヴィアにも留学されたのだろう。栗原先生は、実に立派な後継者をお育てになったわけである。大変温厚な人格者であられる栗原先生にはお子さんがいないので、私は栗原先生がもしかして愛弟子の三谷さんを養子にしたいのではないかと勝手に想像したりもした。これほど優秀な愛弟子に、いわば「逆縁」で死なれてしまった栗原先生も、大変ショックを受けられたのではないだろうか……。

三谷恵子さんの現役での早すぎる死は、日本スラヴ学研究会にとってのみならず、日本のスラヴ研究全体にとって——更には恐らく三谷さんが国際的にも活躍されていた世界のスラヴ研究にとっても——大きな痛手である。我々としてはご冥福を祈るばかりだが、深刻な病気を抱えながらも最後まで精力的に仕事をこなされ責任を全うされようとした三谷さんを偲び、その遺志を継ぐべく活動を続けていくことを望みたい。

三谷さん、あんなに働き詰めで、さぞかしお疲れになったのではないですか？ しかし学究の鑑と言うべき、見事な学者人生でしたね。どうか安らかにお休みください。



【三谷恵子先生追悼文】

## 三谷恵子さんを悼んで

服部文昭

三谷恵子さんの余りに早過ぎるご逝去からひと月になろうとしている。どうかすると、メールで連絡が来たり、スマホに電話が掛かって来るような気もして、まだ信じられないというのが正直なところである。きちんとした追悼文やお仕事のことなどは、長與進さんや石川達夫さん達がお書きになるだろうから、私は、断片的な大昔の思い出のようなことを書かせていただき、せめてものご冥福をお祈りする気持ちといたしたい。

三谷さんと初めてお目に掛ったのは、今から足掛け 45 年前。進学振り分けが済んだ初冬の頃、本郷の露文と駒場のロシア科に進学が内定した諸君を合同で歓迎するコンパが、渋谷の「ひな春」という、いつものお店で催された。在籍の学生・院生に加えて、当時は北垣信行、米川哲夫両先生を長老格として全ての先生と千野栄一先生のような非常勤講師の先生までも参加された大きな行事であった。本郷の露文への進学を決めた三谷さんは、青みがかった淡いグレイの暖かそうなコートを着て、物静かで知性的な印象を与える女子学生さんだった。

翌春から露文で栗原成郎先生の許、本格的なスラヴ研究をスタートさせたが、研究を続けて成果を实らせるには、環境、才能、努力の三拍子が揃わねばならない。三谷さんには、その全てが備わっていた。まったく恥ずかしながら、私など、目の前で吉上昭三先生とヘンリク・リップシツさんが『ポーランド語の入門』を使ってポーランド語を教えて下さっても、同じクラスの沼野充義君はどんどんと先に行ってしまうのに、結局、物にならなかった。私の習った頃はセルビア・クロアチア語と呼んだが、栗原先生からマンツーマンのような精読の授業もあったのだが、結局、こちらもだめだった。三谷さんは、「金剛石も磨かずば」どころか、金剛石を磨いて磨いて磨き切ったような存在だった。

もともと、決して周りに人を寄せ付けないようなことはなく、いつも周囲から愛され親しまれていた。川端、栗原両先生のお心遣いで企画された研究室親睦のための高尾山ハイキングなどにも積極的に参加されたり（この時は、駒場の助手の高橋清治さんが、まだ保育園児くらいのお子さんも連れて参加されたり、なかなか盛況だった）、研究室生活をいろいろな面で楽しまれていた。またこの頃は、世良公則のファンだな

どとも伺った記憶がある。後に岩波書店の露和辞典改定のお手伝いに加えて貰ったことがあった。和久利誓一先生を筆頭に飯田規和、新田実の先生方で、藤沼貴先生までも加わっていたが、そこに金田一真澄さんや岩井憲幸さん、三谷さん、私なども参加していた。或る真夏の日、三谷さんは29歳の誕生日を迎えた。編集部にいた岩波の社員の人たちも我々も十名あまりで、三谷さんのために大きなバースデーケーキを買ってきて、和やかにお祝いしたのだった。そして、その秋、三谷さんはザグレブ大学留学へと雄飛された。

根気よく研究に取り組みられるところも三谷さんの強みであったと思う。お若い頃、『賢者アキールの物語』にとっても興味を惹かれるというお話を聞いていた。だいぶ後年、京大で同僚だった頃、教授会の前だったか、「今はまだ忙殺されているけれど、いずれ時間を作って、『アキール』に打ち込みたい」とおっしゃった。私が、「ドゥルノヴォなども手掛かりに、是非、そうして下さい」と言ったら、嬉しそうにしていた記憶がある。そうしたら、2014年、三谷さんはスラ研の競争的資金を得て、本格的な研究に取り組み出したのだった。

同僚だった当時は、いつでもお話を伺えると思って、却って、京都と東京に離れて勤めている時よりコンタクトが薄かったこともあって、今にして思えば、あれも聞いておけば、これも聞いておけばと、悔やまれる。研究とは関係ないが、京大時代のいつだったか、三谷さんが自動抹茶機（実物を見なかったのだが、茶筌を機械仕掛けで回転させて「お抹茶」を準備する機械だと想像していた）で「今度、一服、ふるまいましょう」とおっしゃった。ところが、二人とも何かと忙しく、お茶を戴けずじまいになってしまったことが、やはり、悔やまれるのである。

最後に、これは私の推測に過ぎないのだが、三谷さんは、きっとクリスマスが好きだったのだと思う。これまで、いろいろと連絡を頂戴したが、大切な連絡と言うか、ワクワクするような連絡（例えば、スラ研の企画と一緒に応募しようとかの）は、決まって待降節の頃にあったのだ。

三谷さん、どうか、安らかに。

【三谷恵子先生追悼文】

## 燃え尽きたスラヴ言語学の星、三谷恵子さんを悼む

沼野充義

スラヴ言語学者の三谷恵子さんが、2022年1月17日に闘病の末、亡くなった。東京大学大学院人文社会系研究科・文学部スラヴ語スラヴ文学研究室を率いる現職の教授だった。あまりに早い逝去に言葉もない。しかし世代も近く、最後には最も身近な同僚の一人でもあった私は、思えばやはり三谷さんとは色々な縁があり、この機会に不十分ながらも書き留めておくのは言わば自分の義務であろう。私自身病魔に冒され、長期入院を続けているのだが、そのわが身に——いや、わが心に——鞭を打って自分の責任を果たしたい。

私は三谷さんの東大の大学院スラヴ語スラヴ文学専門分野の3年先輩である（単に年齢の問題だが）。大学院に入ると三谷さんはザグレブ大学に、私はハーバード大学にそれぞれ長期留学したので、実際に本郷で顔を合わせる機会は意外に少なかったのだが、それでも、身近な同世代の研究仲間の一人として彼女の天才的な専門能力と素晴らしい人柄に長いこと接して感銘を受け続けてきた。

大学人事の内幕を明かすのは本来ルール違反かもしれないが、関係者がすべて退職した今となつては、もはや歴史的記録として必要なものだろう。常識的に許されると思われる範囲で書き留めておきたい。確か2012年だったのだろうか、東大のスラヴ研究室で専任教員採用の人事を起こす機会が生じた。そのポストは定年退職した長谷見一雄氏の後を埋めるべきものだったが、私は先行きが危ぶまれる（などと言うと憤慨する向きもあるかもしれないが）スラヴ研究室の再興を目指すために、優れたスラヴ言語学の専門家を招かなければいけないと考え、同僚を説得した。東大文学部のスラヴと言えば、創設者木村彰一以来文学と言語学を互いに支え合う両輪としてきたのであって（これはロマン・ヤコブソンの学風を受け継いだ伝統とも言える）、私はそのために東大に呼ぶのに相応しいのは恵子さんしかいないと判断した。そして彼女を口説いて京大から移ってもらうよう直接頼み込んだのが、誤解のないよう（別に秘密でもない）ので説明しておけば、東大文学部では当時（今でもだが）人事の公募は実質的には行っていなかったのである。その代り業績審査が厳正に行われたのは言うまでもないが。

私は大森（東京都大田区）に住んでおり、同じ大田区の蒲田に住む恵子さんとは隣

近所という感じだったので（実は彼女は京大に勤めていたときも、蒲田の自宅はそのままにして、京都と東京の間を往復していた）、ある日大森の駅前の喫茶店で待ち合わせて、東大に来てほしいと話を切り出した。そのころ彼女はすでに 50 代半ば、押しも押されもせぬ京大の教授である。そのような地位・年齢の大物教授の異動ということ自体かなり異例のことで、普通は後進の若手を採用して、研究室の若返りをはかるべきだったろうが、今後 10 年間だけでもスラヴを率いることができると思われたのは、学問的にも人格的にも彼女だけだった。ただ一つ懸念材料は、彼女の体調のことだった。三谷さんは若い頃から健康の問題を抱えていて、京大在職中もけっこう大変な時期があったとは私も聞いていた。しかし私は彼女に、とにかく東大に移ってくれば、定年まで十年だから、その間頑張ってもらいたい、途中で体調が悪くなって療養しなければならない時があっても、必ず全面的にサポートするから気にせず、安心して移ってきてほしい、と熱をこめて彼女を説得したことを覚えている。

東大に移ってからの三谷さんはまさに水を得た魚のようで、授業と研究の両面で素晴らしい仕事をし、実際に東大スラヴ研究室を率いて盛り立てただけでなく、国内外の学会でも活躍し、日本ロシア文学会の会長も 4 年にわたって務めた。若い頃から健康の問題を抱えながら、人並みはずれた質・量の仕事をこなす国際学会に積極的に参加してきたのは本当に信じがたいことで、単に才能や知力に恵まれただけでなく、私などでは足元にも及ばない強靱な精神力を持つ人だった。

三谷さんの言語学における多大な業績について専門外の私が云々する資格はないが、彼女が書いた『スラヴ語入門』（三省堂）や『比較で読みとくスラヴ語のしくみ』（白水社）などの啓蒙書を見ると（どちらも私の座右の書だった）、ロシア語や、おそらく彼女が一番得意としたクロアチア語に限らずスラヴ語全般にわたる精確で該博な知識はもちろん（何しろ彼女には、独力で作った「ソルブ語辞典」などという先駆的な途方もない業績さえある）、言語そのものの本質を広く深く見る視点があり、結局のところ人間にとって言語とは何かを考えさせてくれるものにもなっている。これは本物の言語学者でなければできないことだろう。学者の実力は結局、誰が読むかわからない専門論文ではなく、こういった概説書・入門書に鮮やかに現れるものだ。

三谷さんをヤコブソンの伝統に結びつける一つの側面は、彼女が文学にも深い関心を持っていた（そしてややエラそうに響くかも知れないが、趣味やセンスもよかった）ことである。セルビア・クロアチア・ボスニアの現代文学を積極的に訳し、ミロラド・パヴィッチ『帝都最後の恋』やセリモヴィッチの『修道士の死』などの貴重な訳業を残した。いずれも名訳である。昨秋出た（私は入院してしまったので未見だが）パヴィッチの『十六の夢の物語』が、彼女の生前出した最後の単行本になった（これらの翻訳はいずれも松籟社刊）。パヴィッチの幻想小説は私も大好きで、三谷さんとはよくパヴィッチの魅力について話し合ったのを懐かしく思い出す。

そういえば、三谷さんは言語学者には珍しく——などと言うと、多くの言語学者を敵にまわすことになりそうだが——日本語についても、繊細な文体意識を持っていた。私は言語学関係の評価書の類を書かざるを得なくなるのが何度かあって、そのたびに三谷さんにチェックしてもらったものだが、ある時、内容だけではなく、日本語の言葉遣いについても意見されたことがあった。私は「鮮やかに」という表現が好きでよく使うのだが（この文章でも先ほど一度使った）、三谷さんはアカデミックな文章にその表現は不正確でそぐわない、というのである。言われてみれば確かにその通りで、三谷さんの書く文章が簡潔で正確であるだけでなく、そのような日本語感覚に支えられていたのだと思い当たった。

三谷さんの専門的研究は専門的過ぎて、非専門家には寄り付きようがないようにも思えるが、ある時珍しく彼女の専門的研究について詳しく話を聞く機会があり、それは中世スラヴの諸写本の間の実に細かい異同をめぐるものだったが、彼女は「普通の人にはあまり面白くないでしょうが自分はこういうことに情熱を燃やしてきた」と実に面白そうに語った。実際話はとても面白かった。きっと彼女の東大での授業もこんな風に魅力的なものだったに違いない。

少し脱線になるが、それで思い出したのがロマン・ヤコブソンの逸話である。ヤコブソンのハーバードでの授業はめっぽう面白く、スラヴ言語学などにまるで興味のないアメリカの学生たちさえも引きこんだという。どうしてそんなことができるのですか、と同僚に聞かれて、ヤコブソンはこう答えたという。「簡単なことだよ。教室に入っていくと、男子学生が隅っこで心配そうな顔をしている。車の修理代をどう工面しようかと悩んでいるんだろう。それから前のほうには、女子学生がいて、どうやら、今晚彼氏から電話がかかってくるかしらと、上の空の様子。それから、窓の外を眺めることに余念のない学生もいる。そこで私の仕事は何かと言えば、こういったすべての学生たちに、一時間の間だけ、信じさせることなんだ——10世紀に起こった鼻母音の非鼻母音化こそ、世界で一番重要なことなんだって！」私はこの話を、ヤコブソンの高弟で、私のハーバード留学時代の恩師の一人、ホレス・ラント教授から直接聞いた。

三谷さんのことに話を戻すと、残念ながら「東大の定年まで10年がんばってほしい」という私の願い——いや、祈りと言ったほうがいい——はかなわず、定年まで1年を残して逝去されたのは痛恨の極みだった。本当にそれは燃え尽きるような最期だった。しかし恵子さんは9年間の東大在職中に普通の人の何倍もの仕事をし、スラヴ研究室を導く輝かしい星となった。

スラヴ語スラヴ文学のための天国があるならば、さほど遠くない将来そこで再会し、彼女とロシア語文法やパヴィッチの文学についてまた議論できることを楽しみにしている。

2022年2月21日





【三谷恵子先生追悼文】

## 三谷恵子先生を偲ぶ

阿部賢一

去る 2022 年 1 月 17 日、三谷恵子先生が逝去された。長年病気を抱えていらっしやるのは知っていたが、定年まで一年と数カ月というこの時期にまさか他界されるとは思いもよらなかった。この二年間、生活がオンライン中心に移行したとはいえ、メールでのやりとりは行っていたし、Zoom などでお顔も拝見していたので、訃報を聞いてしばらくは実感が湧かなかった。そして、今なおその感覚がある。だが、自分の心を整理すべく、そして何よりも追悼の意味を込めて、以下では、三谷先生との思い出を記したい。

三谷先生に初めてお会いしたのは、おそらく私が博士課程の院生の頃だろう。石井哲士朗先生の事務局でお手伝いしていたこともあり、企画編集委員会や研究発表会でしばしばその姿をお見かけした。2009 年に私が事務局を担当してからは、企画編集委員会、あるいは打ち上げの場でしばしばご一緒する機会に恵まれた。口数は多くないものの、時折挟む発言は知性に裏付けられた鋭いもので、懇親会の席では風刺を込めた辛口のコメントをされたことも印象に残っている。

たしか、その頃から、西スラヴ以外の研究者も参加しているので「西スラヴ学研究会」という名称から「西」を取ってはどうかという議論が始まったように思う。これは西スラヴを専門とする委員からの提案だったと記憶している。これに対し、南スラヴをフィールドとされている三谷先生も「西」を取るべきだという意見を表明されるかと思ったら、「元々、西スラヴの研究者が中心になってできたのだから、名称は変えなくてはいいいのではないか」という主旨の発言をされたことを覚えている。おそらく吉上昭三先生、千野栄一先生が作った研究会の礎という歴史的な経緯を尊重されたうえでの発言だったと推察する。だが、周知の通り、2012 年 7 月、本会は名称を「日本スラヴ学研究会」に変更し、三谷先生は文字通りの *slavist* として本会を牽引する存在となった。

2013 年には、三谷先生は東大文学部スラヴ語スラヴ文学研究室に所属を移され、文字通りここで研究・教育に力を存分に発揮されることとなる。京都大学にまだ在籍されていた頃、勤務先の状況をお尋ねしたことがある。その時は、組織の関係上「ここでは専門教育はできない」とこぼしていらっしやった。だが本郷に移ってからは、

傍から見ても驚くほど、スラヴ語の教育に熱心に取り組まれていた。個人的に少し関係が近くなったのは、2016年、私が東大文学部現代文芸論研究室に移籍し、文字通り隣の研究室（現代文芸論研究室は、文学部3号館8階のスラヴ研究室の隣に位置する）で同僚になってからである。着任早々の4月には、スラヴ語学スラヴ文学研究室の懇親会に招いてくださり、ロシア、ウクライナ、ブルガリアなど様々な研究者、留学生に囲まれて、和気藹々に歓談されている様子が今でも目に浮かぶ。その時、「ここですべてのスラヴ語を教える機会を作るのが夢だ」と目を輝かして話して下さったが、毎年非常勤の先生を入れ替えて、その計画も着実に実現されている。

勤務先と同僚として親しくなったこともあり、立ち話やエレベータが一緒になった折に、本会のことについてもいろいろと話す機会があった。2019年春、私が企画編集委員長の任期を終えたとき、次期委員長としてまず頭に浮かんだのが三谷先生だった。本来であれば、業績、世代の面でも三谷先生が先に委員長に就任するべきだったと常々思っていたからである。とはいえ、当時、三谷先生はロシア文学学会会長もされていて、依頼しても断られるのではないかと内心躊躇していた。だが他に適任者はいないと腹を括って、姿をお見かけ次第依頼しようと決心した。ある時、文学部3号館8階の廊下で偶然お姿をお見かけしたので、早速、次期委員長職を打診したところ、「ああ、いいですよ」と、こちらが拍子抜けするほど、二つ返事で快諾して下さった。それから委員長として同委員会、そして本会の運営を導き、亡くなる直前までメールやオンライン会議など作業を牽引されてきた。スラヴ語スラヴ文学研究室の教授として、そして日本スラヴ学研究会の企画編集委員長として、そして何よりも slavist として、三谷恵子先生は生涯を終えたと言えるだろう。

ここで、三谷恵子先生の仕事にも少し触れたいと思う。研究の領域においても、三谷先生は稀有な存在であった。本会は「スラヴ学」という名称を冠しているが、スラヴの個別の言語文化を専門する者が実質的には大半であろう。そのような中、三谷先生がスラヴ語全般に広く目配りされていたことは、『スラヴ語入門』（三省堂、2011年）、『比較で読み解くスラヴ語のしくみ』（白水社、2016年）といった啓蒙的な書物からも十二分に伝わってくる。スラヴ言語学者としての仕事の学術的な評価は他の方にゆだねるとして、ここで私がむしろ強調したいのは「翻訳者」としての仕事である。

かつては千野栄一先生など言語学、文学の両方にまたがり活躍される方もいらっしやっただが、昨今は研究領域の細分化という流れもあり、言語学者が、文学、とりわけ文芸翻訳に従事することは稀になりつつある。スラヴ学者としての存在が圧倒的だったせいだろうか、翻訳者としての側面は言及されることがやや少ないように思われる。単行本としては、スラヴェンカ・ドラクリッチ『バルカン・エクスプレス』（三省堂、1995年）、ミロラド・パヴィッチ『帝都最後の恋』（松籟社、2009年）、メシヤ・セリモヴィッチ『修道師と死』（松籟社、2013年）、ミロラド・パヴィッチ『十六の

夢の物語 M・パヴィッチ幻想短編集』(松籟社、2021年)がある他、ジェヴァド・カラハサン「一九九三年の手紙」、ミリエンコ・イエルゴヴィッチ「盗み」(中東現代文学研究会編『中東現代文学選 2012』中東現代文学研究会、2013年)といった翻訳も手掛けている。

セリモヴィッチ『修道士と死』は二段組四百頁を超える大著であるだけでなく、コーランをしばし参照する、ボスニアの文化的な蓄積を感じさせる一冊である。特筆に値するのは、セルビアの作家、文学史家ミロラド・パヴィッチの作品を二冊訳出されたことだろう。パヴィッチの名前は『ハザール事典』の著者として長年知られていたが、これらの翻訳によってパヴィッチの世界が広がりを増したことは日本の読者にとって喜ばしいことである。『帝都最後の恋』は「タロット小説」というユニークな体裁を取るが、遊戯性が顕著な作品の訳文だけではなく、二十五頁に及ぶ渾身の訳者解説『帝都最後の恋——作家、作品、そしてセルビアの文学と言葉』にも目を通して欲しい。パヴィッチの来歴を紹介するだけではなく、近代セルビア文学史の断章として優れた文章となっている。2021年10月に刊行された日本独自編纂の『十六の夢の物語』もまた、史実と虚構の境界を行き来する幻想譚である。担当編集者の木村浩之氏によれば、病床にあった三谷先生より、どうしてもこの本は訳したいという要望があり、予定を進めて短期間で刊行に至ったという。病気を抱えながら、パヴィッチを訳出していた三谷先生的心中は察するにあまりあるが、歴史的にも、言語的にも深みのある物語を最後に訳出されたことについては感謝の言葉しかない。

残念ながら、三谷先生とは、もはやスラヴ語について、ザグレブの街並みについて、そしてパヴィッチについて言葉を交わすことはできない。だが残された著書、訳書、論文は、パヴィッチの文学世界同様、読者に開かれており、私たち残された者は、その気になればいつでも活字に触れることができる。

心よりご冥福をお祈りします。



【三谷恵子先生追悼文】

## 海外からの追悼メッセージ

三谷先生のご逝去に際し、ザグレブ大学教授のダルコ・ジュブルニッチ氏 (Darko Žubrinić、クロアチア) より、事務局宛に以下のメッセージを頂戴いたしました (2022年3月7日付)。

=====

Condolence message

I express my deep condolences to all the members of Your Society, on the occasion of the death of Dr Keiko Mitani. I had the privilege of meeting her (and talking to her) in 2017, at a conference which took place in the cities of Biograd and Zadar, on the Croatian coast.

Wishing You all good health and prosperous future,  
I send You many greetings from Croatia's capital Zagreb,

Darko Žubrinić

=====

このメッセージでジュブルニッチ氏が言及されている学会とは、2017年5月12-13日にクロアチアのビオグラード・ナ・モル市およびザダル市にて開催された国際会議 *The Phenomenon of the Glagolitic Script* を指しています。開催地のひとつであるビオグラード・ナ・モル市は、日本の広島市・長崎市と交流が深く、2010年からは折鶴をかたどった記念碑の前で原爆犠牲者追悼式典が開催されています<sup>1</sup>。

この学会の様子を収めた写真がウェブサイト CROWN (Croatian World Network) に掲載されており、どなたでも自由にご覧になれます<sup>2</sup>。この欄では、CROWN に掲載されている写真のうち3枚を抜粋し、在りし日の三谷先生のお姿を偲びたいと思います。ウェブサイトの情報をご提供くださったジュブルニッチ氏に、この場をかりて深くお

---

<sup>1</sup> 在クロアチア日本国大使館 <https://www.hr.emb-japan.go.jp/jp/2018/nikokukan-2018-biograd-namoru.html> [最終アクセス：2022/03/10]

<sup>2</sup> CROWN <http://www.croatia.org/crown/articles/11332/1/Keiko-Mitan-Japanese-expert-in-Croatian-Glagolitic-literature-passed-away-in-2022.html> [最終アクセス：2022/03/10]

礼申し上げます。



【写真1】 ビオグラード・ナ・モル市にある折鶴の碑の前での記念写真

\*写真左より、アンドレイ・ソボロフ氏 (Andrei Sobolov、ロシア)、ドラジェンコ・サムダルジッチ氏 (Draženko Samdardžić クロアチア)、三谷先生、ヨスィプ・ブラトゥリッチ氏 (Josip Bratulić、クロアチア)、ボジョ・ドシェン氏 (Božo Došen、クロアチア)、ジョルジオ・ツイッファ氏 (Giorgio Ziffer、イタリア)。



【写真2】 クロアチアのグラゴール文字写本に関する三谷先生の講演



【写真3】ザダル大学講堂でのドラジェンコ・サムダルジッチ氏の講演

\*三谷先生（写真右）は本講演が行われたセッションにおいて、アニツァ・ヴラシッチ=アニッチ氏（Anica Vlašić-Anić、クロアチア）およびアニツァ・ナゾル氏（Anica Nazor、クロアチア）と共に進行役を務められた。





## 『スラヴ学論集』(旧『西スラヴ学論集』)に掲載された 三谷恵子先生の文章

作成：貞包和寛 (2022/03/01)

### ・論文等

1. 「上ソルブ語の‘態’——受動と使役についての事例研究——」『西スラヴ学論集』第3号、2000年、8–32頁
2. 「下ソルブ語の状況——WITAJ 計画までのみちのり——」『西スラヴ学論集』第4号、2001年、68–86頁
3. 「上ソルブ語の語彙目録の変化と標準語形成の過程」『西スラヴ学論集』第7号、2004年、4–20頁
4. 「下ラウジッツのソルブ語——WITAJ 発足10年によせて——」『西スラヴ学論集』第12号、2009年、33–58頁
5. 「日本スラヴ学研究会発足記念シンポジウム第1部「スラヴ学の礎を築いた人々」」『スラヴ学論集』第16号、2013年、84–85頁
6. 「環バルト海地域の言語接触と言語変化」『スラヴ学論集』第21号、2018年、55–80頁
7. 「巻頭あいさつ」『スラヴ学論集』第23号、2020年、3頁
8. 「イヴォ・アンドリッチ著、栗原成郎訳『宰相の象の物語』(松籟社、2018年、252頁)、Michael Martens. Im Brand der Welten. Ivo Andrić. Ein europäisches Leben (Wien: Zsolnay, 2019, 494S)」『スラヴ学論集』第23号、2020年、125–129頁
9. 「まえがき」『スラヴ学論集』第24号、2021年、3頁
10. 「中世スラヴ世界における「疾病」の表現と表象」『スラヴ学論集』第24号、2021年、105–126頁

### ・三谷先生のご著書に対する書評

1. 森田耕司「三谷恵子著『スラヴ諸語入門』(三省堂、2011年、208頁)」『スラヴ学論集』第16号、2013年、142–146頁
2. 服部文昭「三谷恵子『比較で読みとくスラヴ語のしくみ』(白水社、2016年、244ページ)」『スラヴ学論集』第20号、2017年、218–223頁



【シンポジウム】

## **The World of *Cosmos*: Science and Fiction in Bulgaria in the Second Half of the 20th Century**

Milen Martchev

### **1. Introduction**

When asked to name a science-fiction author from their country, many Bulgarians will not manage to produce a single name, as I found out when I informally surveyed a dozen or so of my acquaintances and relatives of different age groups (the oldest in their seventies and the youngest in their early twenties). They will often mention the well-known classic writer Elin Pelin, but among his works we find children’s fantasy novels, rather than “science” fiction. Even when it comes to self-proclaimed sci-fi fans, domestic authors do not seem to feature prominently among their favourite. In 2015, a Bulgarian science-fiction online magazine, *ShadowDance*<sup>1</sup> (active since 2000), published its list of the “Top 15 Science-Fiction Novels” ever, which did not contain a single Bulgarian writer: 1. *Dan Simmons*; 2. *Frank Herbert*; 3. *Roger Zelazny*; 4. *Douglas Adams*; 5. *Robert Silverberg*; 6. *Thomas M. Disch*; 7. *Ursula Le Guin*; 8. *Peter Watts*; 9. *Samuel R. Delany*; 10. *Stanisław Lem*; 11. *Arkady and Boris Strugatsky*; 12. *Iain M. Banks*; 13. *William Gibson*; 14. *Hannu Rajaniemi*; 15. *Neal Stephenson*. In the comments below the magazine article in question<sup>2</sup>, 14 registered users of *ShadowDance* posted their own top 10 to 15 science-fiction novels where, out of 150 listed works by 64 different authors, only two Bulgarian writers were mentioned: Lyuben Dilov (three times) and Nikolay Tellalov (once).

A breakdown of all the authors appearing in those *ShadowDance* users’ comments will give us some idea of the kind of science fiction popular among Bulgarian fans of the genre in recent years (with the digits in square brackets indicating the number of times an author was mentioned when greater than one): *Isaac Asimov* [10], *Dan Simmons* [8], *Frank Herbert* [8], *Arkady and Boris Strugatsky* [7], *David Brin* [6], *Philip K. Dick* [6], *Robert Heinlein* [6],

<sup>1</sup> *ShadowDance* [<https://www.shadowdance.info>] (accessed January, 2022).

<sup>2</sup> Топ 15 научнофантастични романи // *ShadowDance*, 06 ноември, 2015. [<https://www.shadowdance.info/magazine/articles/top-15-sf-novels/>] (accessed January, 2022).

*Stanislaw Lem [6], Douglas Adams [5], Roger Zelazny [5], Arthur C. Clarke [4], Clifford Simak [4], Ray Bradbury [4], Ursula Le Guin [4], Frederik Pohl [3], Joe Haldeman [3], Lyuben Dilov [3], Orson Scott Card [3], Alastair Reynolds [2], David Zindell [2], Iain M. Banks [2], John Wyndham [2], Lois McMaster Bujold [2], Peter Watts [2], Robert Silverberg [2], Samuel Delany [2], Sergei Lukyanenko [2], Adrian Rogoz, Alan Dean Foster, Alexander Belyaev, Alfred Bester, Alfred Elton van Vogt, Bernard Werber, C. J. Cherryh, Carl Sagan, Carolyn Cherry, David Wingrove, Evgeny Gulyakovsky, George Orwell, Hannu Rajaniemi, Harry Harrison, Ilona Andrews, Jack Chalker, James White, John Brosnan, John C. Wright, Kim Stanley Robinson, L. Ron Hubbard, Larry Niven, Neil Gaiman, Nikolay Tellalov, Peter Bogáti, Richard Matheson, Robert Merle, Robert Sheckley, Sergey Pavlov, Stephanie Meyer, Stephen Baxter, Suzanne Collins, Terry Pratchett, Theodore Sturgeon, Thomas Disch, Timothy Zahn, Vernor Steffen Vinge.* Of the 26 authors mentioned multiple times in this list, 23 were born during the first half of the twentieth century.

In 2017, a Bulgarian online news and views magazine, *Webcafé*, published an article with the title “Lyuben Dilov: The Great Bulgarian Writer Who We Forgot”<sup>3</sup>. The opening lines read: “For better or worse, Lyuben Dilov Jr. is one of the well-known names in Bulgarian public life. But how many would remember who his father Lyuben Dilov was? One of the most talented Bulgarian writers remains hidden in the shadow of time. Whether it be because of the fact that his works are not among the literary works studied in school, or because somebody decided that science-fiction is second-hand literature, Lyuben Dilov has not received sufficient recognition, such as the kind he has received abroad”<sup>4</sup>.

The general Bulgarian reader may thus be hard-pressed to name many, or any, compatriot science-fiction writers, but there is one name that almost anybody in the country (especially people born before the mid- to late 1980s) will surely know— “*Cosmos*”.

*Cosmos (Космос)* was last century’s emblematic Bulgarian magazine focusing on popular science and science fiction, ostensibly being aimed at a young audience. It was published on an almost monthly basis (usually ten issues per year) and lasted from 1962 to 1994, when it had to be stopped due to financial and other difficulties during the years of heavy economic depression, following the end of the Cold War and the collapse of the socialist system of government. At the height of its popularity in the 1970s and 80s, it reached a circulation of 210,000 copies, according to former vice editor-in-chief Svetoslav Slavchev<sup>5</sup>—

---

<sup>3</sup> Любен Дилов: Великият български писател, когото забравихме// *Webcafé*, 25.12.2017. [<https://webcafe.bg/onya-deto-ne-go-triyat/1732865912-lyuben-dilov-velikiyat-balgarski-pisatel-kogoto-zabravihme.html>] (accessed January, 2022).

<sup>4</sup> All translations from the original Bulgarian and Russian texts are provided by the author.

third in the country behind *The Woman Today* (*Жената днес*, 400,000 copies) and *Health* (*Здраве*, 300,000 copies). For comparison, the main organ of the Communist Party at the time, *The Workers' Cause* (*Работническо дело*) came out in a volume of 750,000–800,000 copies. Slavchev also claims that the circulation of *Cosmos* could have been much larger, had it not been kept artificially low by the Central Committee of the Dimitrov Communist Youth Union (the publisher of the magazine), as “decisions of that kind were imposed from above and did not necessarily reflect the readers’ interest”. This is corroborated by the publisher of the modern successor of *Cosmos* (see the last section of this article): “It was a magazine which, during the years of socialism, your friend working at the newspaper stand had to keep for you under the counter, so that your family could read it”<sup>6</sup>.

A (nearly) complete set of archives of all *Cosmos* issues published in the 20<sup>th</sup> century is currently available in scanned format from a Bulgarian technology-oriented website, *Sandacite* (*Сандъците*)<sup>7</sup>.

## 2. *Cosmos*—a period-defining popular science magazine

The first-ever issue of *Cosmos*, published in 1962, starts with the words: “*Погледнете в тиха безлунна нощ звездното небе. Безброй светлинни (sic) мигат в черната бездна на Вселената. Кои далечни светове се крият из необятните простори? Приличат ли те на нашата Земя? Има ли на тях живот, разумни същества, или ние, хората, сме сами в безкрайната Вселена?*”<sup>8</sup>. (‘Look at the starry sky on a quiet, moonless night. Countless lights glimmer in the black abyss of the Universe. What distant worlds could be hiding in the boundless expanses of space? Are they like our Earth? Can life and sentient beings be found there, or are we, humans, alone in the endless Universe?’). This was to set the tone of the publication over the next thirty years, and the slightly unfortunate typographical error in only the second sentence (i.e., the adjective *светлинни* as in *светлинни години* ‘light-years’, rather than the noun *светлини* ‘lights’) is almost forgivable. Furthermore, the focus of *Cosmos*’s “outlook” was to be shared with the inner imagination of the one looking, as we find out later in the same inaugural article: “*Но човекът е велик с разума си, който може да обхване*

---

<sup>5</sup> Оруш, А. За космоса и списание Космос (Интервю с д-р Светослав Славчев) // Наука OFFNews, 20 март 2015. [[https://nauka.offnews.bg/news/Novini\\_1/Za-kosmosa-i-spisanie-Kosmos\\_6375.html](https://nauka.offnews.bg/news/Novini_1/Za-kosmosa-i-spisanie-Kosmos_6375.html)] (accessed January, 2022).

<sup>6</sup> Космос // Медийна група България [<https://www.mgb.bg/Publisher/Magazines/7499525>] (accessed January, 2022).

<sup>7</sup> Сандъците [<https://www.sandacite.bg>] (accessed January, 2022).

<sup>8</sup> Космосът // Космос / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1962. № 0. С. 1.

както безкрайно далечните звезди, така и изчезващо малките атоми, който може да си представи не само как е изглеждала Земята преди милиони години, но и как ще изглежда далечното бъдеще на хората. Човек е велик с мечтите си... Мечтайте!”<sup>9</sup>. (‘But Man<sup>10</sup> is great with his Mind, which has managed to reach both the immeasurably distant stars and the vanishingly small atoms, a Mind which has been able to imagine not only what Earth looked like millions of years ago, but also what the distant future of humanity might be. Man is great with his dreams... Dream on!’). Thus, the imagination is given its rightful place at the helm of the human scientific enterprise, even though the editorial board would have to obligatorily adhere and persistently refer to the tenets of socialist realism and its materialist dogmas in the tradition of Marx and Lenin, the latter being ostentatiously quoted on the very cover of that first *Cosmos* issue: “В света няма нищо друго освен движеща се материя.” (‘Nothing exists in the world except moving matter.’).

In the pages that follow the editorial quoted above, we find three science fiction short stories—“An Emergency Case” by Arkady and Boris Strugatsky, “The Fog Horn” by Ray Bradbury, and the almost prophetically<sup>11</sup> titled “Virus 2015” by Bulgarian author Svetoslav Slavchev. The remainder of the issue consists mostly of other short stories, articles on popular science and ancient civilizations, as well as accounts of domestic and foreign technological achievements. *Cosmos* would keep, more or less, this kind of content balance for most of its existence, with the addition of a “party-line” editorial or two at the start of some issues, praising the successes of the Bulgarian and Soviet socialist progress (this was a trend that intensified from the 1970s onwards).

Almost invariably, each *Cosmos* issue contained articles on astronomy, space exploration, astrophysics, and at times even quantum physics, possible dimensions and parallel universes. The magazine also strived to introduce to its readers cutting-edge technologies, discoveries and perspectives, such as: lasers (1963/10)<sup>12</sup>, antimatter (1965/3), climate change

---

<sup>9</sup> Космосът // Космос (cf. Note 7), p.3

<sup>10</sup> The translation here aims to reflect the original Bulgarian, which was written decades before our time of heightened sensitivities to the use of gender-based language.

<sup>11</sup> Or perhaps even better than that, considering the reported history of Coronavirus gain-of-function research, funded by the US National Institutes of Health and related institutions, and later exported to the infamous Wuhan Laboratory in 2014, around the time when “under pressure from the Obama administration, the National of Institutes of Health instituted a moratorium on the work” in the US. Cf. Guterl, Fred. “Dr. Fauci Backed Controversial Wuhan Lab with U.S. Dollars for Risky Coronavirus Research”. In *Newsweek*, April 28, 2020. [<https://www.newsweek.com/dr-fauci-backed-controversial-wuhan-lab-millions-us-dollars-risky-coronavirus-research-1500741>] (accessed January, 2022).

(1967/4), chess-playing machines (1967/8), natural-language communication between humans and machines (1967/9), cymatics (1970/6), AI (1970/9), plant memory and emotions (1971/4), super-fast trains (1972/2), electric and “electronic” cars (1973/1), solar energy (1977/3), cloning (1975/2)<sup>13</sup>, holography (1981/8), biocomputers (1984/10), mobile phones (1985/2), genetically engineered vaccines (1985/8), the human genome project (1988/9), telework (1989/2), microrobots as a precursor to nanorobots (1989/8), the universe seen as a computer (1990/3). Articles of this sort would often present a forward-minded outlook, speculating on the various possibilities awaiting mankind, and as such were a source of anticipatory science fact/fiction, expected to stir the imagination of the magazine’s readers. Indeed, some of the Bulgarian authors publishing science-fiction stories in *Cosmos*, such as Dimitar Peev and Svetoslav Slavchev, were at the same time frequent contributors of materials on the latest advances in science and technology.

The magazine also frequently looked at mankind’s ancient past, which is perhaps as full of mysteries and possibilities as its future. One can find articles on ancient Thracians (1967/3), the provenance of the Moon (1968/2), ancient astronauts (1969/8), the Nazca Lines (1969/8), alchemy (1969/10), civilizations preceding the biblical Flood (1970/1), the enigma of the Egyptian pyramids (1971/2), ancient astronomy (1971/7), *Homo habilis* (1971/9), ancient civilizations on the territory of Bulgaria (1972/3), Atlantis (1978/3), Neanderthals (1984/5), crystal skulls (1984/6 and 1994/9), ancient snake/dragon cults and legends (1987/2), mythology and extraterrestrials (1990/1), Jesus in India and Japan (1990/5), and Egyptian pharaohs as drug addicts (1994/9), among others.

*Cosmos* also had a noticeable penchant for crime novels (authors like Agatha Christie were a frequent staple in the magazine), adventure stories and the wonders of the animal world—with articles covering various species from frogs and bears to tigers, kangaroos and dinosaurs.

### 3. Science fiction in *Cosmos*

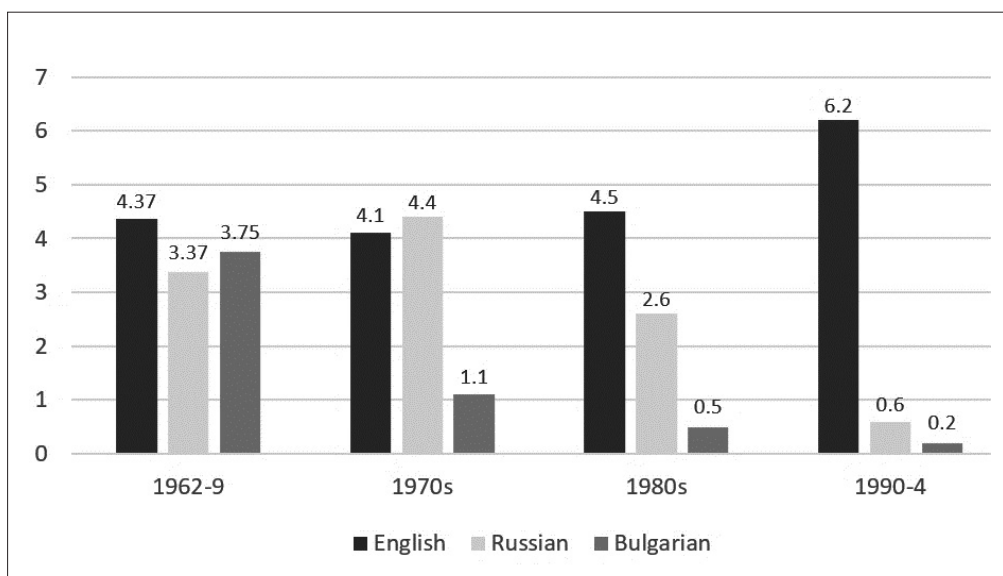
During its 20<sup>th</sup>-century existence, *Cosmos* published 347<sup>14</sup> science-fiction stories and novellas.

---

<sup>12</sup> The dates in brackets here and below indicate the year a relevant issue of the magazine was published, followed by its number.

<sup>13</sup> Interestingly, the term of choice at the time was “клонинг”, rather than the modern “клонирание”.

<sup>14</sup> This figure should be considered fairly accurate but not a hundred percent definitive, since there might be disagreement about some of the stories as to whether they fall within the realm of science fiction or not. This author has included all stories with a “fantastic” element, including a small number of items about prehistoric man. *Cosmos* also published a large number of crime stories,



**Figure 1:** English-, Russian- and Bulgarian-language science-fiction works published in *Cosmos* per year between 1962 and 1994.

Interestingly, despite the predictably large number of works by Russian and Soviet writers (98 stories by 50 different authors), the most numerous subset comes from English-speaking writers (150 stories by 69 different authors)—mostly American and British. Forty-seven Bulgarian pieces by 31 different authors were also published but, significantly, each passing decade saw a smaller number of domestic sci-fi works appearing on the pages of the magazine: 30 in the 1960s, 11 in the 1970s, five in the 1980s and only one in the 1990s (cf. Fig. 1).

There is also a clear trend of *Cosmos* featuring fewer Russian-language and more English-language works of science fiction in each decade after 1970. 1989 was the year after which the countries of the former Eastern Bloc officially turned their back to the Soviet Union and started looking west for inspiration, guidance and capital, but in terms of the increasing permeation of Western thought and literature, our *Cosmos* data provides further attestation of the well-known fact that the trend had been going on for quite a while, intensifying in the 1980s.

Here is a list of all English-speaking science-fiction authors whose works were featured in the magazine<sup>15</sup>: *Alfred Bester*, *Ann Warren Griffith*, *Anne McCaffrey*, *Arthur C. Clarke* [11], *Arthur Conan Doyle*, *Arthur Porges*, *Arthur Sellings* [2], *Avram Davidson*, *Bob Shaw* [2],

which have all been excluded from the analysis here.

<sup>15</sup> The digits in square brackets indicate the number of published stories by the same author if greater than one.



## The World of Cosmos: Science and Fiction in Bulgaria in the Second Half of the 20th Century

*Charles Bernard Gilford, Clifford D. Simak [11], Colin Kapp, Damon Francis Knight, Edmond Hamilton, Edward Wellen, Edwin Charles Tubb, Eric Frank Russell [5], F. L. Wallace, Fredric Brown, Fritz Leiber, Gordon R. Dickson [2], H. G. Wells [5], Harlan Ellison [2], Harry Harrison, Henry Kuttner, Isaac Asimov [18], Jack London, James H. Schmitz, Jay Williams, Jerome Bixby, Joe Gores, John Morrison, John Wyndham [5], Karen Anderson, Katherine MacLean, Kent Patterson, Larry Eisenberg, Lawrence Watt Evans, Lewis Padgett, Lois McMaster Bujold, Lyon Sprague de Camp, Mark Twain, Marshall King, Mildred McElroy Clingerman, Murray Leinster [2], O.H. Lesley, Orson Scott Card, Paul J. Nahin, Philip K. Dick, Poul Anderson, Ray Bradbury [7], Richard McKenna, Robert A. Heinlein [4], Robert Arthur, Robert F. Young [2], Robert Louis Stevenson, Robert Sheckley [14], Robert Silverberg [2], Robert Toomey, Roger Zelazny, Stan Dryer, Stephen King [2], Theodore Thomas, Tom Godwin, Ursula Le Guin [2], Walter Tevis, William F. Nolan, William Morrison, and William Tenn [2].*

Russian and Soviet authors appearing in *Cosmos* are as follows: *Aleksandr & Sergey Abramov, Aleksandr Gorbovsky [2], Aleksandr Kolpakov, Aleskandr Klimov & Igor Belograd, Aleskandr Mirer, Anatoly Dneprov [3], Andrei Salomatov, Andrey Balabukha [2], Andrey Kapitsa, Arkady and Boris Strugatsky, Boris Rudenko, Dmitri Bilenkin [9], Gennadiy Prashkevich [2], Genrich Altshuller [3], Georgii Gurevich, Igor Akimov, Igor Rosokhovatski [9], Ilya Varshavsky [6], Kir Bulychev [9], Leonid Kudryavtsev, Leonid Panasenko, Lev Edzhubov, Lyudmila Petrushevskaya, Mikhail Pukhov, Mikhail Shalamov, Mikhail Yemtsev & Yeremey Parnov [2], Natalia Sokolova, Paul Amnuél, Roman Podolny [3], Sergei Drugal, Sergey Kozmenko [2], Sergey Snegov, Sever Gansovsky [6], Valentin Berestov, Valeri Tsyganov, Vasily Zakharchenko, Victor Shenderovich, Viktor Kolupaev [3], Viktor Komarov [2], Viktor Saparin, Vladimir Firsov, Vladimir Grigoriev, Vladimir Mikhailov, Vladimir Mikhanovsky, Vladimir Savchenko, Vladimir Shcherbakov, Vyacheslav Rybakov, Yuri Konstantinov, Yuri Medvedev, and Zinovi Yuriev.*

Bulgarian science-fiction authors included: *A. Efimev, Aleksandar Dimitrov, Angel Sarafov, Anton Donchev, Anton Donev, Dimitar Peev [8], Dimitar Velikov, Emil Zidarov, Georgi Genov, Hristo Geshanov, Hristo Polihronov, Ivan Efremov, Ivan Kozhuharov, Lidiya Popkirova, Lyuben Dilov, Lyubomir Cholakov, Lyubomir Nikolov, Mladen Denev, Nedialka Mihova, Nikola Chuparov [2], Petar Lyochev, Petar Stapov [2], Stoil Stoilov, Svetoslav Slavchev [6], Tsoncho Rodev, Tsvetan Severski, Vasil Raikov [2], Vasko Delev [2], Velichka Nastradinova, Vladimir Ganchev, and Yosif Perets.*

Polish science fiction was represented by 21 stories by nine authors: *Andrzej Majchrzak, Czesław Chruszczewski [2], Jacek Sawaszkiewicz, Jan Stanisław Kopczewski,*

*Janusz Zajdel, Jerzy Surdykowski, Konrad Fialkowski [5], Stanisław Lem [8], and Stefan Weinfeld.* German and Austrian works included 10 stories by three authors: *Herbert W. Franke [3], Manfred Weinert, and Erik Simon [6].* There were also seven science-fiction stories by French authors (*Claude J. Legrand, George Langelaan [2], Gérard Klein, Henri Troyat, Marcel Aymé, Pierre Gamarra*), and five by Czechoslovakian authors (*Jaromír Šavřda, Jaroslav Veis, Ondřej Neff, Vlastislav Toman, Zuzana Nagy*). Also featured were two stories from Norway (*Jon Bing and Tor Åge Bringsværd*), two from Sweden (*Fredrik Kilander and Börje Crona*), two from Japan (*Koji Tanaka and Sakyo Komatsu*), as well as one Romanian (*Camil Baciú*), one Hungarian (*Gyula Hernádi*), and one Danish (*Niels E. Nielsen*) works of science fiction.

Fig.2 summarizes the numerical data on the science-fiction authors listed in the preceding paragraphs of this section.

**Figure 2:** Summary of science-fiction published in *Cosmos* between 1962 and 1994, by language (of original publication).

<i>Language</i>	<i>Works</i>	<i>Authors</i>	<i>Works/Author</i>
<b>English</b>	150	69	2.17
<b>Russian</b>	98	50	1.96
<b>Bulgarian</b>	47	31	1.51
<b>Polish</b>	21	9	2.33
<b>German</b>	10	3	3.33
<b>French</b>	7	6	1.16
<b>Czech</b>	5	5	1
<b>Norwegian</b>	2	2	1
<b>Swedish</b>	2	2	1
<b>Japanese</b>	2	2	1
<b>Romanian</b>	1	1	1
<b>Hungarian</b>	1	1	1
<b>Danish</b>	1	1	1
<b>TOTAL</b>	<b>347</b>	<b>182</b>	<b>AVG. 1.90</b>

#### 4. Lost & found in translation and technical difficulties

It is important to note that, during the 1960s and 70s, science-fiction works originally written in English would more often than not appear in *Cosmos* in a translation from Russian, which was a tendency that persisted until the mid-1980s. Given the differences in transcribing English proper nouns between Russian and Bulgarian, this would sometimes lead to (somewhat comical) discrepancies in the spelling of certain authors' names as they turned up in the magazine in different years. For example, H. G. Wells would appear as “Херберт Уелс” in 1962, “Хербърт Уелс” in 1969, and “Хърбърт Уелс” in 1970 and onwards. Arthur C. Clarke's name was spelled “Артур Клерк” in 1964 and “Артър Кларк” in 1966 and later. Isaac Asimov was “Айзек Азимов” in 1969 and “Айзък Азимов” from 1970 on. Japanese names and terms were also affected by Russian-style transcriptions: Koji Tanaka (“Кодзи Танака” in 1985, rather than “Коджи Танака”) and *ninja* (“ниндзя” in 1983, while “нинджа” in 1994).

Ironically, Russian names themselves were sometimes the victim of spelling discrepancies, as transcription standards were apparently not quite settled yet in those years. Kir Bulychev's name, for instance, appears as “Кирил Буличъв” in 1972, changing to “Кирил Буличов” in 1977, “Кир Буличов” in 1981, only to revert to “Кир Буличъв” in 1985. This was, of course, when he wouldn't appear under his real name—“Игор Можейко” (1968), or “И. Можейко” (1972).

Publication and editing standards in general during the Soviet years will often leave the modern reader slightly confused. A good example would be a short story by Lyuben Dilov, who was described by the prominent twentieth-century science-fiction critic Ognyan Saparev as the “foremost” Bulgarian writer in the genre<sup>16</sup>, despite the fact that he was featured in *Cosmos* only once, as far as we can tell from the available archives. The story in question<sup>17</sup> is “More on the Question of Dolphins” (“Още по въпроса за делфините”, 1976)<sup>18</sup>, which was published in the Russian popular-science magazine *Knowledge-Power* (*Знание-Сила*, the Soviet equivalent of *Cosmos*, of sorts) in 1979 under the title “On the Question of Dolphins” (“К вопросу о дельфинах”)<sup>19</sup>, and also in the Russian adventure, science-fiction and mystery

---

<sup>16</sup> *Сапарев, О.* Скептичният смях на Любен Дилов // в Дилов, Л. Двойната Звезда // изд. Георги Бакалов, Варна, 1979. [<https://chitanka.info/text/26081-skeptichnijat-smjah-na-ljuben-dilov>] (accessed January, 2022).

<sup>17</sup> This is not the story that *Cosmos* published, which was called “Напред, човечество!”.

<sup>18</sup> *Дилов, Л.* Още по въпроса за делфините // Българска фантастика (Антология) / Ред. Сапарев, О. // изд. Христо Г. Данов, Пловдив, 1976. [<https://chitanka.info/book/358-bylgarska-fantastika>] (accessed January, 2022).

anthology “On Land and Sea” (“*На суше и море*”) in 1980 under the title “Conversation on a Moonlit Night” (“*Беседа в лунную ночь*”)<sup>20</sup>. Most striking, however, are the changes made in the text itself. In the original, the first paragraph says: ‘Recently, a number of scientific, quasi-scientific and all kinds of other reports have been published about the life of dolphins and the human attempts to penetrate the world of these mysterious creatures. The Black Sea countries even agreed to ban [dolphin-] hunting in their shared waters.’ (“*Напоследък често се публикуват научни, полунучни и всякакви други съобщения за живота на делфините, за опитите на човека да проникне в света на тия загадъчни същества. Черноморските държави дори се споразумяха ловът да бъде забранен в тяхното море...*”). While missing in *Knowledge-Power*, the second sentence of the passage quoted above appears in the aforementioned Russian anthology as: ‘In the Soviet Union, dolphin-hunting has even been banned’. (“*В Советском Союзе даже запрещена охота на дельфинов.*”). The first sentence of the next paragraph, too, manages to raise the reader’s eyebrows in one of the Russian versions: ‘At the time, I was on the other side of the globe...’. (“*Тогда аз се намирах на отвъдната страна на глобуса...*”). In *Znanie-Sila*, this was translated accurately (“*Я находился тогда по ту сторону глобуса...*”), while in “On Land and Sea” the translation is: ‘At the time, I was in the Western Hemisphere...’. (“*Находился я тогда в западном полушарии...*”). Reading on, one finds still more inaccuracies and slight content changes in both translated versions.

Unless we undertake a detailed cross-language examination of the actual texts, we can only speculate as to the number of inconsistencies and mistakes in the translations of the science-fiction stories published in *Cosmos*, which we are likely to find, especially considering the fact that they were often secondary translations via Russian and also considering the liberties taken by Russian translators, as we have just demonstrated.

Still, was there something to be gained in translation at all, given the way in which sci-fi literature from abroad got to the twentieth-century Bulgarian reader? One thing we can look at, apart from the usual benefits to do with bringing in foreign ideas, etc., is the fact that there was always a time lag between the publication of a work of science-fiction (or any type of fiction for that matter) in its original and translated form. Furthermore, this time lag would, on average, be longer for literature coming from the “enemy camp”, i.e. the West. In terms of contemporary works, this would not be such a great thing, of course, but when it came to older texts, Bulgarian readers definitely benefited from being able to read more modern-sounding

---

<sup>19</sup> Дилов, Л. К вопросу о дельфинах // Знание-Сила. 1979. № 624. С. 47–48.

<sup>20</sup> Дилов, Л. Беседа в лунную ночь // На суше и море / Под ред. С.А. Абрамова, М. Э. Аджиева и др. // Мысль (Москва) 1980. С. 376–385.

versions than the originals. For instance, H. G. Wells' "Æpyornis Island" was first published 1894, but arrived on the pages of *Cosmos* almost seventy years later, in 1962. Fredric Brown's "Arena" came out in 1944, while the readers of the magazine first saw it in 1988. Science-fiction already has the problem of tending to age as rapidly as the technology that informed it does, but when its language and style begin to sound outdated as well, it naturally becomes harder for a modern reader to draw inspiration from it. Which would be a great pity, especially if one were to agree with the words of Lyuben Dilov that 'The best truths will always be uncovered not by science, but art!' ("*Най-добрите истини винаги ще ни открива не науката, а изкуството!*")<sup>21</sup>.

One more group of problems that a look at the *Cosmos* archives reveals are various inconsistencies and errors of a typographic sort. For example, in the 1967/3 issue, the American author William F. Nolan is given as "Уйлям Полан", instead of "Уилям Нолън", and the story published is "And Miles to Go Before I Sleep" ("*Но остават още много мили*"). The surname is clearly misspelt, while the phonetically incorrect spelling "Уйлям" was a *Cosmos* practice which lasted until 1978, when William Morrison appeared as "Уйлям Морисън". This cannot be regarded simply as a foreign influence, given that the name is rendered as "Уильям" in Russian. To make this particular spelling even more inexplicable, one also finds William Shakespeare's name spelled in Bulgarian as "Уилямъ Шекспиръ" as early as 1936<sup>22</sup>, while the modern Bulgarian "Уилям", already appears in a 1969 *Cosmos* issue in the Bulgarian spelling for the name of author William Tenn.

Another striking example of editorial or perhaps in this case typesetting negligence would come from the late 1980s, when *Cosmos* went through a period (circa 1987-8) of conspicuously sloppy printing and a constant supply of typographical errors, with an especially large number of instances where the letters "a" and "e" would appear in each other's place, for example:

*Друг ученик стои на кр[e]я на стола, наклонил се напред, опир[e] се н[e] ръката, главата му е леко наведена. Учителката няма да сгреши, ако реши, че именно този ученик слуша с инт[a]рес. (1987/8, p.53)*

---

<sup>21</sup> *Дилов, Л.* Зеленото ухо // Българска фантастика (Антология) / Ред. Костурков, О. // изд. Христо Г. Данов, Пловдив, 1983. [<https://chitanka.info/book/396-bulgarska-fantastika>] (accessed January, 2022).

<sup>22</sup> *Шекспиръ, У.* Макбетъ: Трагедия въ петъ действия // прев. Г. Жечевъ // Библиотека „Свѣтовни писатели“, № 1, София 1936.

Or:

*Ако привържениците на геномния проект постигнат успех и проектът се осъществи с подкрепата на правителството, то всеки човек би могъл да се възползва от неговите р[а]зултати. Би било още по-добре, ако проектът ст[е] не интерн[е]ционален. Японците вече имат автоматични секвенсери и са постигн[е]ли договореност с промишлеността за осъществяването на свой собств[а]н проект, а европейците отдавна са лидери в г[а]нетиката. Възможно е в последователността на ДНК да има американска, японска и европейска част и тов[е] ще стане урок не само как трябва да се прави голямата наука, но и к[е]к в сътрудничество трябва да живеят хората от целия свят. (1988/9, p.15)*

It is almost as if someone was doing it on purpose.

A *Cosmos* editorial from 1991<sup>23</sup> does refer to some of the problems that the magazine had been experiencing in the previous years. It talks about “deliberate” efforts to “take down” the magazine in 1988, alluding to the forced merger of *Cosmos* with another magazine, *Science and Technology for the Youth* (*Наука и техника за младежта*). The editorial also mentions an attempt of the state-owned printing house Georgi Dimitrov to “get rid” of the magazine as its large volume of circulation was causing it “headaches”, as well as a severe “lack of paper” caused by the sudden and enormous proliferation of all kinds of printed material (magazines, newspapers, etc.) after the advent of democracy, which resulted in only six issues coming out in 1990. All this does not quite explain the above-mentioned typographic oddities, but *Cosmos*’s frank letter to its readers at least sheds light on some of the many difficulties it was beset with in its later years.

## 5. The boundaries of the unknown

Keeping a constant focus on stirring its audience’s intellect and imagination, and not afraid to ask the “What if?” types of questions, *Cosmos* frequently went into areas of research on ancient civilizations and a hypothetical alien presence, which would usually be described by the sceptical twentieth-century scientific mind as fringe theories or pseudo-science. A good example is the article “More on the Ancient Astronauts”<sup>24</sup>, published in the 1969/8 issue of the

---

<sup>23</sup> Уважаеми читатели! Какво стана с “Космос”? // Космос / Гл. Ред. Исаева, М. // Изд. АФ ВИКОМ. 1991. № 1. С. 11.

<sup>24</sup> Славчев, С. Още за древните космонавти // Космос / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1969. № 8. С. 16–19.

magazine, and written by Svetoslav Slavchev. Modern TV viewers familiar with the long-running American series “Ancient Aliens” (2009–present) might find it surprising that a lot of the same information that has been a staple of the show can already be found in a publication from an Eastern European country in the middle of its socialist experiment four decades earlier. The article in question mentions the Nazca lines, ancient Indian accounts of flying machines, the Japanese *dogū* humanoid figurines, and the now-famous Piri Reis map, among other things. Much of this material undoubtedly came from the then recently published book by Erich von Däniken, “Chariots of the Gods? Unsolved Mysteries of the Past”. In 1970, the magazine also published an article by von Däniken himself, titled “Back to the Stars!”, which proclaims in its opening paragraph that “Nowadays, however, nobody doubts the existence of extraterrestrial life.”<sup>25</sup>

Aliens and UFOs were a favourite topic on the pages of *Cosmos* through the years. Besides the two articles mentioned above, examples include: “Flying Discs: A Pseudo-Scientific Sensation or a Fantastic Reality?” (1967/1), “More on the Flying Discs” (1967/7), “Discs or Not?” (1967/8), “Flying Disc over Sofia” (1968/1), “More on the Flying Discs” (1968/5), “Who Is Sending Those Flying Saucers?” (1977/6), “Flying Discs and Disconauts” (1980/2), “UFOs – Myth or Reality” (1983/1), “Extraterrestrial Civilizations” (1984/5), “Are There Pyramids on Mars?” (1986/4), “Encounters of the Third Kind” (1989/6), “The Universe and I” (1989/8), “Mythology and Aliens” (1990/1), “Extraterrestrial Intelligence Drizzles over Sofia” (1993/1), “The Witness Is More Right Than Many Believe” (1993/3), and “Aliens, Please Call!” (1993/7).

The views expressed by the Bulgarian contributors to the magazine on the possibility of aliens visiting Earth varied while remaining mostly negative. However, we can see a trend of them slowly becoming less sceptical over time. In 1967, the readers were told that “The editorial board of *Cosmos* wholly supports the opinions of our scientists about the so-called flying discs. Our view is that, apart from cases involving mystifications and involuntary delusions, all observed phenomena can be explained with known physical, meteorological and technical earth phenomena”<sup>26</sup>. In 1977, Dimitar Peev wrote: “The flying saucers turned out to be one of the most amusing sensations of the post-war era. It has its socio-psychological basis (it is no coincidence that the country most favoured by the flying saucers happens to be the US) but, from a scientific point of view, it can be categorically said that flying discs (in the

---

<sup>25</sup> Деникен, Е. Назад към звездите! // Космос / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1970. № 5. С. 29–33.

<sup>26</sup> Летящите дискове: Лъженаучна сензация или фантастична действителност? (продължение) // Космос / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1967. № 2. С. 28.

sense of flying machines of extraterrestrial origin) do not exist. This, of course, doesn't mean that there are no intelligent beings other than humans in the Galaxy"<sup>27</sup>. And, in 1989, Yordan Kostov wrote: "As far as the descriptions of UFOs, 90 percent of them can be explained through atmospheric phenomena and other, purely earthly, causes. But that fact that the other ten percent remain unexplained forces scientists to refrain from sweeping conclusions"<sup>28</sup>.

Thus, the opinions featured in *Cosmos* regarding alien visitors did become slightly more open-minded over time, but perhaps the most significant thing was that, even when they were dismissed as "hallucinations" or "delusions", many people's experiences with strange encounters and UFOs (including a number of Bulgarian sightings) did find their way onto the pages of the magazine for the readers to make up their own minds. There was also the problem of getting through the communist censorship, and while this might explain the predomination of carefully crafted conservative opinions, it is still remarkable that topics of this kind were permitted to be discussed at all—every now and then even favourably. Or could it be that such "unproven" and "unorthodox" speculations were tacitly allowed as a kind of antidote to the severe lack of freedom of expression about contemporary social and political issues in socialist Bulgaria? After all, we might be witnessing something similar happening at present—at a time of extremely low public confidence in government institutions and mainstream media coverage of current events, we have seen the release of US military videos of UAP (or "Unidentified Aerial Phenomena", as UFOs seem to have been rebranded), along with Pentagon teams even investigating UFOs (see, for example, this NBC News article<sup>29</sup>).

A well-known example of the complex relationship which the Bulgarian communist authorities had with the mysterious and the other-worldly is the Baba Vanga phenomenon. According to Krasimira Stoyanova, niece and biographer of the famous Bulgarian healer and clairvoyant, "They banned her from seeing people looking for help, then allowed her, then banned her again. In the end, in 1967, she was officially permitted to work as a state seer; all the profits went into the state treasury"<sup>30</sup>. The latter half of a 1976 documentary<sup>31</sup> about Vanga

---

<sup>27</sup> Пеев, Д. Кой изпраща лелящите дискове? // Космос / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1977. № 6. С. 14.

<sup>28</sup> Костов, Й. Срещи от "третия вид" // Космос / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1989 № 1. С. 82.

<sup>29</sup> Seitz-Wald, Alex. 'Truth embargo': "UFOs are suddenly all the talk in Washington", in *NBC News* June 13, 2021. [<https://www.nbcnews.com/politics/politics-news/truth-embargo-ufos-are-suddenly-all-talk-washington-n1270560>] (accessed January, 2022).

<sup>30</sup> Ничия земя: Непознатата Ванга – разказът продължава / Сезон 7 Епизод 21 // НОВА ТВ, 06.02.2021. [<https://play.nova.bg/video/nichiya-zemya/season-7/nichiya-zemya-2021-02-06/543593>] (accessed January, 2022).



(which was censored at the time) features a discussion among a group of eminent Bulgarian academics, predominantly psychologists and psychiatrists, on the nature of her abilities. With the single exception of a person who had received an actual “reading” from Vanga, most of the participants are very sceptical, with some even calling her a “charlatan” and a “crook”. However, one discussant notably sums up the problem they all face: “From the point of view of scientific atheism, Vanga is not a subject of interest... However, she is a *phenomenon*, and the very fact that we are all assembled here is proof of the fact that she constitutes some kind of phenomenon... This phenomenon exists and must be analysed and studied in a multi-faceted way”.

A broad examination of the “materials” published by *Cosmos* during Bulgaria’s socialist years shows that it usually shied away from topics to do with mysticism, the possibility of life after death, communication with entities from other dimensions or the “beyond”, etc., which would not have fitted in well at all with the socialist system’s materialist worldview and its aversion to anything remotely “spiritual”. The same could of course be said about the prevailing attitudes of the positivist, reductionist and (narrowly) materialist enterprise of mainstream Western science of the same period, famously epitomized by the views of figures such as British biologist Richard Dawkins, but be that as it may, it was easier for *Cosmos* articles to ponder questions like “Who is sending those flying saucers?”<sup>32</sup>, than wonder about the nature of the “voice” inside Vanga’s head which she said was giving her information about the dead or about future and past events.

When it did address such phenomena, *Cosmos* would typically denounce them with a sceptical no-nonsense attitude. For instance, an article titled “Encounters with the World beyond the Grave” was featured in a 1979 issue of the magazine<sup>33</sup>, and dealt with what we would now call Near Death Experiences, only to conclude that “the studies undertaken by the proponents of ‘Life after Life’ are simply anti-scientific”. A 1982 article, called “Nostradamus, or the End of Oracles”, finishes with the emphatic words: “And what kind of prophet is he who for no less than four centuries and a half was always ill understood? And when were gullible people being deceived during all this time, whether in centuries past or now? The answer is—

---

<sup>31</sup> Феномен // Българска Телевизия / Главна редакция за документални филми // Интерфилм, Агенция София Прес. 1976. [<https://www.youtube.com/watch?v=aoTOIn0RIIM>] (accessed January, 2022).

<sup>32</sup> Пеев, Д. Кой изпраща лелящите чинии? // Космос / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1977. № 6. С. 11.

<sup>33</sup> Среци със “задгробния” свят // Космос / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1979. № 4. С. 21–22.

always!?”<sup>34</sup>

Still, the remarkable thing about the magazine was that it somehow managed to sneak in more daring opinions, or to at least admit possibilities beyond the conservative consensus at the time, especially if they could be framed in an acceptable way. Telepathy seemed to receive a slightly kinder treatment, for example: “If we assume that, though rarely, there are seer-telepaths, then palm reading, astrology and coffee reading lose their mystique. We just have to get rid of their religious aspects and to not be afraid of the ‘occult’ sciences, but to soberly investigate every case to find out if we are dealing with trickery, a highly developed ‘detective’ skill, or telepathy... And what about predicting the future? Let’s take it from the hands of the fortune-tellers and give it to the thinking machines. They would, somehow, be more reliable...”<sup>35</sup>. Again, it was Yordan Kostov who in 1984 would dare go further than many of his colleagues: “If science formerly used to view the living organism as a system which takes in, processes, and excretes substances into the environment, and later as a system consuming, processing and eliminating energy, then why not regard it as a system capable of receiving, processing and transmitting information? And such a system, according to the laws of evolution, should constantly improve itself [in the direction of developing prognosticating mechanisms], because a ‘good prognosis’ is key for survival.”<sup>36</sup>. He continued this line of thinking in 1989: “If we assume that an information-energy field exists around the Earth, we will have to accept that, because of the wave character of that field, we will be able to find information about a given living creature in every point of the space surrounding the planet, albeit in a very ‘rarefied’ state. Why, then, cannot we also admit the possibility of Man evolving towards interpenetrating the [field of the] human mind? Towards reading other people’s thoughts and, as it were, telepathy?”<sup>37</sup>.

Of course, the old guard was not to give up easily, and Pavel Bachvarov, in the very next issue and on the very same page, struck back with a vengeance, writing about an experiment he had conducted live on national radio when he challenged all Bulgarian clairvoyant wannabes to guess what he had written in an envelope that he placed on the studio

---

<sup>34</sup> *Бъчваров, П.* Нострадамус или края на оракулите // *Космос* / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1982. № 5. С. 39.

<sup>35</sup> *Славчев, С.* Ясновидството – да или не? // *Космос* / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1968. № 4. С. 9–13.

<sup>36</sup> *Костов, Й.* Ясновидство, пророчество, или прогностичен механизъм? // *Космос* / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1984 № 5. С. 50.

<sup>37</sup> *Костов, Й.* Отвъд сетивното // *Космос* / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1989 № 1. С. 58.

table. His conclusion: “[The result] wasn’t very complicated or far from the clear logic of any intelligent man. Not one of the fortune-tellers got close to the truth. And this was logical, seeing that mysticism is powerless”<sup>38</sup>.

Baba Vanga was never talked about in *Cosmos* until its publication ceased in 1994<sup>39</sup> thus turning out to be a scarier monster than Nessie of Loch Ness fame (which received at least four dedicated articles: 1964/9, 1975/7, 1984/4, 1989/7), or poltergeists (1988/9). This in spite of the fact that, after 1990, the magazine was much more open to all kinds of new horizons and former taboos, as were the times in general, with articles covering Jesus in India and Japan (1990/5), the Qi life force (1990/6), reincarnation (1991/7 & 1994/9), homeopathy (1991/9-10), transsexualism (1990/3 & 1993/1), channelling and mediumship (1992/3), Krishna consciousness (1993/2), Peter Dunoff and his Universal White Brotherhood (1993/3), euthanasia (1993/3), the Christian Bible (1993/5), homosexuality (1993/5), Islam (1993/6), ayahuasca (1994/8), the human soul, angels and demons in Christianity (1994/12).

“Prophecies” were all right, provided they were issued by Arthur C. Clarke<sup>40</sup>, but even the treatment of Nostradamus had taken a positive turn—his popularity was explained purely as the product of “people’s ignorance and superstition”<sup>41</sup> in 1982, while in 1994 it was stated that “Despite the ambiguity of his predictions, there are some which are quite remarkable.”<sup>42</sup>

*Cosmos*’s oscillating interest in human paranormal abilities is also evidenced in its coverage of psychics. After an early article about Roza Kuleshova who was said to be able to “see with her fingers” (1964/10), published undoubtedly also thanks to the fact that she was a Russian phenomenon, the readers of the magazine had to wait all the way until the late 80s and early 90s for the topic to resurface, with a mini-explosion of materials: Albert Ignatenko and his remote psychic abilities (1989/2), the powers of the Bulgarian healers Momera Pencheva (1989/7) and Vera Kochovska (1989/9), followed by a sceptical view on psychics in general

---

<sup>38</sup> Бъчваров, П. Кога гадателите познават? // *Космос* / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1989. № 2. С. 58.

<sup>39</sup> Bulgarian (and Russian) media have more than compensated for this in the subsequent years and up to the present day; Baba Vanga and her “prophecies” have been the subject of multiple documentaries and a great many books and news articles, to the extent that there are now probably more fictional or imagined Vanga predictions than actual things that she did say.

<sup>40</sup> Пророчеството на Артър Кларк // *Космос* / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. Издателски комплекс “Труд”. 1993. № 6. С. 6.

<sup>41</sup> Бъчваров, П. Нострадамус или края на оракулите // *Космос* / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1982. № 5. С. 39.

<sup>42</sup> Славчев, С. Нострадамус веща апокалипсис сега // *Космос* / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. “Медиа” Холдинг АД, София. 1994. № 12. С. 31.

(1991/6), which did however acknowledge the sudden great popularity of the topic: “In the beginning was Djuna [Davitashvili]. Then, the miracle assumed the names of [Allan] Chumak and [Anatoly] Kashpirovsky, while there are dozens more in this country. The mass media reacted at once and the Bulgarian, whose sense of the mystical had faded in the last few years, started to deliriously consume the avalanche of information. As soon as a new miracle worker appeared, crowds of suffering people rushed towards his temple”<sup>43</sup>.

The fact that *Cosmos* talked about all these people with paranormal abilities, as well as others, makes it all the more remarkable that Bulgaria’s most famous psychic and seer (as well as its most celebrated mystical export to Russia itself) did not receive any attention<sup>44</sup>. Is it because she was bigger than a holy cow<sup>45</sup>, and more like the elephant in the room?

## 6. Final Remarks

Twenty-three years after its disappearance, *Cosmos* was suddenly reincarnated in September, 2018, as an 80-page long monthly edition, with a new publisher (Media Group Bulgaria, *Медийна група България*), and with a smaller sales volume but also an online version<sup>46</sup>. The magazine is currently being put together by the editorial team of the Bulgarian newspaper *168 Hours (168 часа)*.

The first issue of the modern version of the magazine was, fittingly, “dedicated to survival”<sup>47</sup> and featured on its cover a picture of the Formula One driver Michael Schumacher, next to the title “Schumacher: Will He Wake Up?” (“Шумахер: Ще се събуди ли?”).

The void of the magazine’s prolonged absence had been filled “to some extent” by *Magazine 8 (Списание 8)*, according to Svetoslav Slavchev<sup>48</sup>, but the news that the “legendary” publication had reawakened was undoubtedly met with joy by many of its fans. Judging from the comments under a Facebook post made by the *Cosmos* editors on November 4, 2018<sup>49</sup>, the

---

<sup>43</sup> Трифонова, М. Екстрасенси! Екстрасенси? // Космос / Гл. Ред. Исаева, М. // Изд. АФ: ВИКОМ КО. 1991. № 6. С. 16.

<sup>44</sup> To be fair, this undoubtedly would have eventually happened if the magazine had not met its untimely demise in 1994. Cf. note 39.

<sup>45</sup> There have been frequent discussions in Bulgaria about whether she should be canonized, although the Bulgarian Orthodox Church has so far refused to do so. Cf., for example, Тахов, Р. Защо църквата не канонизира Левски и Ванга, а божиите отци почитат един крал-българоубиец. // 24 часа, 16.07.2014. [<https://www.24chasa.bg/ojivlenie/article/4194678>] (accessed January, 2022).

<sup>46</sup> [<https://www.168chasa.bg>] (accessed January, 2022).

<sup>47</sup> Ти купи ли си списание “Космос” за дългия уикенд? // 24 часа, 21.09.2018. [<https://www.24chasa.bg/novini/article/7066339>] (accessed January, 2022).

<sup>48</sup> Оруш, За космоса и списание Космос (Интервю с д-р Светослав Славчев) (cf. note 4)

reception was mostly warm. However, there were a few criticisms by people disappointed with the content—too “yellow” and “not enough science”. A Bulgarian science blogger summed up the latter kind of sentiment after the first two issues of the new *Cosmos* had come out<sup>50</sup>: “The past of the magazine is great and storied, and sets a very high bar...The reality [of the new magazine], however, is dull and sad. The aim of the new publishers is obviously to make money on the back of those old laurels, with a few cosmetic changes... From the very beginning, a look at the contents reveals chaos, and shows how far the new version of the magazine is from the original... Science is simply absent... There are two main ‘occult’ topics... Conspiracy theories are also a main theme... Where is the strictly scientific point of view?”. In a twist of irony, this passionate blogger is accusing the publication of doing what we saw its former incarnation often reluctant to do, thus limiting its scope of examined possibilities. But who is to decide where the fine line between scientific possibility and pure fiction lies? We would all like to shine a light on the truth but, as the twentieth-century American philosopher Terrence McKenna used to say, “the more powerful the light, the greater the surface area of darkness revealed”<sup>51</sup>.

It is clear that filling the shoes of that old Cobbler, nay *Cosmos*, is going to be an uphill task, better braced with *Schumacher* crampons if the new magazine is to be able to climb on top of frosty remarks like the above blogger’s. Apart from the 21<sup>st</sup>-century commercial Bulgarian reality, which is indeed very different to the old socialist days and has, in many people’s minds, fostered a dumbing down of publication standards and artistic output, the modern Internet content space is obviously very segmented. Gone is the common ground for a greater social consensus which existed until at least the mid-1990s and sanctioned social facts (despite those “facts” frequently turning out to be mere fiction in retrospect) —a result of the dominant role of mainstream mass-media. People can no longer easily agree about what constitutes reality anymore. “Conspiracy theory” has always been a derogatory term, but we have seen some of the greatest lies told by the proverbial “powers that be” in front of our very eyes on the TV screen or on the front page of newspapers, which has resulted in great mistrust of official information. As far as science, there is currently no real consensus even about topics of a literally vital importance, let alone harmonious agreement about less pressing problems,

---

<sup>49</sup> *Cosmos*’s Facebook page [<https://www.facebook.com/pg/spisaniecosmos/posts/>] (accessed January, 2022).

<sup>50</sup> Стефанов Й. (aka biologist). Пародията “Космос” // Блог Science & Critical Thinking, 02.10.2018. [<https://b9ine.net/2018/10/02/пародията-космос/>] (accessed January, 2022).

<sup>51</sup> McKenna, Terence. *Food of the Gods: The Search for the Original Tree of Knowledge. A Radical History of Plants, Drugs, and Human Evolution*. (New York: Bantam Books, 1992), p.49.

or other more subjective realms of existence. Paradoxically, social and other media in some countries priding themselves on their traditions of “freedom of speech” have been actively censoring points of view that dissent from those of the establishment. For people familiar with the old Soviet social reality centred around a very narrow range of acceptable opinions, it is ironic that in self-professed “bastions of democracy” there are now officially proclaimed “correct” and “incorrect” views, the latter to be banished from the sphere of “manufactured consent”, to use a Chomskyan phrase. Everybody is talking about “fake news” these days, but a critical look at how the term rose to abrupt prominence just a few years ago in Western mainstream media suggests not so much that fake news was suddenly a new phenomenon which urgently needed to be talked about (it absolutely wasn’t!), but that the term was promulgated in a concerted effort to try and discredit alternative points of view.

In any case, the Information Age has also turned out to be the age of disinformation. Which was always the case, but thanks to the weakened monopolies of those disseminating the information, this realization is nowadays easier to arrive at. “What can you trust in a world where nothing, in the old sense, is real?”, asked British historian James Burke in his 1985 TV series *The Day the Universe Changed*<sup>52</sup>. It is a world in which it is really down (or up) to each individual to decide for themselves what the “facts” are and to choose who to trust, for if they leave the task entirely to so-called “fact-checkers”, he or she or (...<sup>53</sup>) is unfortunately too often at the mercy of their agenda. This is certainly easier said than done, and therefore ours is also an age which urgently requires a new Renaissance Man and Woman, having been educated well enough in more than one narrow field and capable of thinking for themselves, so that they can see further into the truth stripped of political, ideological and commercial interests. Easier said than done...

Such are the times in which the modern *Cosmos* has to try and engage its audience, and continue to not only exist but also be loved by the inquisitive Bulgarian reader. We can only hope that it will at least stick to its original aspirations, as well as its guiding philosophy, which was reaffirmed in 1989: “*Редакцията на сп. «Космос» смята, че младите читатели трябва да бъдат информирани за всичко. И за това, което многократно и всеки момент може да бъде повторено в научните лаборатории, и за онова, което е на границата на фантастиката и само малцина смелчаци под недоумяващите погледи на сериозната наука се наемат да обяснят. Защото, убедени сме, загадъчното, труднообяснимото много повече провокира творческото въображение на човека.*” (“The

---

<sup>52</sup> Burke, James. A Matter of Fact: Printing Transforms Knowledge. *The Day the Universe Changed* (Episode 10 of the TV Series). BBC Productions. 1985.

<sup>53</sup> fill your blank here

editorial board of *Cosmos* is of the opinion that young readers should be informed of everything—both about phenomena that can be reliably reproduced in the science laboratory and about what lies on the border of the fantastic, which only a brave few dare try to make sense of, under the bewildered gaze of serious science. For we are convinced that the mysterious and the hard-to-explain stimulate the human creative imagination far more.’<sup>54</sup>.

#### **ABSTRACT**

ブルガリアでは、国内の作家による空想科学小説より海外のサイエンス・フィクション小説が盛んに読まれてきたが、20世紀後半にSF界やポピュラーサイエンス界で最も大きな存在となった出版物は「コスモス」という月刊誌である。この論文は、「コスモス」の主な内容について紹介し、雑誌の32年間にわたる前世紀の歴史の中で掲載されたポピュラーサイエンス記事及びSF作品を整理しながら、さまざまな傾向、焦点、問題点、更に諸問題に関する雑誌のスタンスや編集上の制約について報告している。

#### **NOTE:**

A talk on the same topic was presented at the「スラヴ世界のSF——K. チャペック『ロボット』初演100周年によせて——」online symposium（日本スラヴ学研究会, Nov. 28, 2021）.

---

<sup>54</sup> Космос дискутира // Космос / Гл. Ред. Дичев, С. // Изд. ЦК на ДКМС. 1989. № 2. С. 70.





【シンポジウム】

## ピョートル・シュルキンの〈ディストピア四部作〉

——外部への脱出を求めて——

菅原 祥

## はじめに

ポーランド映画の歴史において、「SF映画」は決して盛んに制作されてきたジャンルであるとは言えない。しかし、1970年代から80年代のポーランドにおいてはいくつかの特筆すべきSF映画が相次いで作られ、中にはアンジェイ・ジュワフスキ監督の『シルバー・グローブ／銀の惑星』(1977-1987年)<sup>1</sup>のような伝説的作品や、ユリウシュ・マフススキ監督の『セックスミッション』(1983年)<sup>2</sup>のように今日に至るまで大衆からカルト的な人気を博している作品も存在する。本稿ではこれらポーランドの社会主義体制後期から末期にかけてのSF映画の中から、特に一連の注目すべきディストピア映画を制作したピョートル・シュルキン (Piotr Szulkin, 1950-2018) 監督の作品を取り上げてみたい。

まず、当時のポーランドの状況について簡単に確認しておきたい。1970年代前半はエドヴァルト・ギエレクがポーランド統一労働者党の第一書記に就任した時期にあたる。この時代は一般的に「ギエレク時代」と呼ばれており、外資の導入による積極的な消費刺激と投資拡大が行われた結果、ポーランドには一時的な好景気と消費文化の時代が到来する。しかしこれは長続きせず、1970年代後半には経済の行き詰まりが深刻化し、1976年には食料品の値上げに端を発した労働者の暴動が起こり体制を揺るがすことになる。以後、反体制運動・地下運動が活発化していき、最終的に1980年代の「連帯」運動と戒厳令の時代へと突入していくことになる。

このような時代背景を受けて、当時のポーランドにおいては社会的な問題意識や社会批判・体制批判の意図を持った野心的な映画作品が多く作られた。代表的なのが、1970年代後半の「道徳的不安の映画」Kino moralnego niepokoju と呼ばれる一連の社会派映画である。この潮流は1976年に作られた2本の映画、すなわちアンジェイ・ヴァイダの『大理石の男』<sup>3</sup>およびクシシュトフ・ザヌッシの『保護色』<sup>4</sup>に端を発するも

<sup>1</sup> *Na srebrnym globie*, rež. Andrzej Żuławski, 1976-77, 1986-87.

<sup>2</sup> *Seksmisja*, rež. Juliusz Machulski, 1983.

<sup>3</sup> *Człowiek z marmuru*, rež. Andrzej Wajda, 1976.

<sup>4</sup> *Barwy ochronne*, rež. Krzysztof Zanussi, 1976.

ので、以後ヴァイダの映画ユニット「X」やザヌッシの映画ユニット「トル」の監督たちを中心として、当時のポーランドの社会的・道徳的危機や腐敗を扱った野心的な作品が続々と制作されることになる<sup>5</sup>。やがて1980年代になると、「連帯」運動や戒厳令など、当時の政治的激変を背景とした映画も作られた。

また本稿では直接扱わないが、同時代の関連する重要な現象として当時のポーランドにおける「社会学的SF小説」*fantastyka socjologiczna*の潮流についても言及しておきたい。特に1980年代にポーランドのSF界において人気を博したこの潮流は、何らかの全体主義的な社会システムを描いた一連のアンチユートピア的・ディストピア的SF小説によって知られている。そうした設定の背景にあるのは当然のことながらポーランドの社会主義体制に対する批判的な問題意識であり、それゆえこれらの作品はしばしば当時のポーランドの社会的現実のアレゴリーとして読まれていた<sup>6</sup>。

本稿で論じるピョートル・シュルキンの映画は、これら同時代の文化現象ときわめて近い問題系を扱いつつも、それらからはっきりと一歩距離を置いたスタンスの作品として独特の存在感を有している<sup>7</sup>。であるからこそ、「道徳的不安の映画」や「社会学的SF」の多くの作品が社会主義体制崩壊後にそのアクチュアリティの大部分を失ってしまったようにも思える現代においてなお、シュルキンの映画はその輝きを失っていないのである。本稿は、当時のポーランド社会においてのみならず、現代においてもなおこれらの映画が有している批評性を明らかにすることを目的としている。

## 1. 『ゴーレム』と『宇宙戦争——次の世紀』

以下、ピョートル・シュルキンの〈ディストピア四部作〉(『ゴーレム』『宇宙戦争——次の世紀』『オ＝ビ、オ＝バ：文明の終わり』『ガ、ガ：英雄たちに栄光あれ』)<sup>8</sup>

<sup>5</sup> 「道徳的不安の映画」に関しては、以下のモノグラフが詳細である。Dobrochna Dabert, *Kino moralnego niepokoju*, Poznań: Wydawnictwo Naukowe UAM, 2003.

<sup>6</sup> ポーランドの「社会学的SF」については例えば以下が詳しい。Mariusz M. Leś, *Fantastyka socjologiczna. Poetyka i myślenie utopijne*, Białystok: Wydawnictwo Uniwersytetu w Białymstoku, 2008.

<sup>7</sup> 特に「社会学的SF」に関してはシュルキンの映画との類似点がしばしば指摘されるが、シュルキン本人の言によれば、彼は当時これらの作家たちの作品をひとつも読んだことがなかったという。加えて彼はこれまで出会ったポーランドのSF作家全般に対してあまり良い印象を持っていないということを述べ、自身とそれらの作家たちとのスタンスの違いについて強調している。Piotr Kletowski i Piotr Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*, Kraków: Korporacja Ha!art, 2012, s. 126.

<sup>8</sup> なおこれら4作品には全てシュルキン本人の筆になる原作(短編小説)が存在する。『ゴーレム』『宇宙戦争』『オ＝ビ、オ＝バ』の3作品の原作は短編集 *O bi, O ba i inne prawdziwe nowele filmowe* (Warszawa: Wydawnictwa ALFA, 1984) に、『ガ、ガ』の原作は短編集 *Ga, Ga. "Szpital"* (Bydgoszcz: Pomorze, 1988) にそれぞれ収録されている。また2006年にはこ

の分析に入っていきたい。これらの映画は、社会主義時代の末期に制作されたこと、いずれも何らかの全体主義的なシステムを批判的に描いていることから、しばしば狭い意味での政治的風刺、すなわち当時のポーランドの社会主義体制への批判を意図した作品とも受け取られがちであるが、そのように矮小化した形でシュルキンの作品を理解することは、これらの作品の真の価値を捉え損なうことにつながるだろう。むしろこれらの作品は、そうした単なる政治的風刺にはとどまらないより普遍的なテーマを志向したものであるし、また、監督本人もインタビューのなかで自身の映画の意義をそのようなものと再三強調しているのである<sup>9</sup>。とりわけ興味深いのは、これら四部作のいずれもが何らかの形で全体主義的な社会システムを描きつつ、その結末においてはシステムの外部への〈脱出〉を志向しているという点である。以下、この点に特に注目しながら四部作を順に紹介していきたい。

四部作の最初の作品が、1979年の『ゴーレム』<sup>10</sup>である。これはもともとはグスタフ・マイリンクの『ゴーレム』<sup>11</sup>に着想を得た作品であるが、シュルキンおよびシナリオの共同執筆者のタデウシュ・ソボレフスキによってかなり自由な翻案がなされており、マイリンクの『ゴーレム』とはほぼ別物になっている。舞台は、核戦争後の放射能汚染で人類の生存が脅かされている荒廃した未来社会で、そのような環境の中、「より優れた人類」を生み出す実験によって生み出されたペルナートは、体制側の密かな監視のもと、元のペルナートと入れ替わって生活を送り始める。次第にペルナートは「新しい人類」には必要のない「自我」や「感情」「良心」を発達させ、周囲の女性を誘ってどこかへ逃亡しようとする。やがて大家のホルトゥルムが殺害されたことを口実にペルナートは殺害容疑で逮捕され、おそらくそこで再び何らかの人格改造手術を受ける。釈放され荒れ果てた自分の部屋に戻ってきたペルナートは、ホルトゥルムの隠し部屋を見つけ、そこの窯でホルトゥルムがペルナートをモデルに作り上げようとしていたと思しき焼成された黒焦げのゴーレムを発見する。ペルナートはゴーレムの口に警察の荷物預け係から受け取った「GZ 565」という自分の番号札を咥えさせることでゴーレムに生命をふきこみ<sup>12</sup>、その後路上を行進する楽隊とともに町を去る。その後、エンドロールの途中で唐突に政治家（ヒトラーのような、人間性を喪失した扇動政治家のように見える）の演説シーンが流れる。政治家はペルナートと同

---

れら映画原作4作品をまとめて収録した短編集 *Socjopatia* (Kraków: Korporacja Ha!art, 2006) が出版されている。

<sup>9</sup> Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*.

<sup>10</sup> *Golem*, rež. Piotr Szulkin, 1979.

<sup>11</sup> グスタフ・マイリンク (今村孝訳) 『ゴーレム』、白水社、2014年。

<sup>12</sup> 口に呪文を描いた札を入れてゴーレムに生命を吹き込むという中世のゴーレム伝説がもとになっている。

じ顔をしており、カメラがズームすると政治家が手許に「GZ 565」の札を持っているということが明らかになる。

奇妙な不安感と謎めいた暗示的描写に支配された『ゴーレム』は、筋の通った合理的解釈が極めて困難な作品である。作中で起こっている出来事には極めて曖昧だったり意味不明だったりする箇所が数多く存在し、また前後のつながりがよくわからないようなシーンも散見される。そのため、上に述べたこの映画の「あらすじ」も、あくまで映画の中に断片的にちりばめられたさまざまな手がかりから最も蓋然性の高そうな解釈を再構成したに過ぎない<sup>13</sup>。このような、まるで夢の世界のような奇妙な浮遊感を持つカフカの世界を描いているところが本作品の最大の魅力で、そこにおいては「人造人間」というモチーフによっても明らかな通り、自己同一性と記憶の不安定さや、それらの揺れ動きというテーマが追求されているように思える<sup>14</sup>。

『ゴーレム』の結末は、主人公が自らをとりまくシステムからの脱出を志向するというものになっている。先にも述べたとおり、この「外部への脱出」は四部作の後の作品とも共通するモチーフなのだが、第一作の『ゴーレム』においてはそれはまだ曖昧な暗示的描写のレベルにとどまっている。本作のラストにおいて自分の荷物札を黒焦げのゴーレムに与えたペルナートは、それによって体制側からの一方的な管理・操作の対象となる自らのアイデンティティを捨て去り、街中を演奏して練り歩く楽団についていってそのまま姿を消す。ペルナートのその後の運命は不明である。こうして、ペルナートはここではないどこかへと「脱出」を試みるが、その運命は明らかにはなっていない<sup>15</sup>。

『ゴーレム』においてはぼんやりと示唆されるだけだった「外部への脱出」は、後のシュルキン作品においてはより明示的に描かれるようになる。四部作の第2作であり、1981年に制作された『宇宙戦争——次の世紀』<sup>16</sup>は、H. G. ウェルズ『宇宙戦争』<sup>17</sup>やそれをもとにしたオーソン・ウェルズの有名なラジオドラマから着想を得ているが、やはりこちらも物語は完全にシュルキンのオリジナルになっている。またこの作品は、1981年の戒厳令のちょうど直前の時期に制作された作品であるが、作中

<sup>13</sup> この作品のストーリーに関しては、以下の Kino 誌に掲載された映画評が詳細な解釈を行っており、本稿も基本的にこの解釈に従っている。Hanna Książek-Konicka, *Parabola świata zdegradowanego*, „Kino” nr 2/1980, s. 11–15.

<sup>14</sup> Sebastian Jakub Konefał, *Piotr Szulkin: katastrofy logosu i absurdu istnienia*, „Kwartalnik Filmowy” nr 104, 2018, s. 218.

<sup>15</sup> 結末に関するこの解釈はあくまで筆者の視点からのものに過ぎない。多くの別の解釈では、ペルナートの楽団への参加をよりネガティブなものとして、すなわち別の全体主義的支配のシステムへの新たな従属を示唆したものとして理解しているようだ。

<sup>16</sup> *Wojna światów – następne stulecie*, reż. Piotr Szulkin, 1981.

<sup>17</sup> H・G・ウェルズ（井上勇訳）『宇宙戦争』、東京創元社、1969年。

に描かれる火星人と治安維持部隊に支配された都市の風景が後のポーランドの戒厳令下の風景を連想させるため、しばしば「戒厳令を予言した作品」とも評される。実際、この映画はその内容を危険視した当局によって公開禁止処分にあり、2年後の1983年ようやく公開されることとなった。

物語は西暦2000年、突如として火星人が地球に襲来してから12日後から始まる。主人公アイロン・イデムの視点を通して、人類の血液を要求する火星人に協力して暴力的な全体主義的国家体制を作り上げる権力側や、そのもとで行われるマスメディアによる情報の歪曲が描かれる。主人公アイロン・イデムは有名なテレビ司会者であるが、火星人に協力して「火星人と地球人の友好」のプロパガンダ放送をすることを余儀なくされる。ただしそれによってイデムが何らかの恩恵を得ることはなく、むしろ妻を秘密警察に誘拐されたり住んでいるマンションを追い出されて路上生活者になったりと、体制側によって散々に痛めつけられ、脅されることになる。やがて侵略から2週間後、火星人は地球を去ることになり、華やかなお別れコンサートが開催される。しかし火星人がいなくなったあともメディア操作と一体化した全体主義的な国家体制は何一つ変わらないまま残り、火星人がいなくなるや否や今度は一転して苛烈な反火星人プロパガンダによる支配が行われるようになる。火星人とのお別れコンサートの場でメディアに耽溺する大衆に対して目を覚ますよう呼びかける演説を行ったイデムは、メディアによる事実の歪曲によって逆に火星人への盲目的な服従を説いたことにされてしまい、見世物裁判で死刑を宣告される。

これらのあらすじから明らかなように、この『宇宙戦争——次の世紀』は四部作の中ではもっとも直接的に当時のポーランドの社会主義体制への批評が行われているようにも思える。苛烈な全体主義体制を背後から操る火星人の存在は、ポーランドの社会主義体制の背後に控えているソ連の存在をたやすく連想させるし<sup>18</sup>、また作中に描かれる治安部隊によって制圧された都市の風景は、やがてやってくる戒厳令の予感と不気味に重なりあう。また、テレビメディアによって支配され作られた「現実」と、そうしたメディアの操作や歪曲に唯々諾々と従いつつただ現状に満足しているだけの大衆の姿が極めて批判的に描かれている点にも、本作のメッセージ性の強さが現れている。メディア批判・スペクタクル批判のテーマはシュルキンの他の作品にも共通するものであるが、それが最も正面から描かれているのがこの『宇宙戦争』なのである。

<sup>18</sup> ただし既に述べた通り、映画の中にこうした直接的な政治的含意を読み取るような解釈に対しては他ならぬシュルキン監督本人が抵抗を示しているということには注意が必要である。『『宇宙戦争』に関しては、あれを極限状態に置かれた社会とそれに向き合おうとする個人を描いた映画だと見てくれた人は少なく、ただみんな私に向かって「火星人はロシア人のことだろう？」とピークパーク言うばかりだった」Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*, s. 79–80.

アイロン・イデムがいかに自らの生命をかけて人々に目を覚ますよう呼びかけても、スペクタクルに目を奪われた人々に彼のメッセージは全く届かない。彼らは現状に満足し、自分たちを一時的に楽しませてくれるものしか必要としていないのである。街頭テレビでイデムの演説を見ていたある男は、その後たまたまそこを通りかかった本物のイデムに気づいて次のように食ってかかる。

今日あんたを見ましたよ。おれは配管工でね。それにしても、今日のあんたは失敗でしたよ。おれはこういうことを正面から言っても平気なんです、何があってもおれはびくともしませんから。だって、配管工はいつだって必要ですからね。だからおれは何も怖くないし、あんたにもこういうことが言えるんだ。今日のあんたはダメだったね……。おいあんた、見てみろよ、ここは何もかもが素敵にセッティングされてるじゃねえか？ いろんな屋台が一本の〔街頭テレビの〕柱の下に集められて、新鮮な空気が吸えて、健康的で、ビールも飲めるし……。何だよあんた、言ってみてくれよ、これ以上何を欲しがると言うんだ？ え？ おれはあんたにこういうことを言っても怖くないんだ。だってあんた、おれに何ができる？ 何もできないだろ！ だっておれは配管工だから。<sup>19</sup>

さて、この作品においてもやはり結末においてシステムの〈外部〉の存在が登場する。銃殺刑に処されることになったアイロン・イデムは刑場に連れてこられ、その様子をテレビ画面が捉えている。銃殺隊がイデムに向けて発砲した次の瞬間、テレビ画面の中には銃弾を受けたイデムがその場に崩れ落ちる姿が映されているが、現実のイデムは銃弾を受けておらず、無傷のままである。イデムはその場から立ち去り、刑場のテレビセットの外周を囲んでいる巨大な鉄壁の扉を押し開ける。すると、鉄扉の向こうに光に包まれた霧のようなものが見え、イデムはその霧の中へと足を踏み出していく。

映画批評家のセバスティアン・ヤクブ・コネファウが言う通り、この結末は多義的である。鉄の壁の外に出たイデムが目にしたものは何なのか。そこで彼はこの世界の「虚偽」を暴く「真実」を知ることになるのか。それともこの結末は、イデムによるこの世界の「ゲームのルール」の最終的な受け入れを示唆しているのか<sup>20</sup>。その点の解釈にはさまざまな可能性の余地があるが、いずれにせよイデムはテレビカメラによって作り出された「現実」の〈外部〉へと足を踏み出していくのである。

<sup>19</sup> *Wojna światów – następne stulecie* からの台詞の書き起こし。

<sup>20</sup> Konefał, Piotr Szulkin: *katastrofy logosu i absurdu istnienia*, s. 220.

## 2. 『オ＝ビ、オ＝バ』と『ガ、ガ』

さて、四部作の3作目は1984年制作の『オ＝ビ、オ＝バ:文明の終わり』<sup>21</sup>である。核による最終戦争によって地表に住めなくなった未来、人類は生き残りのため建造された「ドーム」で悲惨な生活を送っている。彼らの唯一の拠り所となっているのが、やがて人類を救済するためにやってくるという「方舟」への信仰である。実はこの「方舟」の伝説は指導者たちが人々をドームに連れてくるために流したプロパガンダなのだが、指導者たちが方舟の嘘を認めたあとでも人々はその事実から目をそらし続け、相変わらず「方舟」による救済の物語にしがみつくとことで過酷な現実から逃避している。そんな中、ドーム内の秩序をなんとか維持しようとあれこれ奔走するのが、ドームの指導者の手足となって働く主人公のソフトである。主人公のソフトは4部作で唯一の「体制側」の主人公であると言えるが、出口のないドームの閉塞的な現実の中では、そんな彼もまたシステムに囚われた一人の囚人と何ら変わるところがない。そんな中、ドームの外壁がついに耐久限度を迎えて崩壊する危機に陥る。

ほとんど全編が閉ざされたドームの中で展開する『オ＝ビ、オ＝バ』は、四部作の中でも最も暗鬱な作品であるということができよう。『宇宙戦争』と同様、この映画からもまた多くの社会批評的な含意を読み取ることは可能である。例えば「ドーム」の社会は社会主義体制末期のポーランドの社会状況（恒常的な物資の不足、闇市場、体制への不信感 etc.）のアレゴリーとも読めるだろう<sup>22</sup>。しかしこの映画の中で何よりも重要なのは、「方舟」の嘘の伝説に（それが嘘だと明らかになったあとも）しがみつき続ける住民たちのみじめな姿そのものではないだろうか。住民たちがゾンビのようにうろろとするホールの中では、スピーカーから次のようなメッセージが絶えず流されている。

「方舟は存在せず、決して到来しない。噂や流言、迷信を信じてはならない。あなたたちの今日と未来は全てあなた達自身にかかっている」<sup>23</sup>

こうして、指導者たちは必死で方舟信仰から住民たちの目を覚まさせ、現実の活動へと人々を向かわせようとするのだが、住民は誰もこの放送を信じず、方舟信仰を捨てようとしな。皮肉なのは、ここにおいては体制側が流すプロパガンダ放送が、まぎれもない「真実」であるということである。しかしそれにもかかわらず、それら真実を語るプロパガンダ放送は（虚偽を語るプロパガンダと全く同様に）人々の耳を素

<sup>21</sup> *O-bi, o-ba. Koniec cywilizacji*, reż. Piotr Szulkin, 1984.

<sup>22</sup> Krzysztof Loska, *Piotr szulkin – wyobraźnia apokalipsyczna*, [w:] Grażyna Stachówna i Joanna Wojnicka (red.), *Autorzy kina polskiego*, Kraków: Rabid, 2004, s. 171–181.

<sup>23</sup> *O-bi, o-ba. Koniec cywilizacji* からの台詞の書き起こし。

通りしていくのだ。ソフトと老エンジニアが交わす次の会話は、真実に目をつぶり、偽りの救済を受動的に待つこれらの人々の心理を見事に描いている。

**ソフト:**まさかあなた、方舟の到来を信じていらっしゃるわけじゃないですよ？

**エンジニア:**いや、方舟は存在しない……だが存在するかもしれない。そこに方舟の偉大さがあるのだ。

**ソフト:**からかっているんですか！

**エンジニア:**いやちっとも。空虚は何かで埋める必要があるのだ。どうして信じてはいけない？方舟というのは素敵な考えじゃないか。理にかなった、役に立つものだ。やってきて私を連れて行ってくれるもの。言ってみればこの信仰は、私の切望を慰めてくれるのだ。

**ソフト:**あなたは、自分で自分を騙していると知りながら、そんなたわごとを信じているというんですか！

**エンジニア:**あの方舟の到来を待っている人たちの中に身を置いていると、とてもいい気分なんだよ。<sup>24</sup>

さて、それではこの『オ＝ビ、オ＝バ』においては「システムの外部への脱出」というモチーフはどのように描かれているだろうか。最後、他の住民たちとともに崩壊したドームから外へ逃れでたソフトは、死んだはずの娼婦ゲアを乗せた気球が自分のもとに降りてくるのを目にする。気球が降ろした縄梯子を伝って、ソフトの「分身」がゲアとともに気球に乗り込み、地上に残されたソフトはそれを見送る。こうして、この映画のラストにおいては「方舟」による救済という願望がきわめて個人的・現実逃避的な形で充足されるという結末を迎える<sup>25</sup>。

四部作の最後を飾るのが、1985年制作の『ガ、ガ：英雄たちに栄光あれ』<sup>26</sup>である。この映画は四部作の中では唯一、地球以外の惑星が舞台という設定になっている。宇宙探査に囚人が使われるようになった未来、主人公の囚人スコープは惑星「オースト

<sup>24</sup> *O-bi, o-ba. Koniec cywilizacji* からの台詞の書き起こし。

<sup>25</sup> シュルキン本人もやはりこのシーンが自身の個人的逃避願望に由来することを認めている。「私は、私が経験しているあらゆることすべてを経験しなくてすむ自分の『アルター・エゴ』を作りたい。こんなにたくさん石が入っていないリュックを背負ったシュルキンになりたい。この疲れ切ったシュルキンから脱出したいのだ。毎日彼から解放されたいと思っているのだが、なかなかうまくいかない」Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*, s. 203.

<sup>26</sup> *Ga, ga. Chwała bohaterom*, reż. Piotr Szulkin, 1985. なお、この作品の着想元が何だったかということに関しては諸説あり、またシュルキン本人の言い分にもはっきりとしない点があり、事実関係が判然としない。詳細は以下を参照のこと。Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*, s. 207–241.



ラリア 458」に探査のために投下されるが、そこで主人公はその星の住民たちからなぜか「英雄」として祭り上げられ、特別待遇を受ける。だがやがてこの惑星における「英雄」というのが何らかの犯罪を犯したあと見世物として杭に串刺しにされて殺される役目であるということが明らかになり、スコープは一目惚れをした若い娼婦のワンスとともになんとかこの惑星から脱出しようとする。この映画が印象的なのは、「英雄」への拷問と処刑という不条理極まりない「儀礼」によって人々を支配する全体主義社会を描いている点で、それゆえ本作は四部作の中で最も戯画的に強調されたグロテスクさが前面に出た作品になっている。だが、それにもかかわらず、シュルキン本人によれば本作こそが彼の作品中で「もっとも現実に関与した作品」なのである。それは、この映画に描かれたあまりにグロテスクな現実が、当時の社会主義体制末期のポーランドの現実そのものであるからに他ならない。

この現実ではあらゆるもののボタンが外れている。この現実は無意味なものなんだ。官僚の中央集権組織でさえも——一見まだすべてが機能しているように見えて、すべてが崩壊し、すべてがバラバラになりつつあるんだ。これはちょっとだけ政府の〈連帯〉に対する対処の仕方を思わせるところがある。まだ厳しく対応しているように見えて、実は全てが侵食されつつあって、この場で崩壊しているのさ。<sup>27</sup>

この崩壊しつつある現実に対するシュルキンの態度は、ある意味で馬鹿馬鹿しいと言ってもいいような本作品のエンディングにも現れている。主人公と娼婦ワンスは、主人公が着陸した脱出艇とともに人類のいない星へと向かうことにする。ふたりが抱き合っただけキスする中、宇宙船は発射し、その後宇宙を描いた画面の上に「二人は長い間幸せに暮らし、新たな文明の始まりを築きました」というクレジットが流れる。この、まるで現実味のない、取ってつけたような「外部への脱出」の描き方は何を意味しているのだろうか。例えば、四部作を論じたクシシュトフ・ロスカは、四部作の中でこの『ガ、ガ』が最もペシミスティックな作品であると論じている。それはこの作品が表現しているのが、システムが何らかの形で「変化」することの可能性への信仰そのものの喪失であるからである。だからこそ、『ガ、ガ』において最終的に、

主人公はうまくシステムを出し抜き、(カタジナ・フィグラ演ずる)美少女とともに逃げ出すことに成功する。ここにおいて、終末論的な想像力は敗北を被ることになる。なぜならそこには本質的に変化のチャンス、すなわち現存する体制の

<sup>27</sup> Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*, s. 223.

崩壊と新たな秩序の誕生のチャンスや、それとともに人間が内面から変化するチャンスが欠けているからだ。<sup>28</sup>

ロスカが指摘するような本作を貫く深いペシミズムは、シュルキン本人の発言からもうかがい知ることができるだろう。娼婦ワンスを連れて惑星を脱出する主人公スコープの決断を、シュルキンは次のように代弁している。

俺の周りにいるこいつらは、みんなバカばかりじゃないか。このサロンから出ていかなければ。もうこいつらには我慢できない。<sup>29</sup>

このサロンから逃げよう、このパーティーから逃げよう、もうこんなところにいるのはごめんだ。<sup>30</sup>

### 3. むすびにかえて

本稿では、1970年代から80年代のポーランドの文化的・社会的文脈を踏まえてピョートル・シュルキンの〈ディストピア四部作〉を紹介した。これらの作品は共通して、一見して当時のポーランドの社会主義体制を強く連想させる何らかのディストピア社会を描いている。そのためしばしば、これらの映画は当時のポーランドの社会的現実をアレゴリカルに描いたものとみなされてきた<sup>31</sup>、またその意味でやはり当時のポーランドの社会的現実をアレゴリカルに描いた「社会学的SF小説」の潮流としばしば比較されてきた。ただしシュルキン監督本人が再三強調している通り、彼の映画は決して「社会主義体制批判」や「共産党批判」のような、狭い意味での政治的風刺を意図したものではなかった。シュルキンの映画は、あくまで当時のポーランド社会の現実を出発点としつつも、同時に社会や文明に関するより普遍的な問題意識に支えられたものであった。ヤクブ・マイムレクがいみじくも論じているように、彼の映画は当時の東欧の社会主義体制のみならず、後期資本主義をも含んだより大きな「近代」そのものに関する批評を志向するものだったのである<sup>32</sup>。その意味で彼の作品は、ちょ

<sup>28</sup> Loska, *Piotr szulkin – wyobrażenia apolaliptyczna*, s.180.

<sup>29</sup> Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*, s. 223.

<sup>30</sup> Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*, s. 224.

<sup>31</sup> Krzysztof Loska, “The Apocalyptic Imagination in the Films of Piotr Szulkin,” *Maska: Magazyn antropologiczno-społeczno-kultury* 35/2017, pp. 11–22.

<sup>32</sup> Jakub Majmurek, 2010, “Utopia, dystopia, escape: Surrealism and Polish science fiction / fantasy cinema,” Kamila Wielebska and Kuba Mikurda (eds.), *A Story of Sin: Surrealism in Polish Cinema*, Kraków: Korporacja Ha!art, pp. 160–185.

うど彼が賞賛する H. G. ウェルズの『タイム・マシン』がそうであるように<sup>33</sup>、作者をとりまく当時の社会的現実からの類推（アナロジー）によって架空の世界を構築し、それによって近代社会に関する根源的な思惟を可能にする、優れたユートピア SF 作品であると特徴づけることができるのではないだろうか<sup>34</sup>。

言うまでもなく、SF 文学・ユートピア文学における「類似」（アナロジー）のはたらきを強調したのは文芸批評家のダルコ・スーヴィンである。よく知られているように、彼は SF を他の文学ジャンルと区別しているのは、SF の物語において導入される何らかの「新事象」（ノーヴム）の存在であると論じた。

物語の核に新事象をすえれば、論理的必然として、そこから別の現実世界が発生する。そしてこの新たな現実世界が機能するには […]、作者の現実との往復的フィードバック運動は欠かせなかった。いうまでもなく、この別の現実は総体としてみると——あるいは焦点となる関係のいくつかをみると——作者の属する経験的現実の《アナロジー》となっている。たとえ、（経験論的に実証できないという意味で）どれほど空想的であろうと、描かれる人物なり世界はつねに《寓話の様式で語られる私たち》*de nobis fabula narratur* なのだ。<sup>35</sup>

シュルキン作品を論じる上で欠かせないもう一つの特徴は、そこにおいて主人公が自らをとりまく全体主義社会の〈外部〉へと脱出を試みるという点である。『宇宙戦争——次の世紀』において典型的に見られるように、これらの全体主義システムをその根底において支えているのはテレビをはじめとしたメディアによる擬似環境なのであり、シュルキン作品においてはそうしたスペクタクルに覆い尽くされた世界の「外

<sup>33</sup> シュルキンはウェルズの『タイム・マシン』について次のように言っている。「こんにちは『タイム・マシン』を読んでみると、これが社会に関する隠喩に他ならないということがわかる。これは時間装置や時間移動をするための装置の話なんかではなく、産業社会の変容に関する深い思惟の果実なのだ」Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*, s. 132.

<sup>34</sup> シュルキン作品における作品世界が当時のポーランドの社会的現実との連続性を強く感じさせる要因のひとつとして、これらの映画において登場する「風景」の存在があるだろう。この点についてミロスワフ・プシリパクは次のように述べている。「シュルキンは自身の『醜い SF』を、未加工の、ほとんど手当たりしだいにひとつの袋に突っ込まれた我々の同時代の要素から組み立てているのである。『宇宙戦争』の主人公たちが歩くのはワルシャワの路上だし、『ガ、ガ』に登場するアパートの管理人の住居は（他の惑星が舞台であるにもかかわらず）グダンスクのザSPA地区やワルシャワのウルシヌフ地区をまざまざと思いつくさせる […]」Miroslaw Przylipak, *Światy Piotra Szulkina*, „Kino” nr 2/1988, s. 20.

<sup>35</sup> ダルコ・スーヴィン（大橋洋一訳）『SFの変容——ある文学ジャンルの詩学と歴史』、国文社、1991年、130頁。

部」へと逃亡しようとする主人公たちの絶望的な試みが物語のプロットの中心となっているのである。ここにおいてもシュルキンの問題関心は、単なる社会主義の全体主義体制批判という狭い枠組みを超えて、後期資本主義社会批判とも通底するより普遍的なスペクタクル社会批判へと向かっている。

ではシュルキンの映画における「外部への逃亡」のありかたは、四部作全体を通じてどのように変容してきたのだろうか。まず、『ゴーレム』においては、「番号札」という不確かな借り物の（押し付けられた）アイデンティティしかもたない主人公ペルナートによる自己の真正なアイデンティティの探求が描かれる。次に、『宇宙戦争——次の世紀』においてはメディアによる「つくりもの」に支配された世界において、その外部の「真実」へと到達する主人公が描かれる。他方、三作目の『オ＝ビ、オ＝バ』の最後に描かれたのは、個人的・現実逃避的な「妄想」による願望充足という結末であった。そして最後の『ガ、ガ』のあの取ってつけたようなエンディングが意味しているのは、システムの「外部」への脱出という願望は結局は空虚な「絵に描いた餅」でしかない、つまりは根本的に不可能なものでしかないというペシミスティックなメッセージにほかならないのではないだろうか。こうして、シュルキンの四部作は全体として全体主義的なシステムの「外部」への希望を描きつつも、同時にそうした外部への到達が根本的に不可能であるということを示しているようである。

四部作の最後が『ガ、ガ』のような作品になった理由については、シュルキン本人も次のように語っている。

この四部作がグロテスクによって終わらざるを得なかったのは、もうそれ以上先に進むことができなかったからだ——他にはもうこれらすべてにケリをつけるための選択肢がなかった。グロテスクによって終わらせなければならなかったのだ。[...] 私の周囲で現実が不条理になりつつある中で、その不条理に対する唯一可能な反応は、不条理に頼ることだけだったのだ。<sup>36</sup>

ポーランドの社会主義体制がその末期において急速に崩壊へと向かう中、シュルキンが同時に予感したのはそれよりもさらに不条理でグロテスクな新たな時代の到来だったのかもしれない。であるからこそシュルキンの映画は今日に至るまでその批判的なアクチュアリティを寸分たりとも失っていないのだし、彼の映画を1989年以降の東欧やポーランドの状況を予言したものとして読むこともまた可能なのである<sup>37</sup>。

皮肉なことに体制転換後、シュルキンは新たな「資本主義的」な映画業界において

<sup>36</sup> Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*, s. 235.

<sup>37</sup> Majmurek, “Utopia, dystopia, escape,” p. 80; 84.

周辺へと追いやられ、思うように自分の映画を作ることができない状況に置かれていたという。1990年代以降に彼が監督した長編劇映画は1990年の『フェミナ』<sup>38</sup>、および2003年の『ユビュ王』<sup>39</sup>の2作品のみであり、『ユビュ王』のあとは映画監督としては完全に沈黙してしまうことになる。筋金入りの人間嫌いで「アナーキスト」だったシュルキンの後年の様子は、彼へのインタビューによって構成された回想録『人生記』(2012)<sup>40</sup>からうかがい知ることができる。最後まで妥協なき現実批判者であり続けたシュルキンは、2018年に68歳でこの世を去った。

### 【謝辞】

本稿は、2021年度日本スラヴ学研究会オンライン・シンポジウム「スラヴ世界のSF——K. チャペック『ロボット』初演100周年によせて」(2021年11月28日開催)における口頭発表をもとにしたものです。このシンポジウムを企画・立案し、私に発表の機会を与えてくださった故・三谷恵子先生に深い感謝の念を捧げます。

なお本研究は、JSPS 科研費 JP20H01587 の助成を受けています。

---

<sup>38</sup> *Femina*, rež. Piotr Szulkin, 1990.

<sup>39</sup> *Ubu król*, rež. Piotr Szulkin, 2003.

<sup>40</sup> Kletowski i Marecki, *Piotr Szulkin. Życiopis*.



## 【論文】

## イディッシュ語で書かれたウクライナ文学 ——ドヴィド・ベルゲルソンとポグロム以後の経験——

田中壮泰

## はじめに

ディアスポラの言語であるイディッシュ語で書かれた文学について語るとき、作家の国籍に拘泥する必要はないとしても、作家が生きた土地の言語や文化が作品に与えた影響を無視することはできない。例えば、ソル・リプチンがその著書『イディッシュ文学史』<sup>1</sup>で行ったように、ロシア、東欧、北米、南米、南アフリカなど、地域ごとに作家や作品を分類し、それぞれの特徴を捉える作業は必要である。これは現代の英語文学を考えた場合にも同じことが言えるだろう。

ロシア帝国領ウクライナで生まれ、ソ連で死亡したイディッシュ語作家ドヴィド・ベルゲルソン דוד בערגלסאן (1884–1952) にとって、まずはロシアとウクライナが彼の帰属する土地であった。とはいえ、ここではウクライナかロシアかという作家の単一的な帰属の問題を議論するつもりはない。というのも、帝政末期のキエフで活動したベルゲルソンは、同時代のキエフ（キーウ）を生きたポーランド語作家ヤロスワフ・イヴァシユキェーヴィチ Jarosław Iwaszkiewicz (1894–1980) と同程度にキエフの作家であったと言えるし、内戦末期（1921年）にロシアを去り、ヒトラーが政権を握るまでの約10年間をベルリンで過ごした彼は、ロシア語作家ウラジーミル・ナボコフ Владимир Набоков (1899–1977) と同程度にベルリンの作家であったとも言えるからである。そして、どこにいても故郷のウクライナを描き続けた点で、ベルゲルソンはウクライナのイディッシュ語作家ショレム・アレイヘム שלום עליכם (1859–1916) 以降の系譜に位置する作家であったと同時に、より広く、比較文学的な視点から、ニコライ・ゴーゴリ Николай Гоголь (1809–1852) やレオポルト・フォン・ザッハー＝マゾツホ Leopold von Sacher-Masoch (1836–1895) まで含めた「多言語的なウクライナ文学」の枠組みで議論することも可能なのである。

ウクライナ文学を多言語的に捉え直す試みはウクライナでも近年、とりわけ「鉄のカーテン」消滅後に、国内外の研究者との共同作業を通じて広く議論されるようになって<sup>2</sup>。とりわけ本稿との関わりで重要なものに、北米のユダヤ人研究者とウクラ

<sup>1</sup> Sol Liptzin, *A History of Yiddish Literature*. New York: Jonathan David, 1972.

イナ国内外の研究者らによる共同研究論集『キエフのモダニズム：喜ばしい実験』<sup>3</sup>がある。これについては後に詳述するが、ロシア革命からロシア内戦に至る時代のキエフで、ウクライナ人の独立国家ウクライナ人民共和国が成立し、ウクライナ語と並んでロシア語、ポーランド語、イディッシュ語が公用語とされたこの国家のもと、短い期間ではあれ、多民族・多言語的な文化が展開した。これを「喜ばしい実験」として再評価したのが本書であり、ドヴィド・ベルゲルソンが新進気鋭のイディッシュ語作家として登場したのも、この同じキエフであった。

しかし、ベルゲルソンのキエフ時代については「ウクライナ文学」の枠組みで語ることもできるとしても、ロシア内戦後にキエフを離れ、ベルリンに移住して以降のベルゲルソンについても同じように語ることはできるだろうか。

1933年にベルリンを離れ、その翌年にモスクワに移住し、1952年にスターリンによる粛清でこの世を去るまでのおよそ20年間、モスクワを拠点に創作活動を続けたベルゲルソンは、しばしばソ連のイディッシュ語作家として語られることがある<sup>4</sup>。ところが問題は、ベルリン移住後もベルゲルソンは故郷のウクライナを描き続けていたことである。その作品にはしばしばウクライナ人が登場し、作中にはウクライナ語のセリフが飛び交ったばかりか、ウクライナ人を主人公とする短編さえ書いているのである（これも後述する）。ベルゲルソンとウクライナとの結びつきに、もっと目を向けてゆく必要があるだろう<sup>5</sup>。

---

2 社会主義時代（党がウクライナ語を保護した20年代の「コレニザーツィア」（土着化）政策が終わり、「大飢饉」がウクライナを襲う30年代のスターリンによる独裁以降）ロシア化が強力に押し進められたウクライナでは、独立後にロシア語の影響を抑え、ウクライナ語の使用を義務化する運動が展開されるが、その背後にはディアスポラのウクライナ社会からの強い働きかけがあったことが知られている。Vic Satzewich, *The Ukrainian Diaspora*. London and New York: Routledge, 2002 のとりわけ1章と8章を参照せよ。すなわち、民主化以後のウクライナにおける文学の脱キャンオン化（脱ソ連化）の動きは、一方で、集団的なナショナリズムの発露であったと同時に、他方で、「世界文学」としてのウクライナ文学の捉え直しとしてもあったと言える。

3 I. R. Makaryk and V. Tkacz (eds.), *Modernism in Kyiv: Jubilant Experimentation*. Toronto Buffalo London: University of Toronto Press, 2015.

4 例えば、*Ashes Out Of Hope: Fiction by Soviet-Yiddish Writers*. ed. by Irving Howe and Eliezer Greenberg. New York: Schocken Books, 1977.

5 ベルゲルソンに限らず、ウクライナに生まれ、国外に移住後も非ウクライナ語でウクライナを描いた作家は少なくない。近年そのような作家でもウクライナ文学の範疇に含めようとする議論も出ている。例えば、レシヤ・イヴァシユクはクリミア自治共和国も含め、歴史的にウクライナと呼べる土地で書いた作家であれば、ロシア語作家（アンドレイ・クルコフなど）も、クリミア・タタール語作家（エミール・アミットなど）も、あるいは国外に移住した者でも、例えばオデッサ出身のドイツ語作家マリアナ・ガボネンコ Мар'яна



イディッシュ文学におけるウクライナのテーマを論じたものにイスラエル・バータルの論文「火山の頂上で：近代の東欧ユダヤ文学に描かれたユダヤ人とウクライナ人の共存関係」がある<sup>6</sup>。「イディッシュ語とウクライナ語が入り混じった会話が飛び交い」、ウクライナ人とユダヤ人が「互いに利益をもたらす経済的な共存関係」にあったという19世紀から、ウクライナでポグロム（ユダヤ人への襲撃）が広まり、互いの関係が崩壊していく20世紀初頭までの時代を記述したもので、メンデレ・モイヘル・スフォルム מענדעלע מוכר ספרים (1836–1917) やショレム・アレイヘムなど、近代イディッシュ語文学の草創期に活躍した作家たちが俎上に載せられているのだが、ここでも、「多言語的なウクライナ文学」（ここではユダヤ人とウクライナ人との共生）の歴史は、革命と内戦の時代（＝ポグロムの時代）で止まっているのである。

そこで本論は、まずはベルゲルソンの先達としてショレム・アレイヘムを取り上げ、その代表作の一つである『牛乳屋テヴィエ』 טביה דער מילכיקער (1917年刊) に描かれたウクライナ表象を考察する。その後、アレイヘムを始点とするイディッシュ語で書かれたウクライナ文学の系譜にベルゲルソンを位置づける。ベルリン時代のベルゲルソンの作品の中でウクライナ人を描いたものに二つの短編、「二匹のけだもの」 רוצחים צוויי (1926) と「逃亡者」 צווישן עמיגרנטן (1927) がある。ここではこれら二作品を考察し、それをアレイヘム以降の「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学」として読み直したい。つまり、本論には二つのテーマがある。一つは、アレイヘムからベルゲルソンに至る「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学」の系譜を浮かび上がらせること。もう一つは、アレイヘムとベルゲルソンとの間のウクライナ表象の差異を明らかにすることである。そして、これらの作業を通じて本論が目指すのは、今まさに様々な視点から、ウクライナをはじめ各国の研究者を交えた共同研究の形で模索されている、「多言語的なウクライナ文学」の新たな可能性を提示することである<sup>7</sup>。

---

Гапоненко / Marjana Gaponenko (1981-) のように、ウクライナ出身であれば、その作品をウクライナ文学として読むことができると主張している。Lesya Ivasyuk, "Galicia in Texts by Modern Ukrainian Authors: New Structures of "World Literature" Between Literature and Public History," *International Journal of Languages, Literature and Linguistics*, vol. 5, no. 1, 2019, pp. 37–46. 一見乱暴な主張に見えるが、単一国家・単一言語の枠組みを超えた文学の読み方がウクライナ文学をめぐって現在様々に模索されていることが分かる。

<sup>6</sup> Israel Bartal, "On Top of a Volcano: Jewish-Ukrainian Co-Existence as Depicted in Modern East European Jewish Literature," in H. Aster and P. J. Potichnyj (eds.), *Ukrainian-Jewish Relations in Historical Perspective*. Edmonton: Canadian Institute of Ukrainian Studies Press, 1990, pp. 309–325.

<sup>7</sup> 「多言語的なウクライナ文学」の記述の試みのなかで比較的新しいものとして、他に、イヴァン・フランコ (1856–1916) のウクライナ語小説『レルとポレル』 Лель і Полель (1888) をマゾフホのドイツ語小説『毛皮のヴィーナス』 *Venus im Pelz* (1870) と比較した Maxim

1

ホロコースト以前の東欧にはシュテットルと呼ばれるユダヤ人の集落が広く点在していた。住民の半数近く、多い場合は八割以上をユダヤ人が占めたシュテットルの生活は、町の異教徒とも周囲に広がる農村とも緩やかに結びつきながら、ユダヤとスラヴの世界が混合した独自の文化を形成した。

シュテットルを描いた作品として日本ではシャガールの絵と並んでミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』が有名だが、そのミュージカルの原作として知られるイディッシュ語作家ショレム・アレイヘムの小説『牛乳屋テヴィエ』が描いていたのも、20世紀初頭のウクライナのシュテットルにおけるユダヤ人と異教徒との多言語的な交流である。

シュテットルで酪農を営むユダヤ人テヴィエは、キエフと思しき架空の街イエフベツへ馬車を走らせ、街の裕福なユダヤ人や異教徒にチーズやバターを売り歩く生活を送っている。そのような生活を通じて、テヴィエはユダヤ人の言葉であるイディッシュ語とヘブライ語だけでなく、異教徒の言葉であるロシア語とウクライナ語も流暢に使いこなしている。例えば、地元のスラヴ人たちとの関係をテヴィエはこんな風にウクライナ語を織り混ぜて語っている。

「あたしたちはずっと異教徒、つまりはエサウに囲まれて暮らしてきました。みんな村の名士たちとも気心の知れあった関係にあったのです。親友関係というか、親分子分関係というか、それこそ「テヴェリのとつつあん」と言えば、一目置かれる存在だったんです！ どんなですって？ たとえば、助言が必要になればテヴェルの意見に従え、熱が出て薬が欲しくなるとテヴェルんとこへ行こう、借金が必要になれば、やっぱりテヴィエのところだ、ってことでして。」<sup>8</sup>

ところで、ウクライナにおけるユダヤ人の歴史は古く、遡れば、ポーランドガリト

---

Tarnawsky, “Galician Sex: Ivan Franko and Leopold von Sacher-Masoch” in A. Achilli, D. Yesypenko and S. Yekelchik (eds.), *Cossacks in Jamaica, Ukraine at the Antipodes: Essays in Honor of Marko Pavlyshyn*. Boston, Mass: Academic Studies Press, 2020, pp. 334–347. や、ウクライナ語作家ボリス・フリンチェンコ（1863–1910）をアレイヘムの同時代人として論じた Фелікс Левітас, Юрій Ковбасенко, Оксана Салата, Репрезентація українсько-єврейських відносин у творах Шолом-Алейхема та Б.Грінченка // *Український історичний журнал*. Київ. 2020. Вип. 4. С.77–84. などが挙げられる。

<sup>8</sup> ショレム・アレイヘム（西成彦訳）『牛乳屋テヴィエ』岩波文庫、2012年、311頁。この小説は日本では長らく英語からの重訳で読まれてきたが、イディッシュ語の原典に基づいたこの新訳が出たことで、イディッシュ語にスラヴ諸語を織り交ぜたテヴィエの多言語的

アニア大公国を併合し、北はバルト海、南は黒海、東はドニエプル川まで支配圏を拡大した16世紀にウクライナへのユダヤ人の移住が進んだ。それ以降、ユダヤ人とウクライナ人は隣人同士として、しばしば衝突を繰り返しはしたが結びつきを深め、両者の関係は互いの言語にも変化を与え合った。スラヴ諸語を織り交ぜたテヴィエのイディッシュ語は、その一例である。訳者西成彦の「解説」<sup>9</sup>にあるように、シュテットルの生活が生んだユダヤ人の「雑種的な言語」を、それこそ明治期の日本文学が「言文一致体」を模索したのと同様に、そのまま描き出そうとした小説が『牛乳屋テヴィエ』であった。

しかし、この小説を語る上でもう一つ重要な点は、これがユダヤ人とウクライナ人の関係が崩壊していく時代に書かれていたということである。テヴィエが生きた帝政ロシアの末期は、ロシア各地で反ユダヤ主義が急激に高まる時代にあり、それがもつとも過激な形をとって噴出した都市の一つがキエフであった。

1881年3月に起きたアレクサンドル二世の暗殺事件を引き金に、ロシア全土に広がったポグロムの波はキエフにも及び、1905年の日露戦争後の混乱のさなかにもキエフでポグロムが勃発した。さらに1911年には、キエフで煉瓦工場の管理人として働くユダヤ人メンドル・ベイリス מענדל בייליס (1874-1934) がキリスト教徒の子どもに対する儀式殺人の疑い、いわゆる「血の中傷」を受けて投獄されるという事件が起きている。これはドレフュス事件の再来として国際的に非難の声が上がり、1913年の裁判でベイリスは無罪を勝ち取っている。しかしその翌年に、今度は第一次世界大戦が勃発し、再びウクライナの各地でポグロムが吹き荒れることになった。

なお、アレイヘムは1912年に『血の冗談』 דער בלוטיגער שפאס という一種の風刺小説を書いている。ユダヤ人の友人と身分を交換するという遊びに興じたことで、反ユダヤ主義の攻撃に晒され、儀式殺人の告発を受けるロシア人青年の運命を描いた作品である。また、ベイリス事件を題材にした小説としては、他にユダヤ系アメリカ人作家バーナード・マラマッド Bernard Malamud (1914-1986) の『修理屋』 *The Fixer* があるが、原作刊行の3年後の69年に日本語訳<sup>10</sup>が刊行されており、この小説を通じてベイリス事件を知った日本人は少なくないだろう。

実は『牛乳屋テヴィエ』にもベイリスの名は度々登場している。物語の後半でテヴィエはウクライナを去る決意を固めるのだが、その時、迫りくるポグロムの空気を象徴する存在として、テヴィエが度々口にするのがこの名前であった。要するに、『牛乳

な話芸を、ルビを多用した訳文を通じて、日本の読者は楽しむことができるようになった。

なお、エサウとは『旧約聖書』に登場するイサクの双子の息子の一人。その子孫はエドム人となり、家督を継いだ弟のヤコブが現代のユダヤ人の祖となる。

<sup>9</sup> 同書、374頁。

<sup>10</sup> バーナード・マラムード (橋本福夫訳) 『修理屋』早川書房、1969年。

『屋テヴィエ』はユダヤ人とウクライナ人との友情というよりも、両者の関係が崩壊していく過渡期のウクライナを描いていたのである。

わずかだがこれまでに築いたものがあって、少しだが家畜を売った代金もある。さらに、少しではあっても家を売れば金になる。小銭ばかりでも、集めれば財布はふくれるだろう。不幸中の幸いってやつだ！ それに、そんなことは考えたくもないが、仮に一文無しだったとしても、メンドル・ベイリスを思えば、ずっとマシじゃないか！……<sup>11</sup>

8つの連作短編からなる『牛乳屋テヴィエ』は1895年から1914年まで書き続けられ、物語も第一次世界大戦のさなかにテヴィエがウクライナを離れる直前で終わっているが、作者アレイヘムがキエフを離れるのはもっと早く、1905年になる。アレイヘムがキエフにいたのは1879年から1905年までの四半世紀に及び、その間、『牛乳屋テヴィエ』の初期の連作をはじめ数多くの作品を世に放つが、ウクライナでポグロムが広まる1905年に家族と共にキエフを離れ、その後、主にニューヨークとベルリンに活動の拠点を移し、1916年にニューヨークで息を引き取っている。

## 2

ここでアレイヘム以後のイディッシュ語文学に目を転じたい。アレイヘムの次の世代を担ったイディッシュ語作家の一人にドヴィド・ベルゲルソンがいる。アレイヘムと同様、キエフを活動の拠点として出発した作家である。1909年の小説『駅の周辺』*ארום וואַקוואַל* でデビューした彼は、ちょうどアレイヘムと入れ違いにキエフの文壇に登場したことになる。しかし、デビューからほどなくして第一次世界大戦が勃発。さらに1917年のロシア二月革命、十月革命勃発による混乱のなか、1918年3月には、ドイツ軍最後の攻勢によってキエフもドイツ軍の手に落ちた。その間、革命軍と反革命軍との戦闘は十月革命後から始まり、ウクライナでは1921年まで、赤軍と白軍、ウクライナ軍とポーランド軍による三つ巴、四つ巴の戦闘が展開して、全土が内戦状態と化した。この内戦のさなかに、かつてない規模のポグロムが、キエフをはじめとするウクライナの各地で勃発した。1919年から21年の間だけで少なくとも5万人ものユダヤ人が命を落としたとも言われ、それ以上の数のユダヤ人が家を追われ、ウクライナを後にした<sup>12</sup>。ベルゲルソンもこの時期にウクライナを去っている。

ところで、ガリツィアのポグロムに関しては、野村真理と赤尾光晴が詳細に分析し

<sup>11</sup> ショレム・アレイヘム、前掲書、325–326頁。

<sup>12</sup> John Klier, *YIVO Encyclopedia of Jews in Eastern Europe*, vol. 2. New Haven and London: Yale University Press, 2008, s.v. “Pogroms” pp. 1375–6.

ている<sup>13</sup>。二人の研究から見えてくるのは、ロシア軍からはオーストリアのスパイ、ポーランド人とウクライナ人からはロシアのスパイとみなされ、どちらの側からも虐殺の対象になったガリツィアのユダヤ人が置かれた孤立した状況である。

注意したいのは、これと同様の状況がキエフでも繰り返されたということである。すでに述べたように内戦時代のキエフでは赤軍、白軍、ドイツ軍、ポーランド軍、ウクライナ軍をはじめ諸勢力が攻防戦を展開し、支配者の交代が繰り返されたが、その度にユダヤ人をめぐって、ある時は敵対する民族の手先、またある時はコミュニストの手先であるとの噂が立ち、それがポグロムを正当化する口実にも使われた。少なくとも、ここではガリツィアと同様に、キエフでもユダヤ人が置かれた状況は極めて複雑な様相を呈していたということを述べておきたい。そして、まさにこうしたポグロムがウクライナ各地で広がっていた時代にベルゲルソンはキエフで生きた。

1920年にボルシェヴィキによってキエフが陥落すると、「文化同盟」（注24参照）を含むキエフのイディッシュ語団体はすべてソヴィエトの機関に統合されたため、ベルゲルソンをはじめとするキエフのイディッシュ語作家たちはモスクワへ移住するが、その翌年、より自由な活動の場を求めて彼らの多くはベルリンへの再移住を決意している。

この時期、ロシア・東欧からベルリンへの移住を選択した者は少なくなかった。その理由として第一に挙げられるのが地理的な近さである。ベルリンのロシア人の中には、ボルシェヴィキ政権が短命に終わることを見込んで、ロシアからさほど遠くないベルリンを一時的な居住地とした者が少なくなかったと言われている<sup>14</sup>。第二に、交通の便の良さがある。すでに、この半世紀ほど前からロシアとドイツを結ぶ鉄道（Preußische Ostbahn）が開通しており、東から西へ移動する者は、パスポートの問題さえなければ、容易にベルリンまで移動できた。しかも、ベルリンを越えて北上すれば港湾都市ハンブルクとブレーメンがある。そこからさらにアメリカ行きの客船に乗ることができたのである<sup>15</sup>。もう一つが経済的な理由である。終戦直後のドイツはハイパーインフレに見舞われたことで、外貨を手にした外国人には、ヨーロッパでもっ

<sup>13</sup> 野村真理『隣人が敵国人になる日』人文書院、2013年の三章と赤尾光晴「S・アン＝スキーの『ガリツィアの破壊』と記憶のポリティクス（上）（下）」『思想』（1093-1094）、岩波書店、2015年。

<sup>14</sup> 諫早勇一『ロシア人たちのベルリン』東洋書店、2014年、44頁。

<sup>15</sup> 19世紀末のロシア領ヴォルギーニのシュテットルに暮らすユダヤ人一家がニューヨークに移住し、そこで生き別れになった家族と再会するという物語を描いたヨーゼフ・ロートの小説『ヨブ——ある平凡な男のロマン』*Hiob: Roman eines einfachen Mannes* (1930)でも、アメリカ移住を決意した主人公のメンデル・ジンゲルが家族を連れて向かった先が、アメリカ行きの船が出発するブレーメンであった。平田達治・佐藤康彦訳『ヨーゼフ・ロート小説集2』鳥影社、1999年、115-118頁。

とも生活費の安い国になっていた。こうした様々な理由からベルリンはロシアや東欧から人が集まり、街の至る所でロシア語（しばしばイディッシュ語訛りの）が響いていたと言われている<sup>16</sup>。

当時のベルリンについて書いたものにマイケル・ブレンナーと諫早勇一の著書がある<sup>17</sup>。いずれもワイマール時代のベルリンがドイツ語だけの世界ではなかった点に光を当てたものである。

ブレンナーによれば、ワイマール時代のベルリンにはガリツィア出身のドイツ語作家ヨーゼフ・ロート Joseph Roth (1892–1939) の他に、現在ではイスラエルの「国民詩人」とも称されているハイム・ナフマン・ピアリーク חיים נחמן ביאליק (1873–1934) や、のちにノーベル賞作家となるシュムエル・アグノン שמואל עגנון (1888–1970) などヘブライ語を使用する数多くの知識人が集結していたという。また、諫早によればベルリンはウラジーミル・ナボコフのような白系ロシア人だけでなく、マクシム・ゴーリキイ Максим Горький (1868–1936) やイリヤ・エレンブルグ Илья Эренбург (1891–1967) のような、「国外に残るか、祖国に戻るか最終的に決めかねている」ロシア人たちがしばらくの間旅装を解く場所としてもあった。

その他にも、小説家のデル・ニステル דער ניסטער (1884–1950) をはじめ、キエフでベルゲルソンと仕事をともにしたイディッシュ語作家たちもベルリンに数多く滞在し、戦前にはショレム・アレイヘムが一時期居住していたこともあった。現在のミッテ地区にあたる「倉庫地区」(Scheunenviertel) と呼ばれる地区は、東欧出身のユダヤ人たちがまとまって暮らす地区として知られた。

キエフ出身者がベルリンに集まったのには、まだ他に理由があり、1918年の4月から12月までキエフはドイツ軍の支配下に置かれたことから、戦後に撤退を開始し

<sup>16</sup> 例えば、イリヤ・エレンブルグは回想録の中で当時のベルリンを次のように語っている。「あのころ、ベルリンに何人ロシア人がいたか知らないが、おそらくかなりの数だったように思われる——どこへ行っても、ロシア語が耳にはいつてきたから。ロシア料理の店が何十軒と店を開いていた [...] ちょっとした作品を上演する劇場もあった。日刊紙が三種、週刊誌が五種、出ていた。一年の間にロシア物の出版社が十七社もできた。フォンヴィーゲンやピリニャークの作品、料理書、宗教書、技術関係の参考書、回想録、風刺物、なんでも出していた。」イリヤ・エレンブルグ(木村浩訳)『わが回想〈第2巻〉——人間・歳月・生活』朝日新聞社、1968年、23頁。あるいは、イディッシュ語詩人ドヴィド・アインホルン(1886–1973)はベルリンからニューヨークのイディッシュ紙『前進』に寄せた記事の中で、「ユダヤのイントネーションと身振りを交えたブロークンなロシア語がベルリンの至る所で聞こえた」と述べている。

דוד איינהארן, גבירים פון אויסלאנד וועלכע לעבן א גוטן טאג אין בערלין, פארווערטס, 14 יאן. 1923, 4.

<sup>17</sup> Michael Brenner, *The Renaissance of Jewish Culture in Weimar Germany*. New Haven, Conn.: Yale University Press, 1996. 邦訳はマイケル・ブレンナー(上田和夫訳)『ワイマール時代のユダヤ文化ルネサンス』教文館、2014年。諫早著については注13を参照。

たドイツ軍に同行してベルリンに移住した者も少なくなかったと言う<sup>18</sup>。ベルゲルソンがこの都市に移住した背景には、先に到着していたキエフ出身のユダヤ人からの誘いがあったことがわかっている<sup>19</sup>。

要するに、ワイマール時代のベルリンは、第一次世界大戦とロシア内戦の戦火を逃れたさまざまな人々の避難場所になっていたということである<sup>20</sup>。

したがって、ベルゲルソンのようにウクライナのポグロムを生き延びたユダヤ人だけでなく、同じ時期にポグロムの加害者ともなったウクライナ人もベルリンに避難していたことは想像に難くない。とはいえ、どちらも国家を持たない少数民族であったため正確な数を知るのは難しく、ユダヤ人に関しては共同体に登録されたユダヤ教徒の数なら把握できるが、ロシア人と同じ正教徒が多いウクライナ人については、その数を把握するのはほとんど不可能である<sup>21</sup>。いずれにせよ、ベルリンではポグロムの被害者と加害者が隣り合わせに生活していたということは間違いない<sup>22</sup>。

<sup>18</sup> キエフからベルリンに最初の避難民が列車で到着するのは、ドイツ軍が東部戦線から撤退を開始した直後の1919年1月3日であった。Gennady Estraiikh, "The Yiddish Kultur-Lige," *Modernism in Kyiv: Jubilant Experimentation*. p. 208, 216.

<sup>19</sup> 次を参照。Joseph Sherman, "David Bergelson (1884–1952): A Biography," in J. Sherman and G. Estraiikh (eds.), *David Bergelson: From Modernism to Social Realism*. London and New York: Routledge, 2007, p. 25. ただし、ベルゲルソンがロシア脱出を決行した時、独ソ間に国交がなく、ポーランド・ソビエト戦争(1919–1921)の影響で陸路が使えなかったため、リトアニアの駐モスクワ大使ユルギス・バルトルシャイティス Jurgis Baltrušaitis (1873–1944) が当時、芸術家の保護を目的に発行していたパスポート(シャガールもこれでパリに移住した)を取得し、まずは列車でカウナスへ、その後海路でダンツィヒ(現グダニスク)に渡り、そこからさらにベルリンに移動している。次を参照。

א. בן אֵדיר, ריבאק דער מענטש, אין יששכר בער ריבאק. זיין לעבן און שאפן, פאריז, 1937, ז. 78.

<sup>20</sup> ほとんどの亡命者や移民にとって、ベルリンは祖国に帰るまでの腰掛けに過ぎず、そのため、1922年4月のラパッコ条約で独ソ間の国交が結ばれ、その翌年にインフレが激化すると、ソ連に帰国する者、ナンセンパスポートかその他の身分証を携えてさらに西へ移動を開始する者が増加した。ベルゲルソンは最後までベルリンに踏みとどまったロシア・東欧出身のイディッシュ語作家であったが、それが可能だったのも、彼がナボコフと同様に売れっ子作家だったことが関係している。

<sup>21</sup> なお、1925年にドイツで実施された国勢調査に基づけば、ベルリンに住むユダヤ人の数は172,672人、そのうち外国人のユダヤ人は43,838人(25.4%)となっている。Salomon Adler-Rudel, *Ostjuden in Deutschland 1880–1940*. Tübingen: J. C. B. Mohr, 1959, S. 165.

<sup>22</sup> 例えば、キエフ時代のベルゲルソンの仲間と、ともにベルリンに移住した歴史家のエリア・チェリコヴェルは日記(1921年7月17日付)のなかでこう書いている。「わたしたちは国外のウクライナ人の活動に関するかなりの量の資料を手に入れることができた……。わたしたちはベルリンでも、ウクライナの政治に精通し、何人もの重要なポグロム活動家の消息にも通じている人々と出くわしてきた。」

というのも、ベルリン時代にベルゲルソンが小説のテーマの一つとして描いたのが、こうした一触即発の緊張状態の中でウクライナ人とユダヤ人のそれぞれが生きたポグロム以後の亡命生活であったからである。その一つに、1926年に発表された短編「二匹のけだもの」がある。

主人公のアントン・ザレンボは内戦時代にコサック軍の頭目<sup>アタマン</sup>としてユダヤ人を虐殺した過去を持つウクライナ人である。故郷で「お尋ね者」になった彼はベルリンに逃げ、亡命ウクライナ人組織からの支援で細々と生きてきた。その彼が、戦争未亡人のドイツ人であるヒルデ・ギンターの家之間借りして三日目のこと。その家にはテルという名の飼い犬がいたが、その犬が犯した過去の殺人事件についてザレンボは家主から聞くことになる。家主の話によれば、テルを飼って三年ほど経ったある日、孤児院の赤ん坊を引き取ったところ、嫉妬に駆られたテルによって赤ん坊が咬み殺されたと言う。

この話を聞いた瞬間、ザレンボは、同郷のユダヤ人を虐殺した自らの過去に引き戻されてしまうのである。

アントン・ザレンボのあばた顔は悲しみと郷愁でいっぱいになった。寝室の床で首を咬み切られて死んでいたという血まみれの赤ん坊の話は、かつて彼が徒党を率いて略奪と虐殺をくり広げた、あのウクライナのユダヤ村で起きた似たような話を思い出させた。血を……ユダヤ人の家々で流れた血を思い出した。路上の血を思い出した。道にはガラスの破片が散らばり、さまざまな布切れが舞い、ユダヤ人の腸<sup>はらわた</sup>や血まみれの死骸が転がっていた。何体かは首がちょん切られていた——白髪混じりの髭<sup>ひげ</sup>をたくわえた生首もあった。<sup>23</sup>

犬が赤ん坊を咬み殺したという事件は悲惨ではあるものの、それをポグロムと重ね合わせるザレンボの反応はどこか過剰である。一種の戦争神経症（Kriegsneurose）の発症をここに見ることもできそうである。しかし、ここで注意したいのは、ザレンボがポグロムの過去を思い出したのは、もっと他に原因があったということである。

家主の語りは、ザレンボのトラウマ的な記憶を刺激しただけではなかった。それは彼の中で「故郷の村へのノスタルジー」を掻き立てるものでもあった。というのも、彼女の「独特のドイツ語のお喋り」が、「かつて彼が仲間と一緒に略奪と虐殺の限りを尽くした、あのウクライナのシュテットルでよく耳にした」という、「ユダヤ人のお喋り」を彷彿させるものであったからである。ザレンボの故郷で話されていたイ

זושה שניקאווסקי, די געשיכטע פון דעם איצטיקן בוך, אין אליהו טשערקאווער, די אוקראינער פאָגראַמען אין יאר 1919, יוֹאָ, 1965, ז. 340.

<sup>23</sup> דוד בערגעלסאָן, צוויי רוצחים, פאָרווערטס. 14 אפריל 1926, ז. 7.



ディッシュ語のことである。つまり、ザレンボは家主の語りの内容ではなく、彼女の声の響きによって過去に引き戻され、ポグロムの体験を思い出すことになるのである。

実は、「二匹のけだもの」がニューヨークの『前進』紙に掲載された一ヶ月後、1926年5月25日に、奇しくもザレンボと同じ、ポグロムに関与したとされるウクライナ人のセメーン・ペトリューラ Семен Петлюра (1879–1926) が、パリで射殺される事件が起きている。

ペトリューラは1917年のロシア革命の直後にキエフに誕生したウクライナ人の独立国家、ウクライナ人民共和国(1917–21)で軍部のトップを務めた男である。同じ時期に同名の国家がボルシェヴィキによってハリコフ(ハルキウ)に建国されているが、キエフにできた方はボルシェヴィキと対立関係にあった。ウクライナ人による初の近代的な独立国家として誕生し、また、少数民族に広く自治を認めたことでも知られるこの国は、ポーランド問題省とロシア問題省と並んで、ユダヤ問題省(Міністерство Єврейських Справ)を設置し、イディッシュ語を公用語の一つとするなど、ユダヤ人とウクライナ人が共通の国家建設に向けて協働した歴史的に最初の試みとしてもあった<sup>24</sup>。

ところが、1919年2月に赤軍によってキエフが攻め落とされると、ヴィンニーツァに逃れたペトリューラとその政府は、同年4月にポーランドと手を組み、1921年3月のリガ条約締結まで赤軍・白軍との間でキエフをめぐる争奪戦(ポーランド・ソビエト戦争)を展開することになる。このとき、ウクライナ軍によるポグロムが各地で勃発した。ペトリューラはこの時期のポグロムの主犯とされ、内戦終結後、パリに逃げていたところ、1926年5月、ロシア領イズマイル出身のユダヤ人ショレム・シュヴァルツバルド שלום שווארצבאָרד (1886–1936)によって射殺されているのである。

この事件の直後にシュヴァルツバルドは、ペトリューラの殺害を、虐殺されたユダヤ民族のための報復であると主張し、翌年10月にパリで開かれた裁判で無罪を勝ち取っている。この裁判は国際的に注目を集め、後に「ジェノサイド条約」の発案者となるユダヤ系ポーランド人の法学者ラファエル・レムキン Raphael/Rafał Lemkin (1900–1956)にも大きな影響を与えた出来事としても知られている<sup>25</sup>。

<sup>24</sup> なお、このユダヤ問題省の下、ブンドや労働シオニズムなどの諸党派が連携しイディッシュ語による文化と教育の推進を目指す「文化同盟」(קולטור־ליגע)が組織されたが、ベルゲルソンはその中心メンバーであった。Henry Abramson, *A Prayer for the Government: Ukrainians and Jews in Revolutionary Times, 1917–1920*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1999, pp. 33–66.

<sup>25</sup> 自伝の中でシュヴァルツバルドについてレムキンはこう語っている。「シュヴァルツバルド裁判の後、私はある記事を書き、そのなかで彼の行動を「美しい犯罪」と呼んだ。そして、国家、人種、宗教的集団の破壊に関する道徳的基準を統一するための法律がないことを嘆いた。徐々に、行動しなければならぬという決意が私のなかで熟していった。」

「二匹のけだもの」の中でも、ザレンボと家主の間で、虐殺に対する裁判の有無が話題に上がっている。物語の終盤において、ポグロムをめぐる裁判が開かれたかどうかを尋ねる家主のギュンター夫人に向かって、ザレンボが「裁判なんて一度もなかった」と呟く場面である。

——それで裁判は？ ——彼女の一番の関心はそこだった——裁判は開かれたの？

——いいえ——とザレンボは首を振った——裁判なんて一度もなかった。

ギュンター夫人は悲しみと郷愁でいっばいの男のあばた面を見つめた。しばらく考え込んだあと、憐れみのこもった声でこう言った。

——可哀想に！ それじゃあ、ちょうど、うちの可哀想なテルとおんなじだね……。<sup>26</sup>

ポグロムの虐殺者は、ここで赤子を咬み殺した犬と重ね合わされている（タイトルの「二匹のけだもの」とはこの二人のことである）。そして、自分が犯した罪に見合う裁きを受けずにいるザレンボたちの状態を「可哀想」なものだと言うことで、殺人者を責めるのではなく、殺人者を罰せずにいる社会に対して、疑問を投げかけているのである。

実際、当時は虐殺者を裁く法はどこにも存在しなかった。その結果、シュヴァルツバルドはみずから法の代行者としてペトリューラに死刑を下し、それがパリの裁判で正当化されるという事態が生じたわけである。

こうして見ると、「二匹のけだもの」は予言的な小説であったとも言えそうだが、そうではなく、当時はポグロムをめぐる責任問題が、ベルゲルソンの周囲でも、シュヴァルツバルドの周囲でもしばしば話題に上がっていたとは考えられないだろうか。例えば、ベルゲルソンとともにキエフからベルリンに移住したユダヤ人の一人に、エリア・チェリコヴェル *אליהו טשעריקאָווער* (1881–1943) がいる。1919年にキエフで「ウクライナのポグロムに関する資料収集と調査のための編集委員会」(*רעדאקציאָנס קאָלעגעיִע אויף זאַמלען און אויספאַרשן די מאַטעריאַלן וועגן די פּאָגראַמען אין אוקראַינע*) を組織し、1921年のベルリン移住後に、「東方ユダヤ歴史アーカイヴ」(*מזרח ייִדישער היסטאָרישער אַרכיוו*) を設立するなど、ポグロムの記憶の保存をライフワークとした歴史家である。チェリ

---

Donna-Lee Frieze (ed), *Totally Unofficial: The Autobiography of Raphael Lemkin*. New Haven and London: Yale University Press, 2013, p. 21. また、以下も参照。フィリップ・サンズ（園部哲訳）『ニュルンベルク合流——「ジェノサイド」と「人道に対する罪」の起源』白水社、2018年、228–243頁。

<sup>26</sup> בערגעלסטאָן, צוויי רויצחים, דצ"ו.

コヴェルは1926年にパリに移住し、シュヴァルツバルド裁判の弁護委員会に加わることになるが、ベルゲルソンはチェリコヴェルらと共にベルリンのどこかで、ポグロムに対する裁判の必要性を議論していた可能性がある<sup>27</sup>。

いずれにせよ、「二匹のけだもの」の特筆すべき点は、そうした現実の事件とのつながりであるよりも、ウクライナの虐殺者の描き方にある。先にも述べたが、ベルゲルソンは故郷のシュテットルに対するウクライナ人のノスタルジーを描いていた。しかも、そのノスタルジーが生まれたのは、イディッシュ語を彷彿させるドイツ語を耳にしたからである。ザレンボは裁きを受けるべき存在であると同時に、同情すべき人物としても描かれており、ベルゲルソンの筆致は両義的である<sup>28</sup>。例えば、ザレンボとシュテットルとの関係について、ベルゲルソンはこのように書いている。

彼の話によれば、ザレンボが生まれ育った村の一角はウクライナ人だけの土地だった。ところがそこにユダヤ人の町が建設され、やがてそこはユダヤ人の土地になった。ザレンボの村ではそれを目障りに思う者はいなかった。それどころか誰もがシュテットルを喜んだが、ザレンボの内部で最初は小さな火種だったものが恐ろしい炎に膨らんでいった。<sup>29</sup>

ベルリン時代のベルゲルソンの仕事は、イディッシュ語で描くことができる世界を

<sup>27</sup> ベルゲルソンとチェリコヴェルは「キエフ・グループ」の一員として一括りに語られることが多い。しかし両者の影響関係を掘り下げた研究はまだなく、今後の課題としてある。また、シュヴァルツバルドとチェリコヴェルの関係については、Kelly Johnson, “Schwarzbard: Biography of a Jewish Assassin,” PhD diss., Harvard University, 2012, p. 135 ならびに pp. 180–181 を参照せよ。パリからロシア内戦に参戦したシュヴァルツバルドは、パリに帰還後、回想録の刊行を準備していたが、その出版先として1923年頃にパリの知り合いから、当時ベルリンでポグロム関連の叢書を刊行していたチェリコヴェルを紹介されている。

<sup>28</sup> この点でベルゲルソンは、彼の少し上の世代にあたるウクライナ出身のイディッシュ語作家ラメド・シャピーロ לֵאמֶד שַׁפִּירָא (1878–1948) と異なる。実はシャピーロもウクライナ人を主人公にしたイディッシュ語小説を書いている。「白いハラール」 ווייסע חלה (1919) の主人公ヴァーシャは子どもの頃から近隣の町に住むユダヤ人の存在に強い興味を示していた。一度だけハラール(ユダヤ教徒が安息日や祭日に食するパン)を盗んで食べたことがあったが、それ以来彼はその不思議なパンの虜になってしまう。そんななか第一次世界大戦が勃発し、ヴァーシャは兵士になり、やがてユダヤ人の虐殺に加担することになる。ユダヤ人の家に押し入った彼は、その家の女を絞め殺し、その肉体を「白いハラール」に重ね合わせて、むさぼり食うというものである。ポグロムの記憶を主題にするとき、暴力をどこまで描くのが問題になる。ベルゲルソンもシャピーロも主題の選択においては近いが、その処理の仕方が異なった。いずれ二人を比較して論じてみたい。

<sup>29</sup> בערגעלסאָן, צוויי רוצחים, דצ"ו.

ぎりぎりまで拡張する試みであったとも言える。そもそも彼が執筆言語としたイディッシュ語は、ウクライナのシュテットルでの長年にわたるユダヤ人と異教徒との隣接関係が生み出した「雑種的な言語」であったはずである。ユダヤ人にとってのウクライナ語がそうであったように、ウクライナ人にしてもイディッシュ語が彼らの母語の一つであった可能性はゼロではなかったと考えてみる必要もあるだろう。

### 3

ここでもう一つの作品「逃亡者」についても紹介したい<sup>30</sup>。「二匹のけだもの」の翌年、つまり、シュヴァルツバルドによるペトリューラ暗殺事件の一年後に発表された小説で、これもポグロムの記憶がテーマになっている<sup>31</sup>。

物語は、ベルリンに暮らす作家の「わたし」の家に「ユダヤ人テロリスト」を名乗る若者が突然現れるところから始まる。

ロシア領ヴォルギーニ地方（現在のウクライナ北西部）の出身だという若者は、内戦時代のポグロムによって故郷を失い、「肉体労働者として」パレスチナに逃げ、それからベルリンに到着し、現在は「ひもじい思いをしながらも物書きで暮らして」いるという。そんなある日、若者が居住するベルリンの下宿に、故郷を襲ったポグロムの首謀者と思しきウクライナ人が入居してくるのである。それからというもの、若者は、下宿のウクライナ人を密かに見張りながら殺害計画を温めてきたといい、「わたし」に向かって、もし計画に協力する気があれば、リボルバーを届けてくれ、と言いつつ立ち去るが、その数日後、若者の自殺をほのめかす「走り書き」が郵便で「わたし」に届けられ、物語は幕を閉じるのである。

要するに、ウクライナ人の「ポグロムシュテツク虐殺者」を目にしたことから若者がとってきたこれまでの行動がここに語られているわけだが、「ぼくが何者なのかを、あなたに知ってもらいたかったからです」と「わたし」に述べる若者にとって、未遂に終わった殺害計画は初めからさほど重要ではなかったとも言える。「いまになって思い知らされました。ぼくは故郷を棄てた逃亡者だということを……」という「走り書き」の文面には、彼が陥っていたと思しきアイデンティティの危機が読み取れるからである。そもそも彼が語り手「わたし」の前に登場する物語の冒頭から、若者の内面の分裂した状況が作品には描かれていた。

<sup>30</sup> この作品は西成彦編訳『世界イディッシュ短篇選』岩波文庫、2018年、109-146頁に収められている。以下、本書からの引用は本文中に括弧内で頁数のみ記した。

<sup>31</sup> この小説の執筆年を1923年とする説もあるが、少なくとも現在確認できるこの小説の一番古いバージョンは、1927年に刊行された短篇集『嵐の日々』(שטרעמטעג)に収録されたものである。次を参照せよ。Harriet Murav, *David Bergelson's Strange New World: Untimeliness and Futurity*. Bloomington: Indiana University Press 2019, p. 204.

右の頬はまっすぐでなんの変哲もない頬だったが、人生を謳歌しがっている様子で、こんな風に語りかけてきた。「みんなと一緒にいたい」。ところが、左の頬はよじれていて、彼ののものであって、そうでないみたいだった。まるで世界と戦争状態にあり、人生に見放されてしまった挙句、ますます人生が嫌になった、そんな頬だった。(113)<sup>32</sup>

ペトリューラの事件と比較した時、「逃亡者」の最大の特徴は、殺害が未遂で終わっている点である。ポグロムの被害者と加害者との関係を報復の形で終わらせていないということだが、それだけでなく、そこには両者の奇妙な結びつきすら描き込まれている。例えば、ウクライナ人を目にしたとき、若者は「自分の片割れがやってきた」と口にしているのである。

頭が真っ白になりました。なんだかぼんやりして、急に気が軽くなったんです。ひとりぼっちじゃなくなったというか。自分の片割れがやってきたような感じア・シュテイクです。(184、ルビは筆者)

ポグロムの生き残りがその加害者とも言える人物を「自分の片割れ」(א שטיק)と呼ぶこの事態をどう考えるべきだろうか。

この問いを考える上で、まずは若者の言語に目を向けてみたい。というのも、「逃亡者」はウクライナ出身のユダヤ人のバイリンガリズムの諸相を描いた小説としても読めるからである。例えば、若者の同郷者の一人にベレレ・ブムがいるが、言語に堪

<sup>32</sup> ベルゲルソン研究者サシャ・センドロヴィチは、若者の歪んだ顔に同化と未同化との間で分裂していた当時のユダヤ社会を読み取っている。Sasha Senderovich, "In Search of Readership: Bergelson among the Refugees," in *David Bergelson: From Modernism to Social Realism*, p. 162. 同様の議論は Allison Schachter, *Disaporic Modernisms: Hebrew and Yiddish Literature in the Twentieth Century*. New York: Oxford University Press, 2012, pp. 84–120 にも見られる。実際、ヨーロッパの東西で異なる発展を遂げたユダヤ人が邂逅する契機ともなった第一次世界大戦後のドイツ社会で、東方ユダヤ人の容貌は、失われたユダヤの伝統を体現するものともされた(そのような言説の典型として、例えば1919年にアルノルト・ツヴァイクが著した「東方ユダヤ人の相貌」*Das ostjüdische Antlitz*がある)。西でも東でも「二種類の頬」に引き裂かれたユダヤ人は少なくなかったということである。しかし、「真鍮ボタンの制服を着てギムナジウムに通う学生」であった「逃亡者」の若者を「未同化」と言えるかどうかは疑問が残る。しかも、シュテットルでのユダヤ人の暮らしを考えると、ユダヤ社会だけでなく、その外部との関係にも目を向ける必要があるだろう。その関係が破綻した結果生じたのがポグロムであったからである。ベルゲルソンを「ウクライナ文学」として読むとは、そうしたユダヤ的な枠組みの外から読むということも意味している。

能で、ロシアにいた頃はロシア語のシオニズムの新聞に書き、ベルリンにやってくるからはドイツ語新聞に書かせてもらっているという彼は、自らの言語運用能力を十二分に発揮して世の中を渡り歩いたウクライナ出身のユダヤ人の一人である。他方で、主人公の若者もバイリンガルかポリグロットであったと考えられるが、彼はベレレ・ブムとは異なるタイプに属していた。

「逃亡者」は若者の語りを聞き手の「わたし」がイディッシュ語で記述した一種の「聞き書き」小説であるが、二人が実際にどのような言語で語り合っていたのかは分からない。一つだけはっきりしているのは、若者の故郷の言語であるロシア語とウクライナ語がそこに混在していたことである。例えば、ウクライナ人が下宿に登場する場面はこのように語られている。

ある早朝に、下宿の廊下で騒がしい物音がしたんです——甲高い声のウクライナ語も混じっていました。廊下を覗いてみると、重そうなスーツケースをふたつも抱えた宿のお手伝いさんが目に入りましたが、そのうしろに、口髭をぴんと反らせたあいつがいたんです。やたらぺこぺこする若者をひとり従えていました。／——<sup>ア</sup>で、<sup>ド</sup>う<sup>ン</sup>だ——<sup>ク</sup>周囲をくくん嗅ぎながら、あいつは若者に訊きました——<sup>ア</sup>ここには……<sup>ト</sup>ユ<sup>ダ</sup>ヤ<sup>人</sup>はいないだろうね。(123-124)

ここでは、ウクライナ人の登場がウクライナ語の侵入として語られていることが分かる。そして、それはユダヤ人に対する悪意が露骨に込められた台詞であった。しかし、それを若者は「わたし」に向けて執拗に再現してみせているのである。

あるとき、廊下に出てみたら、そこにあいつがいて、電話口で話をしているんです。気に食わない知らせだったようです。耳に受話器を押しあて、大きく開いた両目には残忍な毒の炎がいつも以上に燃え上がっていました。「なんだって？」と相手を詰問していました。長く間延びしておびえた「なんだってえ？」です。(125-126)

ウクライナ人の登場は若者にとって故郷との再会でもあったわけだが、問題は、そうした「自分の片割れ」とも言える存在が、ポグロムの時代を境に、彼の敵になったということである。「あいつのせいでたくさんの虐殺が引き起こされたし、そのひとつでばくも祖父を殺された」と言う彼は、ウクライナ人を復讐すべき相手として捉えている。ところが、その直後に、「[祖父に対する]哀れみすら本当はばくでない他人の感情だったのかもしれない」と自信を喪失している彼は、ウクライナ人に対して複雑な葛藤を抱えていたことがわかる。

『言語間の接触』(1953年刊)の著者ウリエル・ヴァインライヒは、二言語併用が「有害」とまではいかなくとも、必ずしも「有益」とは言えない事例の一つとして、「第二言語が敵性国家のものである場合」を挙げている<sup>33</sup>。「戦争は、往々にして二言語併用者をことさらにひどく苦しめる。それは彼にとって内戦(a civil war)と言ってもいいものだからだ」<sup>34</sup>という言語学者パウル・クリストフェルセンの言葉は、「逃亡者」の若者の状況にそのまま当てはまると言えるだろう。例えば、ウクライナ人と出会った翌日の興奮を彼はこんな風にも語っていた。

「ピチュピチュ」と、近くの梢から鳥の囀りが部屋まで聞こえてきました。すると、その囀りが、どんな囀りよりも人生を感じさせてくれるような気がしたんです [...] 遠くに旅立とうとしているのに、この「ピチュピチュ」となかなか別れられないでいる、そんな気持ちになったんです。／下宿であいつを見張るようになったのはこの頃からです。(128-129)

ウクライナ語が「鳥の囀り」として語られているわけだが、要するに、故郷を破壊した敵であるはずのウクライナ人とベルリンで再会したとき、相手に憎しみを抱くよりも前に、その言語に対する愛着を感じていたのである。

二言語併用は、ベレレ・ブムのように、一方から他方の社会への自由な移動を可能にもすれば、「二種類の類」の若者のように、一方でも他方でもない分断した状態に陥れもする。「逃亡者」が描いていたのは、そのような自己の分裂に直面した一人の二言語併用者の「内戦」であったと言えるだろう。

## まとめ

1884年にウマニに程近いシュテットル(現在のウクライナのサルヌィ Сарни)に生まれ、キエフでイディッシュ語による文学活動を開始したベルゲルソンは、ヨーロッパの自然主義の影響から出発し、ベルリン移住後に表現主義の手法を取り入れ、イディッシュ語文学に新たな境地を切り開いたことで知られる作家である。しかし、ヒトラーが政権を握った直後に妻子とともにベルリンを立ち、コペンハーゲンを経由して1934年にソ連に帰国している。その後、ビロビジャンのユダヤ自治州の建設運動や「ユダヤ人反ファシスト委員会」(1941年設立)に関わるなど、ソ連を代表するイディッシュ語作家として活躍したが、1952年にスターリンに処刑された。こうした

<sup>33</sup> Uriel Weinreich, *Languages in Contact: Findings and Problems*. The Hague: Mouton, 1966, p. 121.

邦訳は神島武彦訳『言語間の接触: その事態と問題点』岩波書店、1976年、241頁を参照。

<sup>34</sup> Paul Christophersen, *Bilingualism*. London: Methuen, 1948, pp. 9-10. 同じ文章は Weinreich, *ibid.*, p.121にも引用されている。

後半生の活動によって、ベルゲルソンは現在ではしばしばソ連の作家として位置づけられることがある。

しかし、十年以上もの長きにわたるベルリンでの滞在期間（1921–33）は、彼の作家人生において、もっとも生産的な時期にあたり<sup>35</sup>、このことからベルゲルソンは単純にソ連の作家と言い切ってしまうことのできない、様々な顔を持つことがわかるだろう。近年、ベルリン時代のベルゲルソンの活動にも注目が集まっており、ようやくソ連以前の活動も含めた彼の全体像を捉え直す時期に来ていると言える<sup>36</sup>。

そこで本稿はベルリン時代のベルゲルソンに焦点を当て、ベルリンで書かれた彼の小説をアレイヘム以後の「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学」の系譜に位置づけて読み直したが、これは民主化以降にウクライナで進められてきた新たな文学史の捉え直しの動きとも、どこかで結びつくのではないかと考えている。

「ウクライナ文学」の枠組みで捉えた場合、ショレム・アレイヘムはシュテットルにおけるユダヤ人とウクライナ人の関係が崩壊していく過渡期を生き、両者の友情を描くことができた最初で最後の世代のイディッシュ語作家であった。他方のベルゲルソンは両者の関係が崩壊した後の時代を生きたイディッシュ語作家であった<sup>37</sup>。

ベルゲルソンはポグロム以後に亡命生活を送るユダヤ人とウクライナ人の経験を、それぞれの立場からイディッシュ語で書こうとした。彼の作品の中ではユダヤ人だけでなく、ウクライナ人もポグロムの時期に心に傷を負った存在として登場している。どちらもポグロムによって破壊された故郷に対する喪失感を抱えている点では同じである。そして、その破壊されたかつての故郷ではユダヤ人とウクライナ人は互いに隣人関係として共存していたのである。

<sup>35</sup> ベルリン時代の大きな仕事としては、全六巻の著作集（1922–23年）、モダニズム芸術誌『ザクロ』（מילגריום）の編集（1922年の創刊号のみ）、ロシア内戦を描いた長編『判決』（הדין מידת）（1929年）がある。

<sup>36</sup> 例えば次のアンソロジーが英語で出ている。Joachim Neugroschel (trans.), *Shadows of Berlin. The Berlin stories of Dovid Bergelson*. San Francisco: City Lights Books, 2005. また、ベルリン時代のベルゲルソンの作品を総体的に論じた最初の研究として、Delphine Bechtel, “Dovid Bergelsons Berliner Erzählungen. Ein vergessenes Kapitel der jiddischen Literatur,” *Jiddische Philologie. Festschrift für Erika Timm*, Hrsg. von Walter Röhl und Simon Neuberger. Tübingen: Max Niemer Verlag, 1990, S. 257–272. がある。

<sup>37</sup> したがってポグロムの描き方も両者では大きく異なる。『牛乳屋テヴィエ』の最終章「ヴァフラフラケス」には、「ユダヤ人の一味を撃て」との「上層部」の命令を受けた村人がテヴィエの家に押し寄せる場面が描かれるが、村人たちはテヴィエを傷つけることができず、窓ガラスを二、三枚割るだけで事足りるとし、終いには全員でテヴィエの「健康を祝して乾杯」するのである。アレイヘムとベルゲルソンのポグロムの描写の違いは二人が生きた時代以外にも、モダニズムの影響の有無など様々な要因を考慮することができるが、その厳密な比較は本論の目指すところではない。いずれ稿を改めて論じたい。



アレイヘムもベルゲルソンも自らの執筆言語であるイディッシュ語がユダヤ人とウクライナ人との長い共生の歴史が生んだ「雑種的な言語」であることを、かなり自覚していたはずである。その作品には驚くほど頻繁にウクライナ語が登場するからである。その意味においてベルゲルソンはアレイヘムに連なる「イディッシュ語で書いたウクライナ文学」の作家の一人として位置づけることができると考えている。

ポグロムの記憶はユダヤ人とウクライナ人とのあいだで現在でも、しこりとして残っている。1926年のシュヴァルツバルドによるペトリューラの殺害事件は、ポグロムの記憶をめぐってユダヤ人とウクライナ人の両者が肩を並べ、とことん議論する好機としてもあったと言える。ヘンリー・アブラムソンやケリー・ジョンソンのように、これを両者の和解に向けたプロセスの始まりと位置づける研究者もいる<sup>38</sup>。しかし、この事件は両者の関係を余計に拗らせる方向にも進んだ。事件後にウクライナ人のあいだでペトリューラを民族の殉教者とする言説が生まれ<sup>39</sup>、ペトリューラの殺害者を無罪としたパリの裁判に不満を抱いたウクライナ人のなかから、あらたなポグロムに走る者も出ている。例えば1941年7月25日にナチス占領下のルヴフ(リヴィウ)で、ペトリューラの死後15年を口実としてポグロムが勃発している<sup>40</sup>。また現在でも、ペトリューラにどこまでポグロムの責任が問えるのかという問題や、シュヴァルツバルドはソ連のエージェントか、そうでないかという問題をめぐって、ユダヤ人とウクライナ人の研究者の間で論争が繰り広げられている<sup>41</sup>。

こうした現在まで続く状況を見ても、「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学」としてベルゲルソンの文学を読み直すことには意義があると言えるだろう。本論はその一つの試みとして書かれている。

<sup>38</sup> Henry Abramson, *op. cit.*, pp. 263-278. Kelly Johnson, *op. cit.*, pp. 1-21.

<sup>39</sup> 例えば、パリのウクライナ誌『トリズブ』Тризубは、ペトリューラの死後10日ほど経った1926年6月6日号の巻頭でペトリューラの死をこう伝えている。「民族の指導者であり英雄であり殉教者の早すぎる悲劇的な死」(передчасну й трагічну смерть національного вождя, героя і мученика)。Тризуб (Париж). 1926. Ч. 34. С. 16. この雑誌は、1925年にペトリューラによってパリで創刊され、亡命ウクライナ人民共和国政府の非公式な報道機関として機能し、ドイツがフランスを占領する1940年5月まで存続した。

<sup>40</sup> ただし、ルヴフを中心とする東ガリツィアのウクライナ民族主義(1918年11月に西ウクライナ人民共和国を建国)とペトリューラとの複雑な関係を考慮すれば、これをウクライナ人の自発的な行動と断定することはできない。野村真理『ガリツィアのユダヤ人』人文書院、2008年、186頁および251-252頁の注(6)を参照せよ。

<sup>41</sup> ウクライナ人歴史家タラス・フンチャクとユダヤ人歴史家ゾジャ・シャイコフスキとの論争はとくに有名である。以下を参照。Taras Hunczak, "A Reappraisal of Symon Petliura and Ukrainian Jewish Relations, 1917-1921," *Jewish Social Studies*. 1969, pp. 163-183. ならびに Zosa Szajkowski, "A Reappraisal of Symon Petliura and Ukrainian Jewish Relations, 1917-1921: A Rebuttal," *Jewish Social Studies* 32. 1970, pp. 184-213.

## **Ukrainian literature written in Yiddish: Dovid Bergelson and post-pogrom problems**

Moriyasu Tanaka

Since Ukraine's democratization, various attempts have been made to reconsider Ukrainian literature from new perspectives to liberate it from its status of subordination to Russian literature. One such efforts can be found in an attempt to construct multilingual Ukrainian literature. In light of the recent research on Ukrainian literature, this paper reexamines Dovid Bergelson as an author of Ukrainian literature written in Yiddish, despite he is generally referred to as a Soviet-Yiddish writer.

Bergelson was born in Ukraine under the Russian Empire. He began his career as a Yiddish writer in Kiev and moved to Berlin after the Russian Civil War. He spent more than a decade in Berlin, from 1921 to 1933. During this time, he wrote several novels set in Berlin, including two short stories "Two Murders" and "Among Refugees," both of which dealt with the traumatic memories of pogroms. This paper places these two works in the genealogy of post-Sholem Aleichem's Ukrainian literature written in Yiddish, and reexamines them as the works that have sought to reconstruct a relationship between Jews and Ukrainians after the pogroms.

Alechem was in the last generation of Yiddish writers who were able to portray the shtetl as a symbiotic space between Jews and Ukrainians. His masterpiece, *Tevye the Milkman*, depicts the transitional period of the shtetl's collapse in a mongrel language, a mixture of Ukrainian and Yiddish. On the other hand, Bergelson could not portray the Jewish-Ukrainian relationship in the post-pogrom period as friends as Aleichem did, and refused to portray it as enemies. Both "Two Murders" and "Among Refugees" can be read as novels that depict the swaying relationship between friendship and enemy.

Bergelson's literature can be contextualized in the present scenario, where both Jews and Ukrainians are in the process of reconciliation, struggling to overcome the post-pogrom confrontational relationship.

【論文】

## The Grammaticalization of the Numeral *edin* in Bulgarian

Eleonora Yovkova-Shii

### 1. Introduction

As is well known, the Slavic languages of the Balkan *Sprachbund* (Bulgarian, Macedonian) have developed grammatical means for marking definiteness, that is, the definite article. However, the question of the existence of an indefinite article in these languages remains open. The question of whether there is an indefinite article in these languages is closely related to the grammatical status of the numeral *edin* as a marker of indefiniteness.

This work focuses on *edin* as a marker of indefiniteness and discusses the problem of its grammaticalization. The aim of this study is not to draw a conclusion on whether *edin* is an indefinite article, but rather to examine the stages in the grammaticalization process of *edin* as a marker of indefiniteness on the synchronic level of the language.

The remainder of this paper is organized as follows: Section 2 briefly describes the grammatical means of marking definiteness/indefiniteness in Bulgarian. Section 3 focuses on the polemics concerning the grammatical status of *edin*. Section 4 presents our proposal for the grammaticalization process of *edin* and the scales of grammaticalization of the numeral ‘one’ proposed in several previous works on which our proposal is based. In Section 5, we define the key terms used in this paper. Section 6 presents the procedure and research questions of this study. Section 7 presents the analysis of the study. Section 8 briefly discusses the plural form *edni*. Section 9 provides a summary and conclusions.

### 2. Marking definiteness/indefiniteness in Bulgarian

Definiteness in Bulgarian is expressed grammatically by inflecting the morpheme of the definite article and post-fixing it to the stem of the noun, as in *grad-ăt*<sup>1</sup> (‘the city’). Indefiniteness (e.g., ‘a city’), on the other hand, can be expressed by two different forms, i.e. the bare (non-articled) form of the noun (*grad*) or the form with the numeral *edin*<sup>2</sup> (*edin grad*).

<sup>1</sup> The example presents the long (nominative) form of the article in masculine.

<sup>2</sup> The numeral has four forms, namely *edin* (masculine), *edna* (feminine), and *edno* (neuter) for singular, and *edni* for plural. In this work, the masculine form will be used to represent the four

Some authors (Пенчев 1984,<sup>3</sup> Куцаров 2007<sup>4</sup>) place the forms with *edin* in the definite domain; however, the generally recognized idea is that these forms express indefiniteness.

The use of the numeral ‘one’ to mark indefiniteness in Balkan Slavic is considerably more developed than in other Slavic languages, and it has been said (Friedman 2003:93)<sup>5</sup> that it is language contact inside the Balkan *Sprachbund* that is the reason for the evolution of *edin* as a marker of indefiniteness. Language contact is by no means an important factor in the development of *edin* as a marker of indefiniteness in Balkan Slavic. However, in our opinion, the fact that the Slavic languages of the Balkan *Sprachbund* possess a grammatical marker for definiteness, that is, a definite article stimulated the tendency to develop a marker of indefiniteness in order to balance the grammatical paradigm of definiteness/indefiniteness.

### 3. Polemics concerning the grammatical status of *edin*

The status of *edin* as a marker of indefiniteness (or an indefinite article) has been disputed. The proposed ideas are contradictory and there is no unified position concerning the problem. The majority of standard works of the Bulgarian authors take a rather conservative view of the matter (Андрейчин, Попов, Иванов 1953,<sup>6</sup> Андрейчин 1978,<sup>7</sup> Георгиев 1978,<sup>8</sup> Стоянов 1980<sup>9</sup>) stating that indefiniteness is expressed simply by the absence of the article, i.e. the bare form of the noun. The grounds for this conservative view have been said to be the fact that there exist many examples where the two structures, that is, the structure with *edin* and the bare form of the noun, cannot be distinguished functionally or semantically, and the two forms can be mutually substituted. Positive arguments with justifications may be further subdivided into those in which the use of *edin* is viewed as always facultative (Маслов 1956,<sup>10</sup> Naylor forms.

<sup>3</sup> Йордан Пенчев, *Строеж на българското изречение* (София: Наука и изкуство, 1984).

<sup>4</sup> Иван Куцаров, *Теоретична граматика на българския език. Морфология*. (Пловдив: Университетско издателство „П. Хилендарски“, 2007).

<sup>5</sup> Victor Friedman, ‘One’ as an indefinite marker in Balkan and non-Balkan Slavic. In Alan Timberlake and Michael Flier (eds.), *American Contributions to the Thirteenth International Congress of Slavists*, pp.93–112 (2003).

<sup>6</sup> Любомир Андрейчин, Константин Попов, Минко Иванов, *Съвременен български език. Учебник за първи курс на учителските институти* (София: Народна Просвета, 1953).

<sup>7</sup> Любомир Андрейчин, *Основна българска граматика*. (София: Наука и изкуство, 1978).

<sup>8</sup> Станьо Георгиев, Лексико-морфологична модификация на първичното числително един в съвременния български език. В: Петър Пашов (съст.) *Помагало по българска морфология. Имена*, с. 397–410 (София, Наука и изкуство, 1978).

<sup>9</sup> Стоян Стоянов, *Грамматика на българския книжовен език*. Трето издание (София: Наука и изкуство, 1980).

1983<sup>11</sup>) and those that admit obligatory uses of *edin* in certain contexts (Иванчев 1957,<sup>12</sup> Стаменов 1985,<sup>13</sup> and Станков 1995<sup>14</sup>). Friedman (1976)<sup>15</sup> goes further and admits the existence of an “indefinite article” *edin*, especially in semantic or syntactic contexts that demand a referential interpretation.

As this brief review of the polemics on the grammatical use of *edin* shows, previous studies have dealt mainly with the problem of whether *edin* is an indefinite article. However, our interest is not whether *edin* is an indefinite article; rather, this study attempts to examine the degree of grammaticalization of *edin* and the stages in the grammaticalization process.

#### 4. The process of grammaticalization of indefinite articles and indefinite markers: Scales and stages

As mentioned, the aim of this study is not to draw a conclusion on whether *edin* is an indefinite article, but rather to examine the stages in the grammaticalization process of *edin* as a marker of indefiniteness on the synchronic level in the Bulgarian language. The scale we propose for the grammaticalization process of *edin* (Fig. 3) is based on the scales proposed by Givón (1981)<sup>16</sup> and Heine (1997)<sup>17</sup> for the grammaticalization stages of indefinite articles (Fig. 1), elaborated by the scale proposed by Geist (2013)<sup>18</sup> for the grammaticalization of *edin* in

<sup>10</sup> Юрий Маслов, *Очерк болгарской грамматики* (Москва: Издательство литературы на иностранных языках, 1956).

<sup>11</sup> Kenneth E. Naylor, On expressing ‘definiteness’ in the Slavic languages and English. *American Contributions to the Ninth International congress of Slavists*, pp.203–220 (1983).

<sup>12</sup> Светомир Иванчев, Наблюдения върху употребата на члена в българския език. *Български език* 6, с. 499–525 (1957).

<sup>13</sup> Христо Стаменов, За употребата на един като показател за неопределеност в българския език (в сравнение с английски). *Език и литература* кн. 3, с. 33–44 (1985).

<sup>14</sup> Валентин Станков, Семантични особености на категорията неопределеност на имената в българския език. В: Валентин Станков (съст.). *Българско езикознание т. 1. Проблеми на граматичната система на българския език*, с.87–150 (София: Академично издателство “Проф. Марин Дринов”, 1995).

<sup>15</sup> Victor Friedman, The questions of a Bulgarian indefinite article. *Bulgaria Past&Present*, pp. 334–339 (1976).

<sup>16</sup> Talmy Givón, On the development of the numeral ‘one’ as an indefinite marker. *Folia Linguistica Historica* II.1, pp. 35–53 (1981).

<sup>17</sup> Bernd Heine, *Cognitive Foundations of Grammar* (New York-Oxford: Oxford University Press, 1997).

<sup>18</sup> Ljudmila Geist, Bulgarian *edin*: the rise of an indefinite article. In: Herausgegeben von Junghanns, Uwe Fehmann, Dorothee Lenertová and Denisa Pitsch (eds.), *Formal Description in Slavic Languages: The Ninth Conference. Proceedings of FDSL 9, Göttingen 2011*, pp. 125–148 (2013).

Bulgarian (Fig. 2).

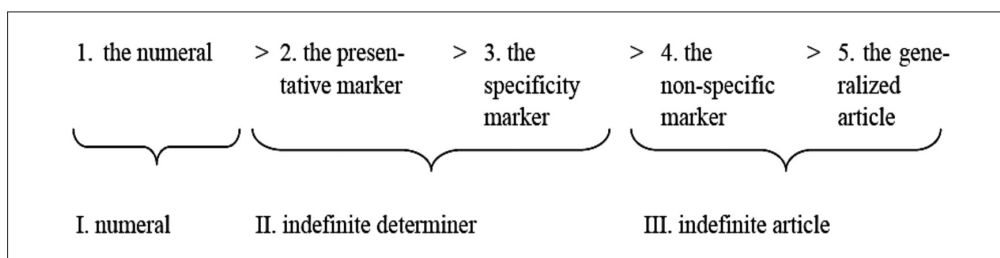


Fig. 1 The grammaticalization of indefinite articles (Givón 1981:49, Heine 1997:72–73)

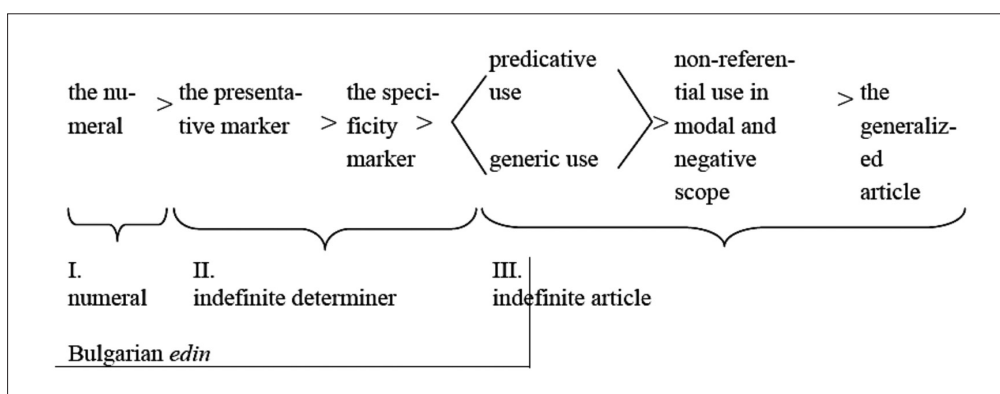


Fig. 2 The grammaticalization of *edin* (Geist 2013:147)

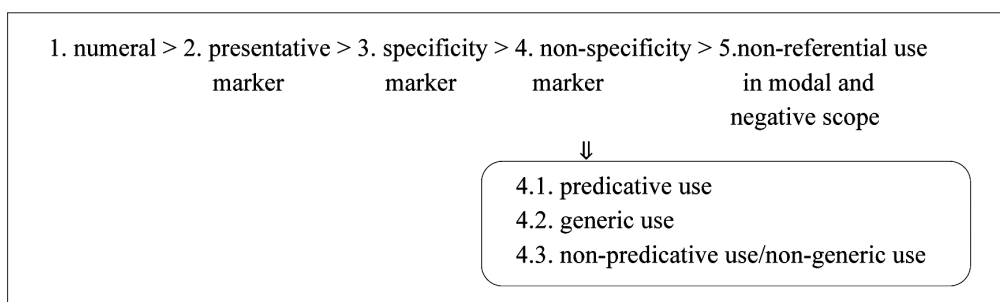


Fig. 3 Our proposal for the scale of the grammaticalization of *edin*

Our proposal for the scale of the grammaticalization of *edin* includes the following stages: Stage 1 is the prototypical stage of *edin* as a numeral. Stage 2 is the stage of the presentative marker. Stage 3 is the stage of indefinite specificity. Stage 4 is the stage of indefinite non-specificity. For the stage of non-specificity, we further divide it into three sub-stages, including 4.1. the predicative use, 4.2. the generic use, and 4.3. the non-predicative and

non-generic use. With noun predicates, *edin* is used mainly as a marker of non-specificity; however, there are certain predicative uses of *edin* with referential meanings. Although this is not the main function of *edin* in noun predicates, in the analysis, we have included some brief observations concerning the referential uses of *edin* in noun predicates. The final Stage 5 is the non-referential use in the modal and negative scope.

### 5. Terminology

Before proceeding with the analysis and its results, it is necessary to define the terms *specific* and *referential* used in this study because these terms have been used in different works with different connotations, sometimes even synonymously.

In this study, the term *specific* is used to convey that the speaker has a particular referent in mind identifiable to the speaker but presumably not to the listener. The term *referential* is used to express that the person or thing referred to is viewed as a particular or concrete member of a class. Thus, specific phrases are simultaneously referential; however, referential phrases need not be specific.

### 6. The procedure and research questions of this study

In this study, we examine each stage of the scale in Fig. 3 by analyzing the obligatoriness in the use of *edin*, that is, whether the use of the form is obligatory for any context and cannot be substituted by the mutually exclusive member,<sup>19</sup> as well as the conditions that require, allow, or prevent the use of *edin*. In our case, the mutually exclusive member is the bare (non-articled) form of the noun.

The research questions that this study poses are as follows:

- 1) What is the functional or semantic difference between the forms with *edin* and the bare forms of the noun?
- 2) For which stages has the grammaticalization process of *edin* been fully completed?

In relation to the above-mentioned questions, we also investigate the following problems:

- 3) Do contexts of specificity exist that allow the absence of *edin* and where the meaning of specificity can be expressed merely by the bare noun form?
- 4) Do contexts of non-specificity exist that allow the usage of *edin*, and what are the requirements of obligatoriness or facultativeness of the usage of *edin* in such contexts?

---

<sup>19</sup> Or substitution will lead to changes in meaning/function.

## 7. Stages in the grammaticalization process of *edin*

### 7.1. The numeral

The first stage in the grammaticalization process is the numeral stage, which is the prototypical function of *edin*, and where *edin* still lacks its function as a marker of indefiniteness. Its absence or substitution by the bare noun form in contexts such as (1 a) leads to ungrammaticality, as in (1 b).

- (1) a. *V stajata ima edin stol, a ne dva.*  
in room.ART have.3SG.PRS one.M chair but not two  
b. \**V stajata ima Ø stol, a ne dva.*  
'In the room there is one chair, not two.'

### 7.2. The presentative marker

“Presentative marker” is used here in the sense of introduction of a new participant unknown to the listener or introduction of a prospective topic.

Using *edin* as a presentative marker (2 a), the speaker conveys that the referent is important in the discourse and she/he wants to tell more about it (underlined phrase). The use of *edin* as a presentative marker is obligatory, and its absence or substitution with the bare form leads to ungrammaticality (2 b).

- (2) a. *Imalo edno vreme edin kral.*  
have.PTCP.N one.N time one.M king  
*Kraljat / Toj imal dvama sina.*  
king.ART/he have.PTCP.M two son.PL  
b. \**Imalo edno vreme Ø kral. Kraljat/Toj imal dvama sina.*  
'Once upon a time there lived a king. The king/He had two sons.'

### 7.3. The specificity marker

In many previous studies (Friedman 1976,<sup>20</sup> Иванчев 1978,<sup>21</sup> Станков 1984,<sup>22</sup> Стаменов

---

<sup>20</sup> Friedman, The questions (cf. note 15).

<sup>21</sup> Светомир Иванчев, Наблюдения върху употребата на члена в българския език. В: Петър Пашов (съст.) *Помогало по българска морфология. Имена*, с. 186–211 (София:Наука и изкуство, 1978).

<sup>22</sup> Валентин Станков, За категорията *неопределеност на имената* в българския език. *Български език* 3, с.195–205 (1984).



1985,<sup>23</sup> Ницолова 2008,<sup>24</sup> Geist 2013<sup>25</sup>), it has been claimed that the grammaticalization of *edin* has been fully completed for the stage of specificity marker and that the addition of *edin* to a NP invariably indicates indefinite specificity, that is, *edin* is obligatory in contexts of indefinite specificity. We investigate this claim here and examine whether *edin* is invariably used in contexts of indefinite specificity.

In most contexts of indefinite specificity, the presence of *edin* is necessary, as in example (3 b).

- (3) a. *Az tǎrsja Ø vila.*  
 I look for.1SG.PRS second house  
 ‘I am looking for a second house (= any house).’
- b. *Az tǎrsja edna vila.*  
 I look for.1SG.PRS one.FEM second house  
 ‘I am looking for a second house (= one particular house).’

Again, there exist indefinite specific uses in which the omission of *edin* leads to ungrammaticality, as in (4 b).

- (4) a. *Slušaj, Suluk, došǎl sǎm da ti*  
 listen.2SG.IMP Suluk come.PTCP.M be.1SG.PRS to you.ACC  
*kaža edna rabota.*<sup>26</sup>  
 say.1SG.PRS one.F thing
- \*b. *Slušaj, Suluk, došǎl sǎm da ti kaža Ø rabota.*  
 ‘Listen to me, Suluk. I came to tell you one thing.’

However, the question is whether the use of *edin* is obligatory in all contexts of indefinite specificity, and whether there is no context where *edin* can be omitted or the form of *edin* can be substituted by the bare form without any change in meaning. To verify this question, we refer to the following examples:

<sup>23</sup> Стаменов, За употребата на един (cf. note 13).

<sup>24</sup> Руселина Ницолова, *Българска граматика. Морфология* (София: Университетско издателство “Св. Климент Охридски”, 2008).

<sup>25</sup> Geist, Bulgarian *edin* (cf. note 18).

<sup>26</sup> Example from Ницолова, *Българска граматика*, с.99 (cf. note 24).

- (5) *Ot káštata izleze Ø žena.* (final rhematic subject)  
from house.ART go out.3SG.PST woman  
'A woman got out of the house.'
- (6) *Sreštnax Ø momiče, oblečeno v červena roklja.*  
(rhematic object with relative clause)  
meet.1SG.PST girl wear.PST.PRF.PTCP.N in red.F dress  
'I met a girl who was dressed in a red dress.'
- (7) *Ø Burja se nosi nad grad i selenija.*  
storm REFL whirl3SG.PRS above town and houses  
*Ø Burja pregradi lomi.*<sup>27</sup> (initial rhematic subject)  
storm walls destroy3SG.PRS  
'Storm whirls above the town and houses. Storm destroys walls.'
- (8) *Toj piše Ø pismo.* (rhematic object)  
he write.3SG.PRS letter  
'He is writing a letter.'
- (9) *Pred nas se izpravi Ø mlad máž.*  
(final rhematic subject with modifier)  
in front of us REFL stand up.3SG.PST young man  
'A young man stood up in front of us.'

In examples (5)–(9), the noun phrases in **bold** express concrete and specific/referential objects. Nevertheless, they are used without *edin*. These examples show that there exist contexts of indefinite specificity where the use of *edin* is not obligatory (or, can be substituted by the bare form).<sup>28</sup>

The question is what distinguishes the contexts in which the presence of *edin* is obligatory from the contexts in which its usage is not obligatory and the forms with *edin* can

<sup>27</sup> Example from the poem *Градът*, Николай Лилиев (*Избрани стихотворения*, с.117. Български писател 1960).

<sup>28</sup> In examples (5), (6), and (9), the two forms can be used interchangeably. In (8), the addition of *edin* will not lead to changes into the meaning of specificity, but will intensify (or, emphasize) the NP *pismo*. In (7), the addition of *edin* is theoretically possible but inappropriate for stylistic reasons.

be substituted by the bare forms. Some studies (Иванчев 1957,<sup>29</sup> Станков & Иванова 1989,<sup>30</sup> Geist 2013<sup>31</sup>) pay attention to this problem, and it has been claimed that *edin* is obligatory with argument NPs if they are topics (“topic” is used in the sense of “aboutness,” not as “old information”) as in example (10) where the omission of *edin* brings in changes into the information status of the argument (topic→focus); however, when the NP is not a topic, it is possible for *edin* to be omitted.<sup>32</sup>

- (10) *Edna žena se odeli ot grupata.*  
 one.F woman REFL disjoin.3SG.PST from group.ART  
 ‘A woman left the group.’

Further, it has been claimed (cf. Иванчев 1957)<sup>33</sup> that in topic position *edin* is obligatory not for purely grammatical reasons but for the semantic (or, may be pragmatic) reason that indefinite “aboutness” topics must be specific.

When the NP is rheme/comment (preverbal or postverbal) providing new information, or when the whole sentence expresses new information,<sup>34</sup> *edin* can be omitted. Again, *edin* can be omitted when the noun is accompanied by a relative clause, as in (6), in which the relative clause takes on the function of *edin*. Furthermore, *edin* can be omitted when the noun is modified by an adjective, as in (9). Consequently, in some cases, the lack of *edin* does not affect the semantic interpretation of indefinite specificity, and the meaning of indefinite specificity is determined not by the presence of *edin*, rather, by the context, and the aspects of the discourse structure, such as degree of topicality (discourse prominence), distinctive force of the nominal description (presence of additional modifiers), and emphasis on features of the referent in question.

In our opinion, however, there are some other factors besides discourse factors that

<sup>29</sup> Иванчев, Наблюдения (cf. note 12).

<sup>30</sup> Валентин Станков, Малина Иванова, За неопределените именни синтагми, изразяващи специфичност/неспцифичност. *Български език*, № 1, с. 14–27 (1989).

<sup>31</sup> Geist, Bulgarian *edin* (cf. note 18).

<sup>32</sup> Hence, in some cases the addition of *edin* will not change the meaning, but can cause changes into the information structure. The problem of the relationship of the information structure of the sentence and the usage of *edin* has begun to attract the attention of scholars recently; however, more in-depth study of this problem is necessary.

<sup>33</sup> Иванчев, Наблюдения (cf. note 12).

<sup>34</sup> Examples (5)–(9) can be interpreted either as sentences with rhematic argument or as all-new sentences.

need to be taken into account when discussing the use of *edin* in specific contexts, namely the aspectuality of the sentence or text.

Let us first refer to the following examples, given in Стаменов (1985)<sup>35</sup>:

(11) *Meri včera se omăži za Ø šved.*

Meri yesterday REFL marry.3SG.PST.PFV for Swede

‘Mary married a Swede.’

(12) *Meri iska da se omăži za Ø šved*

Meri want.3SG.PRS.IPFV to REFL marry.3PRS for Swede

(*ne za italianets*).

(not for Italian)

‘Mary wants to marry a Swede (not an Italian).’

According to Стаменов, *šved* in (11) has a referential connotation, while *šved* in (12) has a non-referential connotation. Стаменов discusses only the difference related to the semantic features of referentiality, and does not explain the reason for that difference. In our opinion, the temporal/aspectual features of the context in these examples contribute to the referentiality/non-referentiality (specificity/non-specificity) interpretation.<sup>36</sup> To support our claim, let us first refer to the following observation in Fleishman (1992:519)<sup>37</sup>: “verb forms marked for imperfective aspect [...] express a spectrum of meanings and functions subsumable under the modal heading of irrealis.” If we apply the observation of Fleishman to our situation, it could be said that in still unrealized (imperfective) events, the specification (concretization) of the referent is more difficult than the specification (concretization) of the referent in already realized (perfective) events.

Concerning the relationship between the aspectuality of the context and the referentiality/non-referentiality (specificity/non-specificity) interpretation, Geist (2013)<sup>38</sup> makes similar remarks, giving the following examples: According to her, in (13 b), with a verb

---

<sup>35</sup> Стаменов, За употребата (cf. note 13).

<sup>36</sup> Besides the grammatical (aspectual) features of the verb, factors related to modality and modality operators seem to be involved as well in example (12). The problem of modality will be discussed later, in Section 7.5.

<sup>37</sup> Suzanne Fleishman, Imperfective and irrealis. In: Joan L. Bybee and Suzanne Fleishman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, pp. 519–555. (Amsterdam: John Benjamins, 1992).

<sup>38</sup> Geist, Bulgarian *edin* (cf. note 18).

in the perfective aspect, *edin* expresses specificity, and in (13 a), with a verb in the imperfective aspect, it expresses non-specificity. However, Geist does not discuss this problem in detail or the reasons for this distinction.

- (13) a. *Marija pročitaše vsjaka kniga, kojato edin profesor ot universiteta ji preporučvaše.* (non-specific)  
 Marija read.3SG.IPFV every book which one.M professor from university.ART her recommend.3SG.IPFV  
 ‘Maria was reading every single book which a professor (=any professor) in the university was recommending to her.’
- b. *Marija pročete vsjaka kniga, kojato edin profesor ot universiteta ji preporuča.* (specific)  
 Marija read.3SG.PFV every book which one.M professor from university.ART her recommend.3SG.PFV  
 ‘Maria read every single book which a professor (= one specific professor) in the university recommended to her.’

The problem of the relationship between the grammatical (aspectual) features of the verb/context and the meaning (grammatical function) of *edin* is poorly understood and requires further examination.

As the above analysis shows, in the context of specificity, the use of *edin* is a necessary but not an absolute (obligatory) condition, and there are cases where the forms of *edin* can be used compatibly (interchangeably) with the bare forms.

#### 7.4. The non-specificity marker

Non-articled NPs are used in non-specific indefinite contexts, as in (3 a). Below, we examine various non-specific uses and examine whether there exist contexts of indefinite non-specificity that allow the usage of *edin*, and what the requirements for such uses are.

##### 7.4.1. Predicative use

The most typical non-specific use of NPs is the predicative use in noun predicates, as in (14), in which the NP of the predicate expresses a characteristic feature of the subject.

- (14) *Toj e Ø pevets.*  
he be.3SG.PRS singer  
'He is a singer.'

The noun in the predicate merely expresses a characteristic feature of the subject and does not have a referent; consequently, it is non-specific. In such non-specific noun predicates, the non-articled form is generally used, as in (14). However, there exist cases that permit the use of *edin*, as shown in examples (15)–(17).

- (15) *Toj e edin žurnalist, kogoto sreštmax v izdatelstvoto.*  
he be.3SG.PRS one.M journalist whom meet. 1SG.PST in publishing house.ART  
'He is a journalist whom I met in the publishing house.'

- (16) a. *Toj e edin pevets /njama što!*  
he be.3SG.PRS one.M singer /not at all/  
'He is a singer?!' (literally, 'He is not a singer.')
- b. *Toj e edin pevets /čudo!*  
he be.3SG.PRS one.M singer /miracle/  
'He is a singer!' (literally, 'He is a great singer.')

- (17) *Toj e edin glupak.*  
he be.3SG.PRS one.M fool  
'He is a fool.'

Example (15) denotes the referential use of *edin* in noun predicates, whereas examples (16) and (17) denote the non-referential uses.<sup>39</sup> The referential use of *edin* in noun predicates is permitted by contextual features; that is, the presence of additional modifiers (adjectives or relative phrases). Example (16) displays the so-called pejorative use.<sup>40</sup> The pejorative meaning can be negative, as in (16 a), or positive, as in (16 b), and the two meanings can only be

---

<sup>39</sup> As mentioned in Section 4, *edin* in noun predicates can have referential and non-referential uses. The former, however, is related not to the stage of non-specificity marker but to the stage of specificity marker, and is different from the non-referential uses discussed in this chapter. The two uses are discussed here together merely for syntactic similarity (the predicative position).

<sup>40</sup> Called, also, *еминентно значение* (Юрий Маслов, *Грамматика болгарского языка* (Москва: Высшая школа, 1981).

distinguished contextually. However, propositions with negative meanings were observed more frequently.

Example (17) has the same predicative use as in (14). As mentioned, in such contexts, the bare form (*Toj e Ø glupak*) is typically used. It can be said that *edin* is used here as an “intensificator”<sup>41</sup> of *glupak* (‘fool’), intensifying (or emphasizing) the characteristic feature of the noun it accompanies.

With regard to the fact that in the predicative use *edin* has both referential and non-referential meanings, it could be said that this use falls at an intermediary stage between the stage of non-specificity marker and the stage of specificity marker.

#### 7.4.2. Generic use

Another non-specific type is the generic use. Geist (2013)<sup>42</sup> treats the stages of generic and predicative use as parallel (Fig. 2). However, Алексова (2019)<sup>43</sup> claims that the generic stage should be placed higher on the scale, preceding the predicative use, because the use of *edin* with generic noun phrases is more common in Bulgarian than the predicative uses of *edin*. The problem with the sequence of these two uses is not relevant to our discussion and will not be discussed here. However, as discussed in Section 7.4.1, *edin* has referential and non-referential meanings in the predicative use, which in fact puts this stage closer to the stage of specificity marker than the generic use, which, as shown below, has only non-referential uses.

Generic singular nouns in Bulgarian can be used with the three forms of definiteness/indefiniteness: the artiled form (18 a), the form with *edin* (18 b), and the bare form (18 c).

- (18) a. *Džentälmenät ne bi postäpil taka.*  
gentleman.ART not would behave.PTCP.M thus  
‘The gentleman would not behave like this.’
- b. *Edin džentälmen ne bi postäpil taka.*  
one.M gentleman not would behave.PTCP.M thus  
‘A gentleman would not behave like this.’
- c. *Ø Džentälmen ne bi postäpil taka.*  
gentleman not would behave.PTCP.M thus  
‘A gentleman would not behave like this.’

<sup>41</sup> Cf. Станков, За категорията (cf. note 22); Ницолова, *Българска граматика*, с.87 (cf. note 24).

<sup>42</sup> Geist, *Bulgarian edin* (cf. note 18).

<sup>43</sup> Красимира Алексова, За процеса на граматикализация на *един* в полето на неопределеността. *Известия на Института за български език “Проф. Л. Андрейчин”*, БАН, книга XXXII, с. 160

The generic form of *edin* is mostly observed in propositions with modal verbs expressing forbidding, duty, etc., as in (18 b). In other cases, the articulated form, as in (19 a), or the bare noun form (mainly in proverbs or idioms), as in (20), are preferred, although the articulated forms occur more frequently.

- (19) a. *Pingvinăt e ptitsa.*  
 penguin.ART be.3SG.PRS bird  
 ‘The penguin is a bird.’  
 \*b. *Pingvin e ptitsa.*  
 \*c. *Edin pingvin e ptitsa.*

- (20) *Ø Tsigular kăšta ne xrani.*<sup>44</sup> (proverb)  
 violin player house not feed.3SG.PRS  
 ‘A violin player cannot feed his family.’

### 7.4.3. Non-predicative/non-generic use

In non-predicative/non-generic contexts of non-specificity, the bare form is usually used (cf. 3 a). As Ницолова (2008: 103)<sup>45</sup> has pointed out, particularly in non-referential contrastive contexts of non-specificity, as (21), only the bare form is permitted.

- (21) *Kupix Ø borče, a ne Ø elxa.*  
 buy.1SG.PST pine but not fir tree  
 ‘I bought a pine, not a fir tree.’

However, there could be non-specific (non-predicative/non-generic) contexts in which the NP can be accompanied by *edin*, although the NP has a non-referential meaning (‘some, any’), as in (22).

---

– 200 (София: Издателство на БАН “Проф. Марин Дринов”, 2019).

<sup>44</sup> The articulated form and the form with *edin* are also possible here, but this sentence is a canonized proverb for which the non-articled form is fixed.

<sup>45</sup> Ницолова, *Българска граматика* (cf. note 24).



- (22) *Ako pokaniš edin čuždenets na večerja i trjabva da mu*  
 if invite.2SG.PRS one.M foreigner to dinner and must to him.  
*serviraš nešto bālgarsko, kakvo šte izbereš.*<sup>46</sup>  
 serve.2SG.PRS something bulgarian what will choose.2SG.PRS  
 ‘If you invite a foreigner to a dinner at home and have to serve him a Bulgarian dish,  
 what would you choose?’

*Čuždenets* in (22) expresses ‘any foreigner’ and has non-referential/non-specific meaning. The context of (22) permits both the use of the form with *edin* and the bare form without any change in meaning. Hence, these two forms are interchangeable. The use of *edin* here can be explained in a similar way as in example (17) by the so-called “intensifying function” (see note 41).

### 7.5. Non-referential use of *edin* in modal and negative scope

Non-referential use in modal and negative scopes has been said to be the final stage in the grammaticalization process. Little has been discussed about this stage (cf. Izvorski 1993<sup>47</sup>, Geist 2013<sup>48</sup>) and as previous studies have shown, *edin* cannot be used in the final stage of the grammaticalization process. Here, we will briefly refer to two examples (23, 24) from Geist and Izvorski and investigate the behavior of *edin* in the final stage.

- (23) *Tja iska da se omāži za edin rusnak.*<sup>49</sup>  
 she want.3SG.PRS to REFL marry.3SG.PRS for one.M Russian  
 ‘She wants to marry a Russian.’  
 a. (compatible continuation) I know him.  
 b. (non-compatible continuation) \*There are no candidates yet.

- (24) *Toj ne spomena edna podrobnost.*<sup>50</sup>  
 he not mention.3SG.PST one.M detail  
 ‘He did not mention a detail.’

<sup>46</sup> Example from Алексова, За процеса, c.175 (cf. note 43).

<sup>47</sup> Roumyana Izvorski, On the semantics of the Bulgarian ‘indefinite article’. In: Sergey Avrutin, Steven Franks and Ljiljana Progovac (eds.) *Annual workshop on formal approaches to Slavic linguistics 2*, Michigan Slavic Publications: Ann Arbor, 235–254 (1993).

<sup>48</sup> Geist, Bulgarian *edin* (cf. note 18).

<sup>49</sup> Example from Geist, Bulgarian *edin*, p.143 (cf. note 18).

Example (23) presents the modal use, and as Geist (ibid: 143) states, can trigger only the interpretation of a, but not b, thus having only a referential (i.e., specific) meaning.<sup>51</sup> Consequently, in modal uses when *edin* takes scope over the intensional operator, the non-referential (non-specific) use is not possible.

Example (24) literally means, ‘What he did not mention was one detail,’ and displays that *edin*, cannot be interpreted in the scope of negation. In order for *edin* to be included into the scope of the negation, it needs to be accompanied by *nito* (‘neither’), as in (25).

- (25) *Toj ne spomena nito edna podrobnost.*  
 he not mention.3SG.PST neither one.M detail  
 ‘He did not mention any one detail.’

### 8. About *edni*

Finally, let us briefly examine the plural form *edni*. As (Ницолова 2008)<sup>52</sup> has pointed out, *edni* is a historically new form. The shift of the numeral *edin* to a marker of indefiniteness can be considered the reason that triggered the appearance of the plural form for the paradigm of the *edin* forms to be completed. However, some differences still exist between singular forms and *edni*.

Following Maslov (1982:367),<sup>53</sup> Ницолова<sup>54</sup> claims that with *pluralia tantum* (for instance, *Tja vze samo edni čorapi* ‘She took only one (pair of) socks’) *edni* can function as a numeral. The observation is not absolutely wrong, however, because *edni* cannot function invariably as a numeral (counter) with any plural noun form, it could be said that the use of *edni* as a numeral is a restricted transpositional use, developed on the analogy with singular forms. Again, *edni* in the above-mentioned example is ambiguous in the meaning of a numeral and non-specificity marker (see the example in note 51); hence, the first stage in the grammaticalization process concerning *edni* is vague.

<sup>50</sup> Example from Izvorski, On the semantics, p.243 (cf. note 47).

<sup>51</sup> Izvorski (On the semantics, p.245 (cf. note 47)) argues that *edin* does not necessarily have to take scope over the intensional operator, and if it does not take over the scope of the intensional operator, it can achieve non-specific interpretation in certain modal sentences, giving the following example.

*Iskam da si kupja edni botuši, no se čudja kakvi.*

‘I want to buy boots, but I wonder what kind.’

<sup>52</sup> Ницолова, *Българска граматика* (cf. note 24).

<sup>53</sup> Юрий Маслов, *Грамматика на българския език* (Наука и изкуство, 1982).

<sup>54</sup> Ницолова, *Българска граматика*, с.131 (cf. note 24).

*Edni* can accompany specific NPs in the same way as singular forms (see, for instance, (26)), but its use as a non-specific indefinite marker is more restricted than singular forms. The use of *edin* with generic nouns is limited, and in generic sentences with plural nouns, non-articled forms are usually used and are more appropriate than forms with *edin* (cf. (27)), although examples can be found where the form with *edin* is also possible (28).

(26) *Dojdoxa edin studenti.*  
 come.3PL.PST one.PL student.PL  
 ‘Students (=particular students) came.’

(27) ? a. *Edni džentälmeni ne bixa postäpili taka.*  
 one.PL gentleman.PL not would.3PL behave.PTCP. PL thus  
 b. *Džentälmeni ne bixa postäpili taka.*  
 gentleman.PL not would.3PL behave.PTCP. PL thus  
 ‘Gentlemen would not behave like this.’

(28) *Edni tsvetja ostaveni bez voda uvjaxvat*<sup>55</sup>.  
 one.PL flower.PL leave.pass.PTCP.PL without water wither.3PL.PRS  
 ‘Flowers that are not watered wither.’

## 9. Conclusion

This paper dealt with the problem of *edin* as a marker of indefiniteness and attempted to trace the grammaticalization process of *edin* and the stages of its grammaticalization at the synchronic level of the language. “Obligatoriness” was used as a parameter of the degree of grammaticalization of *edin*.

Most previous studies have claimed that the grammaticalization of *edin* as a marker of specificity has been completed. The observation is not entirely wrong; however, in our opinion, it would be more precise to say that *edin* has reached the stage of specificity marker, although the process of grammaticalization is still in progress (Fig. 4). The reasons are explained in the following paragraphs.

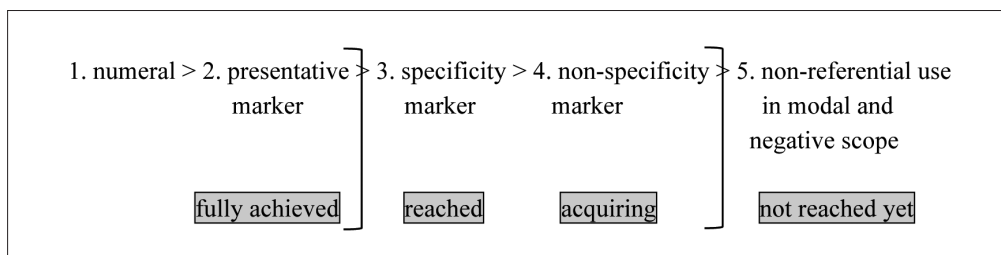
As the analysis above shows, in many contexts of indefinite specificity, the use of *edin* is a necessary, but not an obligatory condition, and there exist cases where indefinite specificity can also be expressed by the bare form of the noun without any change in the meaning.

<sup>55</sup> Example from Izvorski, On the semantics (cf. note 47).

In non-specific contexts, non-articled forms are generally used; however, in certain contexts (genericity, pejorativity), the forms with *edin* are also permitted and *edin* acquires functions as a marker of non-specificity. Nevertheless, the use of *edin* as a marker of non-specificity is far more restricted than that of *edin* as a marker of specificity, and indefinite specificity and indefinite non-specificity are distinguished by the presence or absence of *edin*.

*Edin* cannot be used in the final stage of the grammaticalization process (non-referential use in modal and negative scope).

The appearance of the plural form *edni* can be pointed out as proof of the claim that *edin* is gradually acquiring the features of a marker of indefiniteness, although functional differences exist between the singular forms and the plural form, and *edni* has not achieved all functions of the singular forms.



**Fig. 4 The grammaticalization process of *edin***

*Edin* is by no means achieving the characteristic features of a marker of indefiniteness; however, its usage is mainly observed in the spoken language, while in the written language, the usage of forms with *edin* as a marker of indefiniteness is far more restricted, and forms with *edin* in general are rarely found. This fact opposes the claim of a high degree of grammaticalization of *edin* since highly grammaticalized forms occur irrespective of the genre or register of the language.

**List of abbreviations:**

ACC	accusative
ART	article
F	feminine
IMP	imperative
IPFV	imperfective
M	masculine
N	neuter
NP	noun phrase
PASS.PTCP	passive participle
PFV	perfective
PL	plural
PRS	present
PST	past
PST.PRF.PTCP	past perfect participle
PTCP	participle
REFL	reflexive
SG	singular

## Относно граматикализацията на *един* в българския език

Елеонора Йовкова-Шии

В тази статия се прави опит да се проследи процесът на граматикализация на числителното име *един* като маркер за неопределеност в българския език. Работата предлага схема на граматикализационния процес на *един* на синхронно ниво на езика и разглежда употребата на формите с *един* на всеки един от етапите на схемата. За основен параметър в анализа се употребява “задължителност/факултативност“ при употребата на *един* във всички функции, представени на схемата. Основните въпроси, които поставя тази работа са: 1. каква е функционално-семантичната разлика между формите с *един* и нечленуваните форми, 2. за кой етап от представената схема процесът на граматикализация е напълно завършен. Във връзка с поставените въпроси, се разглеждат и въпросите за възможните референтни употреби на нечленуваните форми както и възможните нереферентни употреби на формите с *един*.

【論文】

# **The Silesian Problem in Poland through the Prism of the Monitoring Cycles of the Framework Convention for the Protection of National Minorities: Comprehensive Analysis from the First Cycle to the Fourth**

Kazuhiro Sadakane

## **1. Introduction**

### **1.1. The Aim of this Paper**

This study aims to analyze the discussions between the Council of Europe (CoE) and the Republic of Poland regarding the Silesian problem. After the fall of the Communist regime, the minority problem started to emerge in the public discourse of Poland in the 1990s (Michna 2020: 145)<sup>1</sup> in the context of so-called identity politics. This politically colored topic is related not only to Poland but also to CoE. Since Poland ratified the Framework Convention for the Protection of National Minorities (FCNM) in 2000, the two political bodies (CoE vs. Poland) continue to discuss groups that differ from the majority (Poles) in culture, language, ethnic consciousness, and so on.

FCNM determines that a ratified state is obligated to send a periodic report to the CoE's Advisory Committee of the Framework Convention (ACFC). These reports submitted by a ratified state are the basis of the ACFC monitoring cycle. All processes of the monitoring cycle consist of four documents: state reports, ACFC opinions, state comments, and ACFC resolutions. These documents are important sources for describing the official position of a ratified state and CoE regarding minority issues. In Poland, there has been a large disagreement between the state and CoE on the so-called Silesian problem since the first monitoring cycle. Briefly, Poland does not approve of the legislative recognition of the Silesian people and their language. In contrast, CoE criticizes Poland for a negative attitude toward the problem, because some Silesians demand legislative recognition such as “minority” or “regional language” from Poland.

---

<sup>1</sup> Ewa Michna, “The Silesian Struggle for Recognition Emancipation Strategies of Silesian Ethnic Leaders,” in Michna, Ewa and Katarzyna Warمیńska eds., *Identity Strategies of Stateless Ethnic Minority Groups in Contemporary Poland*. (Cham: Springer Nature Switzerland, 2020), pp. 145–173.

The fourth monitoring cycle regarding Poland was completed in October 2020 after the publication of the fourth ACFC resolution. Although Sadakane (2020)<sup>2</sup> analyzed the previous three monitoring cycles, the newest one (the fourth cycle) remains unanalyzed. Thus, this study aimed to answer two questions as follows:

1. What topics were discussed in the fourth cycle?
2. How have discussions on the Silesian problem changed from the first to the fourth monitoring cycle?

The analysis in this study will also help us understand how the demands of Silesians have changed over the 20-year discussion, as the opinions issued by ACFC are based on interviews with relevant stakeholders.

## 1.2. Previous Studies and Meaning of this Study

Both the Silesian problem and FCNM have been often mentioned in the previous studies such as Baranowska (2014),<sup>3</sup> Łoziński (2019),<sup>4</sup> Muś and Mazalik (2019),<sup>5</sup> Michna (2020).<sup>6</sup> Although each of these previous studies has some characteristics respectively, most of them neither describe documents of monitoring cycles in detail nor analyze the relationship between the Silesian problem and FCNM. Michna's description (Michna 2020) is relatively detailed, which clarifies the outline of present-day's discussions on the Silesian problem. However, Michna's study is also inadequate in terms of the following two points: (1) Michna points out that the arguments between Poland and CoE on the Silesian problem "have remained substantially the same and since 2003 have appeared in very similar form" (Michna 2020: 157).<sup>7</sup> This mention is generally right, but as this study reveals in Chapter 3, the contents of the discussions on the Silesian problem in FCNM monitoring cycles have changed over

---

<sup>2</sup> Kazuhiro Sadakane, "[The Silesian Problem in the Republic of Poland from the Viewpoint of the Monitoring Processes by the Council of Europe (CoE)] Oushuu hyougikai monitaringu kara miru poorando kyowakoku no shironsuku mondai" (in Japanese), *Suraviaana (Slaviana)* 12 (2020), pp. 3–18.

<sup>3</sup> Grażyna Baranowska, "Legal Regulations on National and Ethnic Minorities in Poland", *Przegląd Zachodni* II/2014 (2014), pp. 35–48.

<sup>4</sup> Sławomir Łoziński, "Języki mniejszości narodowych w przestrzeni publicznej. Czy zmiana krajobrazu językowego w Polsce?", *Nauka* 3 (2019), pp. 125–145.

<sup>5</sup> Anna Muś and Krystyna Mazalik, "„Ukryta opcja niemiecka” – mniejszość niemiecka i śląska grupa etniczna w przestrzeni publicznej. Studium przypadku", *Annales Universitatis Mariae Curie-Skłodowska Lublin–Polonia* XXVI-1 (2019), pp. 159–177.

<sup>6</sup> Ewa Michna, "The Silesian Struggle for Recognition" (cf. note 1).

<sup>7</sup> Ewa Michna, "The Silesian Struggle for Recognition" (cf. note 1).



time; (2) Although it is not a fault of Michna, her study does not refer to the fourth monitoring cycle which was done in October 2020. Thus, we have to describe the Silesian problem by adding new information from the fourth monitoring cycle.

Compared with the previous studies, this article is new in two aspects as follows: (1) This article analyzes all the four FCNM monitoring cycles conducted so far, which have not been fully referred to in the previous studies; (2) This study includes the newest monitoring cycle. Therefore, this study provides readers with the latest change in the discussions on the Silesian problem.

## 2. Assumptions

### 2.1. Meaning and Shortcomings of FCNM

FCNM is one of the international treaties of CoE, which aims to protect the cultural, linguistic, and religious rights of national minorities. It was established in CoE in 1995 and came into force in 1998. Even before FCNM, the international rules for protecting minorities existed. For example, the League of Nations prepared the framework for national minorities in the interwar period (Preece 1997: 81–84)<sup>8</sup> However, the binding force of the interwar framework was so strong that it provoked conflicts between concerned states. The minority protection of the League of Nations was based on the principle of so-called “self-determination.” This principle, however, was not at all universal because only the new states established after World War I, such as Poland, Czechoslovakia, Romania, and the Kingdom of Serbs, Croats and Slovenes (Yugoslavia), were obliged to protect minorities.<sup>9</sup> Poland also signed the so-called Little Treaty of Versailles in 1919.<sup>10</sup> Poland had to take some specific measures for the domestic minorities because Article 14 of the Little Treaty determines that each member state of the Council of the League of Nations had “the right to bring to the attention of the Council any infraction, or any danger of infraction,” which means the minority issues in Poland was under the supervision of the League of Nations.<sup>11</sup> Other states mentioned

---

<sup>8</sup> Jeniffer Jackson Preece, “Minority rights in Europe: from Westphalia to Helsinki”, *Review of International Studies* 23 (1997), pp. 75–92.

<sup>9</sup> The exception was Greece. Although Greece did not take part in the World War I, the state also signed the treaty on minority with the Principal Allied and Associated Powers in 1920.

<sup>10</sup> The Little Treaty of Versailles is a commonly used name because the treaty was signed at the same day as the Treaty of Versailles (June 28, 1919). Its official name is “Treaty between the Principal Allied and Associated Powers and Poland, signed at Versailles on June 28, 1919.” The full text of the Little Treaty is available on the website of the Office of Historian, US Department of State. <<https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1919Parisv13/ch29>> Accessed: 2021/12/23.

<sup>11</sup> Poland strongly opposed the signature of the Little Treaty because it was clear that newborn Poland

above (Czechoslovakia, Romania, Yugoslavia) also had similar obligations as Poland, while the states that made up the minority protection system in the interwar period and even Germany had no such obligations. These inequalities among concerned states made the League of Nations' minority protection system dysfunctional.

Because of the failure of the League of Nations, the international arena during the Cold War was not active in protecting national minorities. However, some important treaties have been signed, such as the Convention for the Protection of Human Rights and Fundamental Freedoms (the so-called European Convention on Human Rights) in 1950 (CoE), the International Covenant on Civil and Political Rights in 1966 (the United Nations), and Helsinki Final Act in 1975 (the Conference on Security and Co-operation in Europe). These previous attempts are relatively passive though because they only mention the principle of the non-interference of states with minorities. Only at the end of the Cold War did minority issues enter the discussion worldwide (Preece 1997: 88).<sup>12</sup> FCNM is one result of such discussions. After the end of the Cold War, Europe finally established a framework dedicated to minority issues. As of 2021, most member states of CoE, including Poland (39 out of 47), have signed and ratified FCNM.<sup>13</sup> Poland signed the convention on February 1, 1995, and ratified it on December 20, 2000.

FCNM consists of the main text and Explanatory Report. English and French texts are regarded as authentic. In this study, I referred to the English version. The role of FCNM in present-day Europe is tremendously large. FCNM demands the active protection of minorities from states to prevent assimilation. Kristin Henrard highly evaluates FCNM because it was “indeed the first instrument entirely devoted to minorities and their rights” (Henrard 2008: 95).<sup>14</sup>

---

would have a lot of minority population in its territory. However, the political power balance at the time did not allow Poland to deny the treaty made up by the victorious states of World War I. Carole Fink points out that the Little Treaty itself was “dictated” to Poland. See: Carole Fink, “The Minority Question at the Paris Peace Conference: The Polish Minority Treaty, June 28, 1919,” in Manfred F. Boemke, Gerald D. Feldman, Elisabeth Glaser eds., *The Treaty of Versailles: A Reassessment after 75 Years*.(Cambridge: Cambridge University Press, 1998), pp. 249–274.

<sup>12</sup> Preece, “Minority rights in Europe” (cf. note 8).

<sup>13</sup> See the official leaflet of FCNM: *Framework Convention for the Protection of National Minorities* <<https://rm.coe.int/fcnm-leaflet-2020-en-final/1680a0bacc>> Accessed: 2021/10/18.

<sup>14</sup> Kristin Henrard, “The Added Value of the Framework Convention for the Protection of National Minorities; the Two Pillars of an Adequate System of Minority Protection Revisited,” in Verstichel, Annelies et al. eds., *The Framework Convention for the Protection of National Minorities: A Useful Pan- European Instrument?* (Antwerp: Intersentia, 2008), pp. 91–118.

However, in general, CoE treaties are less legally binding than the regulations of the European Union (Vacca 2011: 348)<sup>15</sup> FCNM cannot forcibly demand the protection of minorities from states. On the contrary, the regulations of the FCNM only request cooperation from states. For example, Article 14(2) of FCNM states the following:

[...], the Parties shall endeavour to ensure, as far as possible and within the framework of their education systems, that persons belonging to those minorities have adequate opportunities for being taught the minority language or for receiving instruction in this language (emphasis is the author's).

As Article 14(2) shows, FCNM requires states to protect minority rights “as far as possible” within the domestic laws of each state. Even the signature on FCNM is not mandatory for a CoE member state.<sup>16</sup> Thus, its binding force is politically changeable. Therefore, some scholars such as Rianne Letschert consider FCNM a political system, not juridical (Letschert 2005: 19).<sup>17</sup> The weak binding force of FCNM conversely means that a ratified state has a large amount of discretion, particularly in “nominating” minorities. FCNM itself does not define the term “minority,” although it is the most important concept of the framework. Note that a universal definition of minority is almost impossible because the criteria of the definition are variable according to the social, historical, and political contexts in a given state. Point 12 of the FCNM’s Explanatory Report recognizes the difficulty of defining “minority.” It states that “it is impossible to arrive at a definition capable of mustering general support of all Council of Europe member States.” As such, FCNM “decided to adopt a pragmatic approach.” In this context, the word “pragmatic” means that a nomination of the minority is up to a state. Therefore, there is much room for interpretation in this “pragmatic” approach. A ratified state cannot only choose a certain group as an “officially recognized” minority but also exclude them on its own initiative.

## 2.2. FCNM Monitoring Cycle System

Nevertheless, ratified states cannot treat minority problems in their territory in the way

---

<sup>15</sup> Alessia Vacca, “The Council of Europe and the European Union Frameworks in the Legal Protection of Minority Languages: Unity or Diversity?”, *ESUKA-JEFUL* 2-1 (2011), pp. 347–366.

<sup>16</sup> As of 2021, four states have signed, but not ratified, FCNM (Belgium, Iceland, Greece, and Luxembourg), and four states have neither signed nor ratified (Andorra, Monaco, France, and Turkey).

<sup>17</sup> Rianne Letschert. *The Impact of Minority Rights Mechanisms* (Hague: T.M.C. Asser Press, 2005).

they want to. Section IV of FCNM (Articles 24–26) determines the process to monitor whether a ratified state takes effective activities for minority protection, especially in the field of legislation. Although Article 25 of FCNM determines the frequency of monitoring as “on a periodic basis,” a monitoring process is usually conducted once every five years. Summarizing the FCNM website, the entire process of a monitoring cycle consists of four documents:<sup>18</sup>

(1) State reports by the ratified state.

This is the first step of the monitoring cycle. The ratified state summarizes its attempts for minority protection and submits reports to CoE.

(2) Opinions by the Advisory Committee of FCNM (ACFC).

ACFC regularly visits ratified states and holds meetings with stakeholders such as government officials, parliamentarians, representatives of minorities, and NGOs. ACFC issues opinions based on these regular visits and the state report submitted.

(3) State comments by the ratified state.

After the ACFC opinion, the ratified state submits replies to the opinion. The replies are called “comments.” If the ratified state does not agree with some parts of the opinion, the state sometimes argues against ACFC.

(4) Resolutions by ACFC

Summarizing these steps, ACFC prepares the resolution of the monitoring cycle.

Among these documents, resolutions are highly formal in nature and do not provide a substantive discussion. In this study, the analysis concentrates on three documents: the state report, ACFC opinion, and state comment.

The monitoring documents are usually published in English, but sometimes in French and the official language of the ratified state (Polish in the case of Poland). In some cases, however, documents written in languages other than English are not accessible on the official FCNM website. For example, the state report of Poland in the third monitoring cycle is available only in English. For this reason, I used the English version in this study.

The ACFC opinions, however, should not be regarded as neutral because, in most cases, ACFC clearly shows its stance on minority issues. In the case of the Silesian problem, ACFC is almost always favorable for Silesians and criticizes the Polish state for its negative attitude toward them. This fact does not mean that ACFC opinions are just a reflection of

---

<sup>18</sup> See the official website of FCNM: *Monitoring the implementation of the Framework Convention for the Protection of National Minorities* <<https://www.coe.int/en/web/minorities/monitoring>> Accessed: 2021/10/19.

arguments of Silesian activists. As mentioned above, ACFC collects various information from the concerned organizations or individuals including the government authorities or NGOs. Therefore, ACFC opinions are original results of analysis and reconstruction of information collected by ACFC.

### 2.3. Basic Information on the Silesian Problem in Poland

As mentioned in the Introduction, a large disagreement exists between CoE and Poland on the Silesian problem, despite the 20-year history of the discussion. The disagreement between the two political bodies can be found in the official documents of the monitoring cycles of FCNM. Before analyzing these documents, it is useful to summarize here the background of the Silesian problem.

With the democratization of Eastern Europe in the 1990s, the discussion on the status of minorities started to appear in the European public sphere. The discussion on the ethnicity of Silesians is also one of these minority topics (Michna 2020: 154).<sup>19</sup> At the same time, the discussion on the linguistic status of the Silesian vernacular came out, which argued that “Silesian dialect” is not appropriate because the wording is depreciating compared with “language.” For this reason, some Silesian scholars or activists prefer to use the wording such as Silesian language (*język śląski*), Silesian speech (*mowa śląska*) or Silesian ethnolect (*etnolekt śląski*) (Siuciak 2012: 33).<sup>20</sup> The wording “Silesian language” is not just a slogan, but based on practical activities, especially the attempt of standardizing the Silesian vernacular such as the foundation of the publishing house “Narodowa Oficyna Śląska” in 2006, the establishment of the Silesian Wikipedia<sup>21</sup> or the foundation of the organization “Pro Loquela Silesiana” in 2008 (Kamusella and Rocznik 2011: 292).<sup>22</sup> However, the attempt of raising the status of the Silesian vernacular has been a still controversial topic because the vernacular has been traditionally treated as a dialect in Polish dialectology. This problem is not a linguistic issue but is connected with the political movements, which demand the official recognition of

---

<sup>19</sup> Ewa Michna, “The Silesian Struggle for Recognition” (cf. note 1).

<sup>20</sup> Mirosława Siuciak, “Czy w najbliższym czasie powstanie język śląski?”, *Poznańskie Studia Polonistyczne. Seria Językoznawcza* 19/39 (2012), pp. 31–44.

<sup>21</sup> Silesian Wikipedia is one of the attempts of Silesian linguistic standardization. Therefore, all the articles are written according to the Silesian orthographic rules. As of January 12, 2022, there exist 54,778 articles in the Silesian Wikipedia. See: <[https://szl.wikipedia.org/wiki/Przodni%C5%8F\\_zajta](https://szl.wikipedia.org/wiki/Przodni%C5%8F_zajta)> (Accessed: 2022/01/12).

<sup>22</sup> Tomasz Kamusella and Andrzej Rocznik, “Sztandaryzacyjo ślōnski godki / Standaryzacja języka śląskiego,” in И. В. Абисогомян ed., *Лингвокультурное пространство современной Европы через призму малых и больших языков*. (Tartu: Tartu University Press, 2011), pp. 288–294.

Silesians as a characteristic human group in Poland. Table 1 summarizes these political movements or remarkable events such as national censuses, Polish domestic law specializing in minority issues. These events and terms are often referred to in the documents of the monitoring cycles of FCNM.

**Table 1: Chronological Table Regarding the Silesian Problem**

1990	<p><b>Foundation of the “Silesian Autonomy Movement”</b></p> <p>The political organization “Silesian Autonomy Movement” was founded to gain more powerful local governance in the region.</p>
1998	<p><b>Lawsuit of the Union of the Population of Silesian Nationality</b></p> <p>The organization called the “Union of the Population of Silesian Nationality” sued Poland for the violation of citizens’ freedom of association. The European Court of Human Rights (ECHR) accepted an application submitted by the Union and its agent (No. 44158/98).<sup>23</sup></p>
2001	<p><b>First Judgment of ECHR on the Union’s Lawsuit</b></p> <p>On December 20, 2001, the Fourth Section of the ECHR judged that no violation was found. That is, ECHR supported the state’s opinion.</p>
2002	<p><b>Union’s Lawsuit Goes to the Grand Chamber of ECHR</b></p> <p>On March 20, 2002, Union members and their agent requested the case be referred to the Grand Chamber of ECHR.</p>
2002	<p><b>National Census in Poland</b></p> <p>The national census in 2002 was the first national census after the fall of the Communist Regime in Poland. The results for “nationality” indicate that Silesians were numerically the second-largest group in Poland.<sup>24</sup></p>
2004	<p><b>Final Judgment of ECHR on the Union’s Lawsuit</b></p> <p>The Grand Chamber of ECHR supported the first judgment, meaning no violation by the Polish state was found. This judgment is final on the case.</p>

<sup>23</sup> All information on the lawsuit between the Union and Poland in ECHR is based on the part “PROCEDURE” in the ECHR report: ECHR. *Reports of Judgements and Decisions 2004-I*. (Köln, Berlin, München: Carl Heymanns Verlag, 2004), pp. 219–272.

<sup>24</sup> According to the national census in 2002, the numbers of nationality (*narodowość* in Polish) are as follows: Polish: 36,983,700 (96.74%), Silesian: 173,200 (0.45%), German: 152,900 (0.40%), Ukrainian: 31,000 (0.08%), Lemko: 5,900 (0.02%), Kashubian: 5,100 (0.01%). See: Główny Urząd Statystyczny. *Raport z wyników. Narodowy Spis Powszechny Ludności i Mieszkań 2002*. (Warszawa: Główny Urząd Statystyczny, 2003), pp. 39–40.

2005	<p><b>Establishment of the Minority Act in Poland</b></p> <p>The Polish parliament established the Minority Act (Dz. U. 2005 nr 17 poz. 141), which lists the names of national and ethnic minorities.<sup>25</sup> The Act also recognizes Kashubian as an independent language apart from Polish (a regional language). The name of Silesians and their speech are not been mentioned in the Act even though Silesians are the largest minority group in the 2002 census.</p>
2011	<p><b>National Census in Poland</b></p> <p>In the 2011 census, respondents were asked their national or ethnic belonging (identification) and languages used at home. As a result, the number for Silesian “identification” was 817,000, meaning that 2.12% of the whole population declared themselves Silesians.<sup>26</sup> Furthermore, 509,000 people indicated speaking the “Silesian language” at home. The 2011 census revealed that Silesians are the second-largest group in Poland in terms of both identity and language.</p>
2011	<p><b>Silesian Autonomy Movement Gained Seats in the Local Assembly</b></p> <p>The Silesian Autonomy Movement won seats in the Silesian voivodeship Assembly and became part of the regional government.<sup>27</sup></p>
2017	<p><b>Lawsuit of the Association of the People of Silesian Nationality</b></p> <p>The “Association of the People of Silesian Nationality” sued Poland for violating the European Convention on Human Rights, specifically Articles 9 (the freedom of thought, conscience, and religion), 11 (the freedom of expression), and 14 (the prohibition of discrimination).<sup>28</sup> In August 2017, ECHR accepted an application submitted by the Association and its agent.<sup>29</sup></p>

<sup>25</sup> Article 2 of the Minority Act provides two categories of minorities: national and ethnic. The following nationalities belong to the former category: Belarusian, Czech, Lithuanian, German, Armenian, Russian, Slovakian, Ukrainian, and Jewish. The minorities without kin-state belong to the latter category: Karaim, Lemko, Roma, and Tatar.

<sup>26</sup> According to the national census in 2011, the numbers of identification (*identyfikacja* in Polish) are as follows: Polish: 36,999,000 (96.07%), Silesian: 817,000 (2.12%), Kashubian: 229,000 (0.59%), German: 126,000 (0.32%), Ukrainian: 49,000 (0.12%), Lemko: 10,000 (0.03%). See: Główny Urząd Statystyczny. *Raport z wyników. Narodowy Spis Powszechny Ludności i Mieszkań 2011*. (Warszawa: Główny Urząd Statystyczny, 2012), p. 106.

<sup>27</sup> According to Roman Szul, the Autonomy Movement initially had little support from local citizens because their anti-Polish attitude was too strong. However, the organization became more moderate and started to obtain broader support from the local people. See: Roman Szul, “Poland’s Language Regime Governing Kashubian and Silesian,” in Cardinal, Linda and Selma K. Sonntag eds., *State Traditions and Language Regimes*. (Montreal & Kingston, London, Ithaca: McGill-Queen’s

2019	<p><b>Silesian Autonomy Movement Joined the Civic Coalition</b></p> <p>In August 2019, the Silesian Autonomy Movement joined the Civic Coalition (<i>Koalicja Obywatelska</i> in Polish). The coalition is an electoral alliance of large opposition parties such as the Civic Platform (<i>Platforma Obywatelska</i>), the Modern (<i>Nowoczesna</i>), and the Greens (<i>Partia Zieloni</i>).</p>
------	---

As Table 2 shows, the existence of Silesians cannot be ignored in present-day Poland. Silesians are not only numerically the largest group, but also engage in political activities on a national scale. The Silesian problem originated in the 1990s as Michna (2020: 145) indicates.<sup>30</sup> Thus, while the problem is relatively new, it is the most serious and outstanding minority issue in Poland. The impact of the issue is not limited to the Silesian region but felt nationwide. Although there are several minority groups other than Silesians in Poland, these groups seem to be satisfied with the status they are enjoying and do not oppose the state.

Poland's attitude toward the Silesian problem has been unchanged for 20 years regardless of the dominant political party. Since the ratification of FCNM in 2000, the political regime has changed three times in Poland between the Democratic Left Alliance (*Sojusz Lewicy Demokratycznej*), the Law and Justice (*Prawo i Sprawiedliwość*) and the Civic Platform (*Platforma Obywatelska*). Although these parties largely differ in their policies and ideologies, the arguments of the state have been consistently unfavorable toward the independence of Silesians, whatever form it takes. Among Polish politicians, especially

---

University Press, 2015), p. 91.

<sup>28</sup> The Association was founded in 2011. After its foundation, the Association sent an application to the Polish official register. The application was finally accepted, but the prosecutors' office made a cassation appeal claiming it should be reconsidered. In April 2014, the Supreme Court made the judgment that it is impossible to register an organization with the name "Silesian nationality" because such a nationality does not exist. In August 2014, the Opole District Court decided to delete the registration of the Association. See: (1) Ewa Michna, "Narodowy Spis Powszechny Ludności i Mieszkań w 2011 r. i jego wykorzystanie w polityce tożsamości i walce o uznanie. Casus Ślązaków", *Studia Migracyjne – Przegląd Polonijny* 2-148 (2013), pp. 155–158; (2) An online article of *Wprost*: "Sąd usunął stowarzyszenie Ślązaków z KRS. "Będziemy walczyć." <<https://auto.wprost.pl/462811/sad-usunal-stowarzyszenie-slazakow-z-krs-bedziemy-walczyc.html>> Accessed: 2021/10/19.

<sup>29</sup> The application documents relating to the lawsuit are open on the top page of the Association's website: "Skarga SONŚ przyjęta do rozpatrzenia w Strasburgu." <<http://slonzoki.org/>> Accessed: 2021/10/19.

<sup>30</sup> Michna, "The Silesian Struggle" (cf. note 1)



Jarosław Kaczyński in particular had a negative view of the Silesian problem. In 2011, Kaczyński, who was the leader of the Law and Justice, the largest opposition party at that time, mentioned that the Silesian Autonomy Movement is a “hidden German option.”<sup>31</sup> This comment is certainly slanderous because Kaczyński showed no evidence of the view. More than anything, the Silesian Autonomy Movement is a legal political party.

Kaczyński’s abovementioned argument against Silesians, however, cannot be treated as an extreme exception. For example, the Polish Supreme Court issued a news release in 2013 on the Silesian problem as follows.<sup>32</sup>

Demand for gaining autonomy and feeling the full authority of the “Silesian nationality” in the Silesian region [...] should be assessed as a demand for weakening the unity and integrality of the Polish state, which is contradictory to the regulations derived from Article 3 of the Constitution of Poland (translation and emphasis are the author’s).

Therefore, it is natural that the Silesian problem is repeatedly mentioned in the monitoring cycles of FCNM. FCNM aims to urge effective activities to create “appropriate conditions enabling” minorities “to express, preserve, and develop this identity” (FCNM: Preamble). Conversely, Polish authorities regard the expression of “Silesian nationality” as an attempt to weaken “the unity and integrality of the Polish state,” as stated in the abovementioned news release.

### **3. Analysis of the FCNM Monitoring Cycles**

#### **3.1. Chronological Table Regarding FCNM and Poland**

In this section, I analyze the monitoring cycles of FCNM regarding Poland. First, I summarize a chronological table from the signature of Poland to FCNM to the end of the fourth monitoring cycle.

---

<sup>31</sup> See Kaczyński’s comment on the Silesian Autonomy Movement: “Kaczyński: Zakamuflowaną opcją niemiecką jest śląskość w wydaniu RAŚ.” <<https://polskatimes.pl/kaczynski-zakamuflowana-opcja-niemiecka-jest-slaskosc-w-wydaniu-ras/ar/389276>> (Accessed: 2022/01/12)

<sup>32</sup> The news release quoted here is freely available on the Internet: *Komunikat prasowy dotyczący sprawy III SK 10/13*. <[https://www.sn.pl/aktualnosci/SitePages/Komunikaty\\_o\\_sprawach.aspx?ItemSID=21-271e0911-7542-42c1-ba34-d1e945caefb2&ListName=Komunikaty\\_o\\_sprawach&rok=2013](https://www.sn.pl/aktualnosci/SitePages/Komunikaty_o_sprawach.aspx?ItemSID=21-271e0911-7542-42c1-ba34-d1e945caefb2&ListName=Komunikaty_o_sprawach&rok=2013)> Accessed: 2021/10/16.

**Table 2: Chronological Table Regarding FCNM and Poland**

1995/02/01	Poland signed FCNM	
2000/12/20	Poland ratified FCNM	
2001/04/01	FCNM came into effect in Poland	
2002/07/10	First state report	First Monitoring Cycle
2003/11/17	First ACFC opinion	
2004/05/19	First state comment	
2004/09/30	First ACFC resolution	
2007/11/08	Second state report	Second Monitoring Cycle
2009/03/08	Second ACFC opinion	
2009/12/07	Second state comment	
2012/11/28	Second ACFC resolution	Third Monitoring Cycle
2012/12/13	Third state report	
2013/11/28	Third ACFC opinion	
2014/05/21	Third state comment	
2015/03/04	Third ACFC resolution	Fourth Monitoring Cycle
2019/04/09	Fourth state report	
2019/11/06	Fourth ACFC opinion	
2020/04/06	Fourth state comment	
2020/10/21	Fourth ACFC resolution	

### 3.2. Monitoring Cycles from first to fourth

In this section, I analyze the FCNM monitoring cycles regarding Poland. All the CoE documents regarding the monitoring cycles of Poland are available on the FCNM website.<sup>33</sup>

#### 3.2.1. First Monitoring Cycle

The first monitoring cycle occurred between July 2002 and September 2004. During the first monitoring cycle, the lawsuit between the Union of the Population of Silesian Nationality and Poland was yet to be considered in the Grand Chamber of ECHR (see Table 1 in 2.4). Naturally, this case was mentioned in the first monitoring cycle. In the first state report (ACFC 2002: 6),<sup>34</sup> Poland emphasizes that the fourth section of ECHR judged that the rejection of registration of the Union is not a violation of the freedom of association.

<sup>33</sup> See the official website of FCNM: *Country-specific monitoring. Poland*. <<https://www.coe.int/en/web/minorities/poland>> Accessed: 2021/10/18.

<sup>34</sup> ACFC. *Report Submitted by Poland Pursuant to Article 25, Paragraph 1 of the Framework Convention for the Protection of National Minorities (ACFC/SR(2002)2)*.

In contrast, point 28 of the first opinion of ACFC (ACFC 2004)<sup>35</sup> mentions the number of Silesians recorded in the first national census in 2002, urging Poland “to continue their dialogue with the Silesians.” In point 58, ACFC also says that the ECHR judgment considers the freedom of association, not whether or not the “Silesian nationality” exists.

Poland, in point 28 of the first state comment (ACFC 2004),<sup>36</sup> responded to ACFC that Silesians are one of the regional groups in Poland, but not an ethnically independent group. Poland added that ACFC does not have the authority to ask whether Silesian nationality exists or not, mentioning that FCNM does not define the concept of “minority.” What Poland argues here in point 28 is right. As shown in Section 2.2, FCNM is just a principle of the protection of minorities. The nomination of minorities, that is, which group should be the subject of protection, is up to the concerned state. Nevertheless, Poland’s argument was not persuasive because the state criticized Silesians in point 28 of the first state comment:

The main reason for such large self-identification of the part of the inhabitants of Silesia as belonging to a different nation is the frustration resulting from the poor economic situation in which this region has found itself (emphasis is the author’s).

Both the tone and content of this part are very aggressive. Poland assumed the Silesian activists are based on “the frustration resulting from the poor economic situation” without providing evidence thereof. This part clearly shows that Poland originally had a negative attitude toward the Silesian problem.

Comparing the later monitoring cycles, however, the proportion of discussions on the Silesian problem in the first monitoring cycle was relatively small. The first opinion of ACFC consists of 133 points in total, of which only two points (point 28 and 58) mention the status of Silesians. Clearly, the central topic of the discussion was the existence of “Silesian nationality.” The linguistic issues in Silesia, in contrast, did not appear in the first monitoring cycle.

### **3.2.2. Second Monitoring Cycle**

The second monitoring cycle took place between November 2007 and November 2012. The second state report (ACFC 2007)<sup>37</sup> does not mention the Silesian problem. Considering

---

<sup>35</sup> ACFC. *Opinion on Poland* (ACFC/INF/OP/I(2004)005).

<sup>36</sup> ACFC. *Comments of the Government of Poland on the Opinion of the Advisory Committee on the Implementation of the Framework Convention for the Protection of National Minorities in Poland* (GVT/COM/INF/OP/I(2004)005).

<sup>37</sup> ACFC. *Second Report Submitted by Poland Pursuant to Article 25, Paragraph 1 of the Framework*

the lawsuit in ECHR and discussions in the first cycle, Poland must have been aware of the Silesian problem. Therefore, silence indicates that Poland intentionally ignored the topic of Silesia.

In the second opinion of ACFC (ACFC 2009),<sup>38</sup> ACFC mentions the Silesian problem in nine of the 230 points (point 10, 29, 32, 35, 36, 37, 38, 188, and 226). ACFC is repeatedly concerned that Poland does not take appropriate actions to resolve the Silesian problem in point 37 and 38. Comparing the first ACFC opinion (2004), two noticeable changes are evident in the second opinion of ACFC (2007).

First, in the second opinion, ACFC starts to mention democratic procedures regarding minorities. Some members of the Lower House of Poland (*Sejm*) were elected from minority communities in the 2007 election: German, Ukrainian, and Belarusian (point 188). In point 188, ACFC states that “a number of members of the *Sejm* declare themselves representatives of the Silesian minority.” Here, ACFC is trying to provide positive reasons for the official recognition of Silesians from the viewpoint of the democratic system (number of representatives in the parliament). Second, ACFC starts to mention the linguistic issue, arguing that “a substantial number of persons” are “speaking the Silesian language at home” (point 226). ACFC is aware that some parliament members are trying to amend the Minority Act for the legal recognition of the “Silesian language” (point 32). This point is also related to the abovementioned democratic procedure.

Poland, in the second state comment (ACFC 2009),<sup>39</sup> argues against the opinion of ACFC, stating that Silesians do not satisfy the conditions found in the Minority Act (point 36) and emphasizing that Poland is taking various actions to preserve Silesian regional culture, history, folklore, etc. (point 38). Poland did not respond to the linguistic issue in the second state comment.

Noteworthy is that the expression “Silesian language” appeared for the first time in the second ACFC opinion. Sadakane mentions that Silesian linguistic “independence” started to be connected to Silesian ethnic or national “independence” in the second monitoring cycle (Sadakane 2020: 14)<sup>40</sup> The linguistic issue (Silesian language vs. Silesian dialect) is more often discussed in the next monitoring cycle.

---

*Convention for the Protection of National Minorities* (ACFC/SR/II(2007)006).

<sup>38</sup> ACFC. *Second Opinion on Poland* (ACFC/OP/II(2009)002).

<sup>39</sup> ACFC. *Comments of the Government of Poland on the Second Opinion of the Advisory Committee on the Implementation of the Framework Convention for the Protection of National Minorities by Poland* (GVT/COM/II(2009)003).

<sup>40</sup> Kazuhiro Sadakane, “[The Silesian Problem]” (cf. note 2).

### 3.2.3. Third Monitoring Cycle

The third monitoring cycle took place between December 2012 and March 2015. The third state report (ACFC 2012),<sup>41</sup> like the previous one (2007), did not mention the Silesian problem.

However, the third opinion of ACFC (2013)<sup>42</sup> remarks on the problem in nine of the 213 points (point 24, 25, 27, 28, 29, 35, 60, 178, and 206). ACFC, showing the number of Silesians in the national census in 2011 (847,000), emphasizes the necessity of the “protection of the Silesian identity and language” (point 24). Remarkably, ACFC mentions the “Silesian language” more often than in the second cycle. As mentioned, the third ACFC opinion has nine points on the Silesian problem. Of these nine points, seven focus on the linguistic issue in some form (point 24, 25, 27, 28, 29, 178, 206). In addition, ACFC’s comments on the linguistic issue in Silesia are more in-depth than before. For example, ACFC argues that the Polish authorities “should assist standardization efforts in close cooperation with the language group” (point 25). The “language group” in this context means the speakers of the Silesian local language. In addition, points 28 and 178 of the third opinion mention the status of the “regional language,” which is defined in Article 19 of the Minority Act<sup>43</sup> referring to the attempts to reform the Act.

In the third state comment (ACFC 2014),<sup>44</sup> Poland mentions the Silesian problem in four of the 212 points (point 24, 25, 29, and 206). All four points refer to linguistic issues in

---

<sup>41</sup> ACFC. *Third Report Submitted by Poland Pursuant to Article 25, Paragraph 2 of the Framework Convention for the Protection of National Minorities* (ACFC/SR/III(2012)005).

<sup>42</sup> ACFC. *Third Opinion on Poland* (ACFC/OP/III(2013)004).

<sup>43</sup> Article 19 of the Minority Act defines the concept of “regional language” based on the European Charter for Regional and Minority Languages. According to the regulation of the Act, only the Kashubian language is appointed as a “regional language” in Poland. The concept, however, is accepted in the Minority Act for legislating the Kashubian language because Kashubians, unlike other minorities such as Ukrainians, Germans, or Lemko, have retained a relatively close relationship with the majority, Poles. See: Kazuhiro Sadakane, “The Intentional Distinction between a Regional and a Minority Language in Poland’s Minority Act”, *Die Welt der Slaven* 65 (2020), p. 234.

In addition, Roman Szul states, “[...] considering Kashubian a minority language would mean that Kashubians would be regarded as a national minority and not ethnic Poles. This was not acceptable to either the Polish authorities or most Kashubians.” Quoted from: Roman Szul, “Poland’s Language Regime,” (cf. note 27), p. 89.

<sup>44</sup> ACFC. *Comments of the Government of Poland on the Third Opinion of the Advisory Committee on the Implementation of the Framework Convention for the Protection of National Minorities by Poland* (GVT/COM/III(2014)002).

some form. Denying point 25 of the third opinion of ACFC, Poland states the following (point 25):

[...], support for actions aimed at imposed standardization of the Silesian dialect would be an artificial and unjustified process, since it could threaten the richness and diversity of the Silesian local dialects, [...] it should be noted that the issues relating to the rights of users of local dialects and dialects of Polish are not included within the scope of the Framework Convention for the Protection of National Minorities (emphasis is the author's).

Point 25 of the third state comment, like point 28 of the first state comment (2004), emphasizes that ACFC is not in the position to make comments on the Silesian problem. In addition, point 29 of the third state comment states that the Polish authorities are “open to dialogue with the users of the Silesian dialect of Polish” (emphasis is the author's).

In the third monitoring cycle, Poland consistently uses the expression “Silesian dialect.” Here, the intention of the state is obvious. If the Silesian local vernacular were regarded as a “language” apart from Polish, it would also be possible to regard the independence of its users (Silesians) apart from Poles (Sadakane 2020: 14).<sup>45</sup> Therefore, Poland cannot accept the wording “Silesian language.” The linguistic issue, more specifically, the recognition of the linguistic independence of the Silesian local speech (language vs. dialect), is discussed more often in the third monitoring cycle. The terminological hierarchy<sup>46</sup> can be clearly observed in the discussion process.

Silesian local vernacular is generally called “Silesian dialect.” Its independence has been discussed often since the 1990s<sup>47</sup>. Thus, the distinction of “language” and “dialect” seems old. The discussions in the third monitoring cycle, however, differ from the discussion in the past because they are related to the legal status guaranteed by the Minority Act. After the establishment of the Act in 2005, a growing number of supporters of the argument of “Silesian

---

<sup>45</sup> Sadakane, “[The Silesian Problem]” (cf. note 2)

<sup>46</sup> As Einar Haugen describes, two terms (language and dialect) are neither equal nor changeable because “language” is always applied as “superordinate” term of “dialect,” but “dialect” is always “subordinate” of language. See: Einar Haugen, “Dialect, Language, Nation”, *American Anthropologist* 68 (1955), p. 923.

<sup>47</sup> According to Mirosława Siuciak, the concept of “language” became an ideology in 1990s, in the attempts of raising the prestige of Silesians as an ethnic group. See: Mirosława Siuciak, “Czy w najbliższym czasie powstanie język śląski?” (cf. note 20), p. 33.

as a regional language” are evident. This argument is based on the treatment of the Kashubian language in the Minority Act. Article 19 of the Act states that Kashubian is a “regional language” in Poland, but does not treat Kashubians as an “ethnic minority.” However, the Minority Act treats Kashubians in the same way as other officially recognized minorities such as Germans, Ukrainians, and Lemkos in the formulating of the “community with a language as referred to in Article 19.” Therefore, a given human group can be treated as a *de facto* minority when their language is officially recognized. Kashubians are not officially recognized as a minority; however, they are treated like a minority due to their regional language (Kashubian). In other words, a human group that has its own “regional language,” can be recognized as an independent human group in the framework of the Minority Act. Although the concept “regional language” itself was made just for Kashubians (Sadakane 2020: 234),<sup>48</sup> the concept has its influence on the discussions of the Silesian problem. Through the concept of “regional language,” the Silesian independence can be argued without the notion of ethnicity, such as Kashubians that are not an ethnically independent group are regarded as a *de facto* minority.

### 3.2.4. Fourth Monitoring Cycle

The fourth monitoring cycle took place between April 2019 and October 2020. The fourth state report (ACFC 2019)<sup>49</sup> does not mention the Silesian problem. This is not surprising because Poland did not mention it in previous state reports (2007 and 2012). Poland does not address the Silesian problem unless it is indicated by ACFC.

The fourth opinion of ACFC (ACFC 2019)<sup>50</sup> comments on the Silesian problem in eight of the 191 points (point 5, 20, 21, 22, 27, 29, 31, and 165) and also in “Further Recommendations.” In points 5 and 20, ACFC mentions the four unsuccessful reform bills of the Minority Act. These attempts are presented in chronological order in Table 3.

**Table 3: Attempts of Reform Bills of the Minority Act**

2014	The Lower House did not accept a proposal from citizens (citizens’ project).
2015	President Andrzej Duda vetoed a reform bill from parliament.
2016	The Lower House did not accept the citizens’ project.
2018	The Lower House did not accept the citizens’ project.

<sup>48</sup> Sadakane “The Intentional Distinction” (cf. note 43).

<sup>49</sup> ACFC. *Fourth Report submitted by Poland Pursuant to Article 25, Paragraph 2 of the Framework Convention for the Protection of National Minorities* (ACFC/SR/IV(2019)001).

<sup>50</sup> ACFC. *Fourth Opinion on Poland* (ACFC/OP/IV(2019)003).

The citizens' project (*Obywatelski projekt* in Polish) is the name of an option for legal reform based on the Act on the Exercise of Legislative Initiative by Citizens.<sup>51</sup> In this procedure, a reform bill can be proposed by a group of more than 100,000 citizens, not by parliament members. In the 2014 and 2016 projects, Silesian activists passed the proposal of a reform bill of the Minority Act to the speaker of the Lower House. The official documents of the citizens' projects in 2014 and 2016 were officially published on the Internet.<sup>52</sup> The citizens' project in 2018 is also accessible on the web,<sup>53</sup> although its authority cannot be guaranteed. All the citizens' projects (2014, 2016, and 2018) proposed that the status of Silesians be as an officially recognized minority. Regarding parliament's action, the reform bill of the Minority Act was proposed in 2015. According to information from the Ministry of Interior and Administration, the proposed bill expanded the use of minority languages, especially in administrative organs.<sup>54</sup> This bill, however, was vetoed by President Andrzej Duda in October 2015.<sup>55</sup> Summarizing these unsuccessful attempts, ACFC "strongly regrets that no progress has been made regarding the requests for recognition of the Silesians as an ethnic minority" in point 21 of the fourth opinion.

---

<sup>51</sup> The original name of the Act on the Exercise of Legislative Initiative by Citizens is the following: Ustawa z dnia 24 czerwca 1999 r. o wykonywaniu inicjatywy ustawodawczej przez obywateli (Dz. U. 1999 nr 62 poz. 688).

<sup>52</sup> See the Citizens' Project in 2014: *Obywatelski projekt ustawy o zmianie ustawy o mniejszościach narodowych i etnicznych oraz o języku regionalnym, a także niektórych innych ustaw* (Druk nr 2699). <<http://orka.sejm.gov.pl/Druki7ka.nsf/0/51DDA35DF112B5A2C1257D4200374317/%24File/2699.pdf>> Accessed: 2021/10/18;

See the Citizens' Project in 2016: *Obywatelski projekt ustawy o zmianie ustawy o mniejszościach narodowych i etnicznych oraz o języku regionalnym, a także niektórych innych ustaw* (Druk nr 27). <<http://orka.sejm.gov.pl/Druki8ka.nsf/0/ABF5E5114F97107FC1257F5D004546D6/%24File/27-s.pdf>> Accessed: 2021/10/18.

<sup>53</sup> See the Citizens' Project in 2018: *Projekt. Ustawa z dnia ... 2018 roku o zmianie ustawy o mniejszościach narodowych i etnicznych oraz o języku regionalnym oraz niektórych innych ustaw*. <<https://monika-rosa.pl/wp-content/uploads/2019/03/Slaski-jezyk-regionalny-usta-wa-o-zmianie-ustawy-o-mniejszos%CC%81ciach-narodowych-i-etnicznych-oraz-o-je%CC%A8zyku-regionalnym.pdf>> Accessed: 2021/10/18.

<sup>54</sup> See the official website of the Ministry of Interior and Administration: *Parlament przyjął nowelizację ustawy o mniejszościach narodowych i etnicznych*. <<http://mniejszosci.narodowe.ms.gov.pl/mne/komisja-wspolna/aktualnosci/9434,Parlament-przyjal-nowelizacje-ustawy-o-mniejszosciach-narodowych-i-etnicznych.html>> Accessed: 2021/10/18.

<sup>55</sup> See the official website of the President of Poland: *Prezydent zawetował trzy ustawy* (26 października 2015). <<https://www.prezydent.pl/prawo/ustawy/zawetowane/art,2,prezydent-zawetowal-trzy-ustawy.html>> Accessed: 2021/10/18.



In point 165, ACFC remarks that a legal measure for representing national minorities is not enough in the Polish electoral system, despite that some parliament members declared they belonged to a minority such as Belarusian, Ukrainian, Jewish, Kashubian, and Silesian. In the Polish electoral system, an electoral committee representing a national minority has the privilege of elections because it is exempt from the obligation to obtain at least 5% of the valid votes.<sup>56</sup> According to ACFC, this privilege does not work effectively for minorities in the current electoral system for the House of Representatives. This argument (point 165) is very short despite its importance. Therefore, I explain it in detail as follows:

1. The members of the Lower House are elected based on the party-list proportional representation system in multi-member constituencies. It means, a minority group can elect their representatives only if they are densely populated in one constituency. If not, valid votes from minority members cannot be collected for a candidate they want. Thus, the abovementioned privilege (exemption from the obligation to obtain at least 5% of the valid votes), in fact, is not a privilege at all for most minorities because they are much smaller than the majority in most constituencies.
2. Article 197 of the Electoral Code determines that the abovementioned privilege can be enjoyed by electoral committees of national minorities. It should be remembered that minorities in Poland are divided into two types in the current law, the Minority Act: (1) national minority; (2) ethnic minority. Despite the categorization, ethnic minorities are not mentioned in the Electoral Code. It means that ethnic minority groups (Karaim, Lemko, Roma and Tatar) do not enjoy the privilege in the first place. It should be remembered that the Electoral Code itself should be aware of the existence of the ethnic minorities because of two reasons: (1) The present Electoral Code was established in 2011 after the Minority Act in 2005; (2) Article 459 of the Electoral Code uses the wording of “national or ethnic minorities.”<sup>57</sup> For these two reasons, it is highly likely that the Electoral Code purposely ignores the privilege

---

<sup>56</sup> This privilege for minorities in elections is determined in Article 197 of the Electoral Code (Dz. U. 2011 nr 21 poz. 112).

<sup>57</sup> The word “ethnic minority” appears in the section 4 of Article 459 of the Electoral Code. This Article determines the possibility of the integration of multiple counties (*powiat* in Polish) into one constituency in municipal parliament elections: “The integration of counties shall not violate the social bonds connecting voters belonging to national or ethnic minorities residing in the territory of the merged counties” (translation and emphasis are the author’s).

which can be enjoyed by ethnic minorities.

In the fourth opinion, ACFC mainly mentions democratic procedures such as citizens' projects, parliament's reform bill, and Poland's electoral system. Topics such as a bill of the Minority Act or minority representatives in parliament have appeared in the second or third opinions of ACFC, but not frequently. The increase in reference to democratic procedures is a new trend in the fourth opinion. Of course, the fourth opinion of ACFC also deals with topics frequently mentioned in previous monitoring cycles, such as the number of Silesians and linguistic status in points 21, 22, 27, 29, and 31. However, the proportion of these "familiar" topics has decreased compared with previous ACFC opinions.

In the fourth state comment (ACFC 2020),<sup>58</sup> Poland mentions the Silesian problem only in three points (point 20, 22, and 29). In these points, Poland denies the possibility of the idea of Silesians as an officially recognized minority, repeating "familiar" topics such as the Silesian identity, their linguistic affiliation, legal limitation of FCNM, and the judgment of ECHR in 2004. Newer topics such as citizens' projects, reform bills, or electoral systems are not mentioned in the fourth state opinion.

#### **4. Conclusion**

Poland signed FCNM in 1995, but its ratification took place finally in 2000. As for the European Charter for Regional or Minority Languages, which is one of the most important CoE criteria along with FCNM, Poland ratified it in 2009 after the establishment of the Minority Act (2005). In general, the democratized Poland has not been actively engaged in the minority problems in its territory. However, as for the Silesian problem, we could say that Poland has taken an active interest in it, by denying the existence of the problem itself. Such attitude of Poland is evident in the official documents of monitoring cycles of FCNM.

We explored the discussions between ACFC and Poland on the Silesian problem, referring to documents of the FCNM monitoring cycles. Fundamentally, contrasting positions have not changed for 20 years. Generally, ACFC has a positive attitude toward Silesians and demands more favorable measures from Poland; however, Poland's attitude toward the Silesian problem remains unchanged. Poland rejected any ideas that promoted the independence of Silesians, whether these pertained to identity, legal status, or language. The establishment of the Minority Act in 2005 is surely an important event, but the Act also did not solve the

---

<sup>58</sup> ACFC. *Comments of the Government of Poland on the Fourth Opinion of the Advisory Committee on the implementation of the Framework Convention for the Protection of National Minorities by Poland* (GVT/COM/IV(2020)002).

problem of the status of Silesians. On the contrary, the Act made the situation more complicated by introducing the concept of “regional language.” (See. 3.2.3.).

The discussions seem to take the form of circular arguments. The analysis in this study, however, revealed that the contents of the discussions have considerably changed from the first to the fourth monitoring cycle. In the first cycle (2002–2004), discussions on the Silesian problem were not as complicated as in later cycles. The Minority Act was not established at the time of the first cycle. For better or worse, the attitude of Poland toward minorities was unclear. The situation radically changed after the establishment of the Minority Act in 2005, because ACFC started asking Poland why the largest group with the will of legal recognition is ignored. For this reason, the legal status of Silesians became the main topic in the second cycle (2007–2012). The second opinion of ACFC mentioned the Silesian problem in nine points. Comparing the fact that only two points pertained to Silesians in the first opinion of ACFC, this increase should be remarkable. In the third monitoring cycle (2012–2015), the issue of linguistic status was added to the discussion, which was derived from the ambiguous definition of “regional language” in the Minority Act. Thus, in the case of Poland, the Minority Act complicated discussions about minorities.

In the fourth monitoring cycle (2017–2020), ACFC seems to have changed the main topic in negotiations with Poland. Thus far, the main topics of the Silesian problem were people’s identity as an ethnic group, legal status, and linguistic issues. These topics also appeared in the fourth monitoring cycle. In the fourth ACFC opinion, however, the topics of democratic procedures are most frequently mentioned, such as citizens’ projects, the reform bill proposed by parliamentarians, and the electoral system, which is disadvantageous for minorities. ACFC elaborated on these issues in the fourth opinion. As seen in Section 3.2.4, Poland did not respond to these new topics in the fourth state comment.

Based on the analysis, we conclude that ACFC has changed its “strategy” in negotiations with Poland in the fourth cycle. From the first to the third cycle, ACFC attempted to change the attitude of Poland mainly through the issues of identity and legal status. In the fourth cycle, these topics (identity and legal status) appear as before. As for the linguistic identity, the “Silesian language” is still treated as an important element for the recognition of Silesians in the fourth opinion of ACFC (point 21 and 22). The most significant change is, however, is that the topics on the democratic procedures (bills of the Minority Act, the electoral system) began constituting the core of discussions on the Silesian problem.

## 民族的少数者保護枠組条約のモニタリング・サイクルから見る ポーランドのシロンスク問題

— 第1サイクルから第4サイクルまでの包括的分析 —

貞包和寛

本論文の目的は、欧州評議会の民族的少数者保護枠組条約（以下「枠組条約」）のモニタリング文書において、ポーランドのシロンスク問題がどのように議論されてきたかを明らかにすることにある。1998年に欧州評議会で発効した枠組条約は、民族的少数者の権利保護に関する各国の取り組みをフォローするために、モニタリング制度を採用している。ポーランドも2000年の条約署名以来、これまでに4度のモニタリングに応じてきた。最新の第4次モニタリングは2020年10月に終了した。過去のモニタリングにおいて最も頻繁に議論されてきた問題のひとつが、ポーランド国内のシロンスク問題である。

シロンスク地方の住民の一部は、1990年代初頭より、民族的・言語的独立性を掲げて活発な政治活動を行ってきた。自らの帰属意識として「シロンスク人」を挙げる者も多く、2011年の国勢調査では国民のおよそ2%（約817,000人）が「シロンスク」の帰属を選択している。この事実にも拘らず、ポーランドは法的にシロンスク人のステータスに言及していない。また過去には2度、シロンスク・アイデンティティを標榜する市民団体が裁判所に公的団体としての登録を拒否された事例もある。こうした事例は欧州評議会も知るところであり、評議会は枠組条約モニタリングを通じて、シロンスク人のステータス付与を考慮するようポーランドに呼びかけてきた。これに対してポーランドは、枠組条約の拘束範囲などを理由に、シロンスク人の法的認知について否定的な回答を続けている。

本研究では、これまでの枠組条約モニタリング、特に第4次サイクルにおいて、シロンスク問題がどのように議論されたかをまとめる。第3次サイクルまでの議論はすでに先行研究にまとめられているが、最新の第4次サイクルについては未だ分析されていないためである。考察の結果、第4次サイクルでは、アイデンティティや政策的ステータスに関する議論がこれまでのサイクルより減少したことが判明した。同時に第4次サイクルでは、少数者保護に関する国内法、議会での議席配分、選挙制度など、民主的手続きに関する言及が増加したことも判明した。

## 【書評】

石川達夫

## 『チェコ・ゴシックの輝き—ペストの闇から生まれた中世の光』

—LESK ČESKÉ GOTIKY—  
(成文社、2021年、190頁)

藤田教子

いつ終わるとも知れない疫病のパンデミックの最中にあり、我々の価値観は根底から覆されてしまった。先の見えない日々の中、過去にパンデミックを体験した人々はどうのように希望の光を見出してきたのか。本書には「死と不幸を免れない人間には光と慰めが必要だ」という石川氏の想念が込められており、我々はその「光と慰め」を芸術作品に求めた先人の試みを追体験することができる。

荘厳な聖ヴィート大聖堂のステンドグラスの表紙をめくると一種グロテスクな美しさをたたえる《クシヴァークのピエタ》が読者の目に飛び込む。《クシヴァークのピエタ》では聖衣の血痕は大きくその数も多く目立ち、この情景のむごたらしさを強調している。この《クシヴァークのピエタ》がチェコで生まれた背景を探ってゆく論の展開は推理小説を読み進むような臨場感を伴う。ゴシックの建築様式の構造やデザインの詳細にわたる解説を伴う広範囲にわたる調査記録は、神聖ローマ帝国の栄光とともに広がっていったチェコ・ゴシック様式の影響範囲の広さを如実に表している。

序章「闇と光のせめぎ合い」では中世のペストの闇とその闇を凌駕すべく救済の光としてゴシック様式が生じた経緯が説明される。ゴシック様式はフランスで誕生したが、幼少期をフランスで過ごし、国際的な感覚を身につけていたカレル四世の統治下、プラハ及びチェコはゴシック文化の拠点となった。ヤン・フスの宗教改革もイギリスのジョン・ウィクリフからの影響を受けたとされており、チェコ・ゴシック文化は国際交流の活性化を背景に中世チェコに繁栄をもたらした。国境を超え異国の文化を重要視する傾向からはヤン・アーモス・コメンスキーのような偉人も生み出された。チェコ・ゴシック様式は国際交流の恩恵を受けたのみならず、文化の発信源としての役割をも果たした。英語訳聖書がなかった時代、イングランド王リチャード二世に嫁いだアンナ（アン）がチェコから持参したラテン語・ドイツ語・チェコ語訳抄録福音書がジョン・ウィクリフの英語訳聖書にも影響を与えたとされていることは興味深い。チェコの領域は11世紀から神聖ローマ帝国の一部となり、カレル四世とその息子のヴァーツラフ四世の時代に数多くのゴシック様式のキリスト教及び世俗の建築、彫刻、絵画、

文学作品などがつくられたが、この時代に流行したペストの影響もあり、人々は「死」を身近な存在として認識し、「死」が具象的存在として表現される芸術作品も数多く作られた。チェコの聖職者を始め、カレル四世の肉親もペストの犠牲者となることを免れなかった。《クシヴァークのピエタ》を含め、チェコ・ゴシック様式の作品も「死」が日常的に存在する闇の中で救いを求める心から生まれたものであろうと指摘している。

第一章「チェコのゴシック教会堂とヴォールトのデザイン」では、ゴシック様式の遺産がプラハとチェコのみならず、チェコの東側のモラヴィア地方、かつてチェコ王国の一部であった現在のポーランドのシレジア地方など広範囲にわたって見いだされることが特筆される。ゴシック的精神の本質の一つである変化、多様性はその建築様式にも現われ、尖頭アーチの比率や束ね柱の束ね方及びその比率により、何百万もの変種を生じさせることとなった。「昇高性」「仰高性」はゴシック建築の大きな特徴であり、内部から見上げた天井は単に構造的な役割のみならず、装飾的・美的機能をも兼ね備えている。チェコ・ゴシック建築の特徴的な要素であるさまざまなヴォールトのデザインを、チェコ各地において現地調査することによりチェコ・ゴシックの多様性がそれぞれの個性を伴いどのように発展し、広がって行ったのか、詳細にわたり紹介されている。神聖ローマ帝国の広大な領土を建築家、芸術家、職人たちは自由に渡り歩き、彼らの個性的な才能がチェコの王や貴族たちに支援されたことにより、チェコ・ゴシック建築はそれぞれの独自性を保ちながら多様性を伴い広い領域に影響を与えることに成功した。

第二章「カレル四世とチェコ・ゴシックの遺産」では、まずプラハを中心にチェコをチェコ・ゴシックの遺産の宝庫へと導いたカレル四世の人生、功績、人柄、時代背景が紹介される。ルクセンブルク家のカレル四世はチェコ王と神聖ローマ皇帝を兼ね、プラハを神聖ローマ帝国の首都に定め、チェコ王国の黄金時代を築いた。幼少期をフランスの宮廷で過ごし、多言語を習得し、高度な教養を身につけていたので芸術にも造詣が深く、さらに信心深いキリスト教徒であったカレル四世は教会や聖職者を積極的に援助した。フランスの影響を受け、熱心な聖遺物崇敬者でもあり、プラハに多くの聖遺物を収集した。カレル四世は熱心な聖母マリア崇敬者であり、収集した聖遺物に血痕聖衣（磔刑死したイエスの血が付いた聖母マリアの衣）が含まれていたこと、さらにフランス王室の影響を受け聖遺物を公開する聖遺物展覧会行事をプラハで開催したことは、チェコ・ゴシック芸術に血痕聖衣のモチーフが導入されることへ繋がったとされる。「平和の大公」と称されたカレル四世は協定、婚姻政策に基づく外交を戦よりも優先していた。チェコが経済的にも文化的にも発展した背景にはこのようなカレル四世の平和政策があり、「カレルの平和」の時代、カレル四世は廃墟と化していたプラハ城を再建した他、プラハ大司教区、聖ヴィート大聖堂、プラハ大学、プラハ

新市街、プラハ橋（カレル橋）やカルルシュテイン城を設立、建設した。この章ではそれらの偉業に関して詳細が語られる。カレル四世は自身の威信を示すべく芸術を積極的に利用し、カレル四世の趣向から「皇帝様式」とも呼ばれる、量感に富む人物像を中心とする記念碑的な様式が形成された。1360年頃チェコに定着した「皇帝様式」は神聖ローマ帝国や同盟者たちの領土へと広まり、1370年代末以降ヨーロッパ諸国で「国際ゴシック様式」を生じさせ、やがてチェコの地においてカレル四世の息子のヴァーツラフ四世の時代に「美麗様式」となった。詩人フランチェスコ・ペトラルカが書簡に記したカレル四世及び周辺の卓越した人々の人文主義に基づく優雅な振舞いに関する文言はカレル四世本人のみならず、その周辺にも優れた文化人、芸術家たちが集結していたことを証明している。

第三章「チェコ・ゴシックの華、『美麗様式』の誕生と受難」では、カレル四世の息子のヴァーツラフ四世の時代に話題が移る。絵画において初期の「美麗様式」に影響を与えたのは、南ボヘミア地方トシェボニを支配し、チェコ・ゴシック様式の拡散に大いに貢献したチェコの大貴族ロジウムベルク家の祭壇画を描いたトシェボニの祭壇のマイスターであった。作品の特徴としては聖人・聖女たちの繊細な輪郭、半ば非物質化し、霊化して宙に浮きかかっているような軽やかさなどが挙げられる。「美麗様式」は写本の装飾にも影響を与え、装飾写本『ヴァーツラフ四世の聖書』が有名だが、この写本がドイツ語の翻訳写本に装飾されているところから、聖書をラテン語から俗語に訳すことを異端行為と断じたカレル四世と異なり、ヴァーツラフ四世が時勢の流れに乗じて、俗語訳の聖書を容認していた証拠ともなっている。カレル四世の死後、チェコでは再びペストが猛威を振るい、神聖ローマ皇帝であったヴァーツラフ四世は教会大分裂を平和裏に解決することが出来ず、幽閉された。さらにヤン・フスの改革派（フス派）とカトリック派の対立も激化した。失脚したヴァーツラフ四世の代わりに神聖ローマ皇帝になったジギスムント（ジクムント）が開催したコンスタンツ公会議でヤン・フスは異端宣告され火刑に処された。ヴァーツラフ四世の時代に生まれた「美麗様式」はこのような不穏で不安な情勢の中で育まれた。「国際ゴシック様式」のチェコ的分枝として位置づけられている「美麗様式」の重要なテーマの一つは聖母像（聖母子像）、「ピエタ」であった。中世の「ピエタ」には「垂直型」「水平型」そして対角線型ないし斜め型である「美麗様式型」があり、本書では数多くの例を挙げ中世の「ピエタ」の型が詳細に説明されている。チェコの「美麗様式」の「ピエタ」は「美しいピエタ」と称され、プラハで制作された像がヨーロッパ各地へと運ばれていたが、その大きな特徴は聖母が若き美少女として造形されていることと、その聖母の衣が血にまみれ、血痕聖衣のモチーフが明確に見られることであるという。初代プラハ大司教は聖母マリア崇敬を発展させたが、第三代プラハ大司教イェンシュテインのヤンは、さらに聖処女と呼ばれることもある聖母マリアを永遠に若く美しい少女、

すなわち乙女として造形すべきであると強調していた。そして先述の通り、聖母マリアの血痕聖衣はカレル四世により公開されていた。「血痕聖衣の聖母」と「美しい聖母」の交差——血痕聖衣と美少女という二つの要素の交差——の上に冒頭の写真で紹介されていたチェコ特有の「血痕聖衣の若く美しい聖母マリア」である《クシヴァークのピエタ》が誕生したとの石川氏の指摘には説得力がある。第三章ではチェコの宗教改革とゴシック美術の関りも論じられる。チェコではコンラート・ヴァルトハウゼル、ヤノフのマチェイ、アルフォンス・ムハの「スラヴ叙事詩」にも描かれているクロムニェジーシュのヤン・ミリーチなど、すでにヤン・フス以前にもチェコ語で改革的思想を唱えていた説教師たちが存在した。彼らの「美麗様式」に対する態度には温度差があるが、美化された聖母や聖女たちが本来伝えるべきキリストの受難の残酷な真実よりも、その美しさによって見る者に不適切な想いを抱かせ、むしろ罪を誘発する可能性があるという警告するヤン・フスの言説は、美化された聖母や聖女たちの誘惑的なまでの美しさを本能的に認めていたことをも示している。

第四章「チェコ・ゴシックの文学と音楽」では、多言語状況下におけるチェコ語文学及びチェコの音楽が紹介される。中世のチェコ、特にプラハの文化的特徴として挙げられるのは複数の言語や文化圏の重なり、すなわち複数の言語、文化が常に混在し、融合と葛藤を繰り返し、競合している状況である。民衆の多くは読み書きもできない状況にあったが、カレル四世やヴァーツラフ四世など少数の教養ある上層階級は通例ポリグロットであり、主にチェコ系、ドイツ系、ユダヤ系住民が共存していたため多言語状況が常態であった。そのため、チェコという土地で書かれた領域的なチェコ文学には、古教会スラヴ語文学、ラテン語文学、ドイツ語文学、チェコ語文学、ヘブライ語文学など、異なる言語で書かれたさまざまな文学があった。チェコ語で書かれた文学は1300年頃に始まったが、当初は他のヨーロッパの諸民族語文学と同様、文語であったラテン語に堪能な者たちがラテン語文学の素養を生かし俗語・地域語・民族語で書いたものであり、それらの作品は別の言語で書かれていても、互いに共通性や継続性を持ち、先行作品に対する応答や対抗関係が見られた。チェコの民族王朝ブシェミスル家の王たちもミンネゼンガー（宮廷歌人）から影響を受け、ドイツ語の詩創作が貴族の宮廷にも広がり、チェコでドイツ語詩の黄金時代が開花した時期もあったが、のちに政治的、経済的、文化的理由から勢力を増してきたドイツ人に対する反発がチェコの人々に民族の自己表象としての本格的なチェコ語文学を書かせることになり、それらは当然反ドイツ的な要素を含むこととなった。チェコ語で書かれた文学は人々の強い願いを反映し、虚構の物語をも含みつつチェコとスラヴの伝統をことさらに強調し、それをさまざまな表象によって顕示しようとした。おそらくはこの時期にチェコの最初の聖人にして第一の守護聖人であり、永遠の統治者としての聖ヴァーツラフのイメージが定着したものと推定される。このイメージは文学のみならず美術にも浸透



し、チェコ各地に聖ヴァーツラフ像が広まることとなった。聖ヴァーツラフに関してはカレル四世も聖ヴァーツラフ伝をラテン語で執筆していた。すでに旧約聖書の族長たちから自身に至るまでの連作絵画をカルルシュテイン城に描かせていたカレル四世は文学においても同様のことを試み、チェコの歴史を、自身の存在を「世界の」歴史の中に組み込むべく、新たな年代記を書かせた。この試みもまた国王・皇帝や王国・帝国の威信を高めるための「皇帝様式」の文学作品であったといえよう。また、中世には人間以外のものを擬人化して論争させる「論争」のジャンルがあり、中世チェコ・ドイツ語文学の傑作として知られる『ボヘミアの農夫』では「死」が、チェコ語で書かれた『織匠（恋人と不幸との争い）』では「不幸」が、それぞれ擬人化され、前者は妻を亡くした農夫と、後者は恋人に去られた男と論争する内容となっている。「論争」のジャンルはまた「死」を身近に感じた人々の「慰め」のジャンルでもあった。『織匠』は高度な哲学や神学といった「高文化」の要素をチェコ語文学に取り入れたものであったが、民衆的な要素をチェコ語文学に取り入れたチェコ・ゴシック演劇の『偽医者』では聖なる言葉であるラテン語と俗語・地域語・民族語であったチェコ語やドイツ語との混在、言語的な聖俗混交がみられるという。すでにカレル四世の時代から生じていた宗教改革的、異端的運動の影響を受け、説教や宗教的な著述で使用される言語にチェコ語が加えられていたが、この運動は宗教のみならず、言語・文学・文化一般をも変えていったという。散文を中心に、チェコ語で宗教的論説や説話集が書かれ、韻文ではチェコ語で聖歌がつけられた。ゴシック時代のチェコでも単旋律のグレゴリオ聖歌がラテン語で歌われることが一般的であったが、チェコ語で歌われる聖歌もあった。音楽においても文学と同様、ラテン語と俗語の混在、神聖なるものと世俗的なものの混在がみられた。多言語状況にあったチェコのゴシック時代、宗教改革的運動の推進者たちはラテン語のわからない民衆に寄り添うべく、チェコ語でさまざまな芸術活動をするようになり、チェコの文学と音楽の俗語・地域語・民族語化が進展した。

終章「光を求める闇」では、フランスのゴシック様式の誕生に際し、光への志向が意識されていたことが指摘される。「神は光なり」という聖書の文言を偽ディオニュシオスは「被造物が神に類似する程度に応じて神の光を分有しており、神の非物質的な光を内包している」と解釈した。そしてこの解釈がチェコの「美しい聖母」の誕生に影響を与えていた可能性もあるという。それは「光の美学」ともいうべきものであり、ゴシック大聖堂が「光の美学」に基づき神の世界をマクロに形象化したものであるとするならば、装飾写本はミクロに形象化したものであり、光は常に意識されていた。チェコ・ゴシック文化は外来のものとチェコのもの、国際性と民族性との交差の上に生じたが、その状況は神聖ローマ皇帝・チェコ王カレル四世の出自や、存在そのものを反映したものであった。ゴシック様式はやがて後のバロックにも影響を与え、チェコ・バロック様式とも融合してゆく。

複雑な時代背景、政治的情勢を含む内容であるが、さまざまな読者を想定した親切的な配慮が本書ではいたるところになされている。馴染みのない専門用語には、数多くの図版や写真が添えられ、複雑なカレル四世の親戚関係も略図で提示されるのみならず、その関係性がその度ごとに繰り返し説明される。付表として「カレルの戴冠式一覧」、「プラハの主なゴシック遺産」、「プラハ以外の主なゴシック遺産」、「南ボヘミア地方のゴシック宗教施設一覧」が提示され、さらに巻末ではプラハ・ゴシックの遺産を探访する補章の入手方法も紹介されている。数多くの美しい写真を伴う広範囲にわたる調査を基盤にした、緻密な研究には圧倒される。チェコ・ゴシック文化に関する膨大な情報を日本語で得ることが出来る本書は、この領域を研究している者にとってなによりもありがたい存在である。ゴシック様式においては、キリスト教の建築物が圧倒的に多いが、本書ではキリスト教関連施設のみならず、巻末の表ではゴシック様式のシナゴグも言及されている。少し補足するならば、そこで紹介された旧新シナゴグは聖アネシュカ修道院の側で働いていた王の石工組合職人たちによる建築を許された経緯を持っている。ユダヤ系の住民は当時、キリスト教徒と区別され、住居も含め王の所有財産として存在していたが、カレル四世に資金提供することで、優遇されたユダヤ教徒もいた。本書はゴシックのキリスト教的なものに焦点を当てて論じられているので、当然ではあるがユダヤ系住民に関してはほとんど言及されていない。微かな違和感を覚えたのは、プラハの歴史に陰ながら影響を与えていたユダヤコミュニティの歴史にも著者が関心を抱いてきたからにほかならない。不穏なヴァーツラフ四世の時代、ペストの責任を問われ生じた凄惨な大虐殺は後世に語り継がれているが、襲撃時にプラハのユダヤ人が救いを求め逃げ込んだのもコミュニティの中心にあった旧新シナゴグであった。後に栄華を極めたユダヤ人の富豪たちもゴシック様式やネオ・ゴシック様式を取り入れたシナゴグや建築物を次々と建てた。本書で指摘されたように、チェコ・ゴシック文化はさまざまな民族のさまざまな歴史を背景に帝都プラハを中心に栄え、ペストの闇の時代も後の時代もそこに住まう人々に「光と慰め」を与え続けたといえよう。

## 執筆者一覧

ABE, Kenichi / 阿部賢一

Associate Professor, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo  
/ 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

FUJITA, Takako / 藤田教子

Ph. D. Candidate, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo /  
東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

HATTORI, Fumiaki / 服部文昭

Professor Emeritus, Kyoto University / 京都大学名誉教授

ISHIKAWA, Tatsuo / 石川達夫

Professor, School of International Communication, Senshu University / 専修大学国際  
コミュニケーション学部教授

MARTCHEV, Milen

Specially Appointed Lecturer, Graduate School of Economics, Hitotsubashi University ·  
Lecturer, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo / 一橋大  
学経済学研究科特任講師 · 東京大学大学院人文社会系研究科非常勤講師

NAGAYO, Susumu / 長與進

Professor Emeritus, Waseda University / 早稲田大学名誉教授

NUMANO, Mitsuyoshi / 沼野充義

Professor Emeritus, University of Tokyo · Vice-president of Nagoya University of  
Foreign Studies / 東京大学名誉教授 · 名古屋外国語大学副学長

SADAKANE, Kazuhiro / 貞包和寛

Lecturer, Tokai University / 東海大学非常勤講師

SUGAWARA, Sho

Associate Professor, Faculty of Sociology, Kyoto Sangyo University / 京都産業大学現  
代社会学部准教授

TANAKA, Moriyasu

Lecturer, Ritsumeikan University / 立命館大学授業担当講師

YOVKOVA-SHII, Eleonora / ヨフコバ四位エレオノラ

Professor, Institute of Liberal Arts and Sciences, Toyama University / 富山大学教養教  
育院教授

ŽUBRINIĆ, Darko

Professor, Faculty of Electrical Engineering and Computing, University of Zagreb

## 活動記録 (2021年3月～2022年2月)

### 2020 年度日本スラヴ学研究会研究発表会

日時：2021年3月27日(土) 14:00-17:40

会場：オンライン開催

14:00-14:05 開会の辞 三谷恵子(本会企画編集委員長)

14:05-14:45 阿部賢一(東京大学)

「ヨゼフ・ユングマンの翻訳『アタラ』の社会的機能について」

[司会：大平陽一]

14:45-15:25 ブルナ・ルカーシュ(実践女子大学)

「エリアーショヴァーが見た昭和初期の日本——旅行日記その他の資料を中心に」

[司会：越野剛]

15:25-16:05 豊島美波(東京大学)

「ヴァーツラフ・ハヴェルの戯曲『ガーデンパーティー』における不条理——ナ・ザーブラドリ劇場との関連から」

[司会：小椋彩]

(休憩)

16:15-16:55 須藤輝彦(東京大学)

「ミラン・クンデラにおける成熟の問題——『生は彼方に』をめぐって」

[司会：木村英明]

16:55-17:35 石川達夫(専修大学)

「PDIC (Personal Dictionary) を用いたスラヴ語デジタル辞典のシステム——キリル文字使用ロシア語への応用」

[司会：三谷恵子]

17:35-17:40 閉会の辞 長興進(本会会長)

### 2021 年度日本スラヴ学研究会総会

日時：2021年6月26日 13:00-13:40

会場：オンライン開催

日本ロシア文学会・日本スラヴ学研究会共催シンポジウム・講演会

日時：2021年6月26日14:00-19:00

会場：オンライン開催

第1部 シンポジウム (14:00-17:20)

「記憶と創造の中の祖国・歴史・越境——ロシア・東欧における文化と変容」

14:00-14:10 開会挨拶

長與進 (日本スラヴ学研究会会長・早稲田大学名誉教授)

14:10-14:35 阿部賢一 (東京大学)

「ミラン・クンデラと翻訳」

14:35-15:00 菅原祥 (京都産業大学)

「炭鉱経験を再考する——ポーランド、カトヴィツェ郊外のアマチュア  
画家グループの考察から」

15:00-15:15 質疑応答

(休憩)

15:30-15:55 平松潤奈 (金沢大学)

「ソ連強制収容所とその記憶」

15:55-16:20 岩本和久 (札幌大学)

「現代ロシア・アートとグローバリズム」

16:20-16:45 井上暁子 (熊本大学)

「国境地帯の文学の挑戦——ずれを抱え込む空間から、ずれを引き起こす空間へ」

16:45-17:15 質疑応答

17:15-17:20 閉会挨拶

三谷恵子 (日本ロシア文学会会長・日本スラヴ学研究会企画編集委員長)

第2部 講演 (17:40-19:00)

沼野充義 (東京大学名誉教授・名古屋外国語大学副学長)

「亡命・ユートピア・世界——ロシア・東欧を超えて」

[司会：望月哲男 (北海道大学名誉教授・中央学院大学)]

シンポジウム「スラヴ世界の SF——K. チャペック『ロボット』初演 100 周年によせて」

日時：2021 年 11 月 28 日（日）14:00–16:45

会場：オンライン開催

司会：小椋彩（東洋大学）

14:00–14:10 開会挨拶 長興進（本会会長）

14:10–14:40 ブルナ・ルカーシュ（実践女子大学）

「人類の自縄自縛をテーマに——K. チャペックの『ロボット』と『山椒魚戦争』をめぐって」

14:40–15:10 越野剛（慶應義塾大学）

「社会主義リアリズムとソ連の SF ——カザンツェフを中心に」

15:10–15:20 質疑応答

（休憩）

15:30–16:00 ミレン・マルチェフ（東京大学）

「20 世紀後半のブルガリア SF ——『コスモス』が花を咲かせる、ディオロフが果実を得る」

16:00–16:30 菅原祥（京都産業大学）

「社会主義時代のポーランドの SF 映画：P. シュルキンの〈ディストピア四部作〉を中心に」

16:30–16:40 質疑応答

16:40–16:45 閉会挨拶 三谷恵子（本会企画編集委員長）

『スラヴ学論集』の編集

第 24 号は、2021 年 5 月 31 日に発行された。第 25 号（本号）は、2021 年 9 月に会員からの投稿を締め切り、投稿論文の査読結果を経て採否を決定し、最終的な編集作業を行った。

会員異動

入会 豊島美波（東京大学大学院、専門：チェコ文学・演劇）

退会 小田翔太

## 編集後記

『スラヴ学論集』25号をお届けします。

本来ならば、この編集後記は、企画編集委員長兼編集長だった三谷先生が書くべきところでしたが、三谷先生がご逝去され、急遽、副編集長の私が編集長代行をつとめることとなりました。気持ちの整理がつかないまま、三谷先生の残された仕事を引き継いで、一所懸命取り組んで参りました。

本号には、三谷恵子先生追悼記事5本、シンポジウムの報告2本、投稿論文3本、書評1本が掲載されています。

刊行にあたり、多くの方々に査読者・校閲者としてご負担をおかけいたしました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

また、編集長の仕事を途中から引き継いだ私には至らないところが多々あり多方面にご迷惑をおかけしましたが、日本スラヴ学研究会会長兼企画編集委員長の長與先生をはじめ、企画編集委員会の皆様や事務局の越野様の全面的なサポートがあり、無事25号をお届けする運びとなりました。皆様のご協力なくしては、この論集のスムーズな発行は不可能であったということの特筆して、感謝の言葉とさせていただきます。

今回も成文社の南里功氏には編集作業で多大なご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

ヨフコバ四位エレオノラ（編集委員長代行）

## 日本スラヴ学研究会会則

- 第1条 (名称) 本会は、日本スラヴ学研究会 (the Japan Society for the Study of Slavic Languages and Literatures) と称する。
- 第2条 (目的) 本会は、日本におけるスラヴの言語、文学、文化の研究発展に寄与し、研究者間の交流を促進することを目的とする。
- 第3条 (活動) 本会は、その目的達成のため、次の事業を行なう。  
(1) 研究発表会、講演会、シンポジウム等の開催。  
(2) 論集の発行。  
(3) その他本会が必要と認める事業。
- 第4条 (会員) 本会は、スラヴの言語、文学、文化の研究に携わる会員によって構成される。
- 第5条 (会員資格) 入会を希望する者は会員2名の推薦を受け、総会の承認を得るものとする。
- 第6条 (組織) 本会に次の機関を置く。  
総会 企画編集委員会 事務局
- 第7条 (総会) 総会は、毎年1回開催する。ただし、必要に応じて、臨時総会を開くことができる。
- 第8条 (役員) 本会に次の役員を置く。役員を選出は総会で行ない、任期は2年とする。再任を妨げないが、引き続いての再任は4年までとする (ただし他の役職から会長に就任する場合は除く)。  
会長 (1名) 企画編集委員長 (1名) 及び委員 (若干名)  
事務局長 (1名) 会計監査 (2名)
- 第9条 (会長) 会長は本会を代表し、総会を招集し、会務を統括する。
- 第10条 (企画編集委員長および委員会) 企画編集委員長は企画編集委員会を主宰する。企画編集委員会は、研究発表会等の企画および論集の編集を行なう。
- 第11条 (事務局) 事務局は、事務局長および事務局長が委嘱する事務局員から構成される。事務局は、研究発表会等の実施、論集の発行、会計および会の運営全般に関わる事務を行なう。
- 第12条 (事務局の所在地) 本会の事務局は、企画編集委員長が指定する場所に置く。
- 第13条 (会費) 会費は年額8千円とする。ただし、常勤職に就いていない者については年額6千円、院生および学部生は年額5千円とする。また、会費を2年間滞納した者は休会扱いとし、滞納分の支払いが確認できた段階で休会を解除する。
- 第14条 (会計年度) 本会の会計年度は5月1日に始まり、翌年4月30日をもって終わる。
- 第15条 (会則の変更) 本会の会則は、総会の決議によって変更される。

付記 本会則は2000年7月1日から施行される。

2003年6月28日一部改正。2010年6月19日一部改正。2012年6月23日一部改正。2016年6月11日一部改正。2017年6月17日一部改正。

(事務局の所在地) 2021年6月1日より

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1-1

慶應義塾大学文学部 越野剛 日本スラヴ学研究会事務局



## 『スラヴ学論集』 投稿規程

- 第1条 本誌は『スラヴ学論集』と称する。
- 第2条 本誌の投稿者は日本スラヴ学研究会の会員とする。
- 第3条 本誌の発行は原則として年1回とする。
- 第4条 本誌の編集は企画編集委員長の主宰する企画編集委員会が行なう。
- 第5条 企画編集委員会は原稿の採否についての審査を複数の会員に委嘱する。また必要があれば、会員以外にも審査を委嘱することができる。
- 第6条 本誌に掲載する原稿は以下のもので、いずれも未発表のものに限る。  
1) 研究論文 2) 研究ノート 3) 書評 4) その他(資料紹介、研究論文等の翻訳など)。
- 第7条 研究論文等の翻訳に関わる翻訳権等の手続きは原則として投稿者本人が行なう。
- 第8条 投稿原稿の分量は、研究論文3万字、研究ノート1万5千字、書評6千字を上限とし、外国語での原稿はそれに準じるものとする。なお、図表・写真を含む原稿、第6条4項に属する原稿の分量については、編集委員会が別に指示する。
- 第9条 研究論文には、言語的な校閲を経た論文執筆言語とは異なる言語の要旨を付す。

(2016年6月11日改訂)

## 日本スラヴ学研究会奨励賞に関する内規

- 第1条 (趣旨) 日本スラヴ学研究会は、若手と中堅の会員による研究を奨励するために、優れた学術書を受賞対象として、日本スラヴ学研究会奨励賞を設ける。
- 第2条 (対象) 毎年12月末日を基準日とし、原則としてこの基準日以前2年以内に刊行された研究書を対象とする。
- 第3条 (受賞者) 受賞者は原則として毎年1名以内とする。
- 第4条 (推薦) 会員は対象期間内に刊行された著書について、1人1点を推薦することができる。自薦、他薦いずれも可とする。推薦に当たっては400字程度の推薦理由を提出することとする。
- 第5条 (選考委員会) 選考は、日本スラヴ学研究会賞選考委員会（以下選考委員会と略記する）が行う。選考委員会は会長、企画編集委員長、編集委員長、他若干名で構成し、うち一名を委員長とする。
- 2 会長、企画編集委員長、編集委員長以外の委員および選考委員長は企画編集委員会が指名する。
- 3 委員の任期は2年間とする。ただし会則第8条にある役員の再任に関する規定に従うものとする。
- 第6条 (選考方法) 選考委員会は推薦された著書の中から受賞候補を決定し、企画編集委員会に報告する。企画編集委員会はこの結果を承けて受賞著書を決定する。
- 第7条 (表彰) 総会において授賞式を行い、受賞著書の著者に表彰状を授与する。また選考委員会による講評を当該年度の『スラヴ学論集』およびホームページに掲載する。

2014年6月14日制定

2018年6月30日一部改訂

日本スラヴ学研究会役員

(2021年6月改選、任期2年)

会長： 長與進

企画編集委員長：三谷恵子（学会誌編集委員長兼任）

企画編集委員： ○ヨフコバ四位エレオノラ      ○石川達夫      ○ローベル柊子  
○菅原祥      ○貞包和寛      菅井健太  
(○は編集委員)

事務局： 越野剛

会計： 菅井健太

会計監査： 大平陽一      堤正典

\* 2019年6月より本会企画編集委員長を務めておられた三谷恵子先生は、2022年1月17日にご逝去されました。同年2月9日の臨時企画編集委員会会議において、2022年6月の本会総会までの間、長與進会長が企画編集委員長を代行する旨が決定されました。

スラヴ学論集（旧：西スラヴ学論集）——第25号——

2022年5月31日発行

発行人 長興進  
発行 日本スラヴ学研究会  
制作 成文社

事務局：慶應義塾大学文学部  
越野剛 研究室  
日本スラヴ学研究会事務局

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1-1

Address: The Japan Society for the Study of Slavic  
Languages and Literatures c/o KOSHINO Go

Faculty of Literature

Keio University

4-1-1 Hiyoshi, Kohoku-ku, Yokohama, Kanagawa 223-8521, Japan

E-mail: slav@jssll.org